

これを全體の利益と混同するのが宜しくないのです。

全體の利益と部分の利益とを混す可からず

例へば北陸地方の或處に鐵道を敷きたい。其鐵道たる日本の利益といふ事から言ふとどうでも宜いものであると假定します。所が其地方の開発の爲には甚だ必要である是非架けて貰ひたいと斯う言ふとします。然るに鐵道省では豫算が切詰になつて他に爲すべき仕事は澤山あるからモット國全體の利益になる事から先きにやる、餘力が有れば遣りもしやうが、今は出來ない。それは一局部の問題である、それよりモット大なる利益を達す可き仕事は、幾らも残つて居る。それを捨て、やる譯にはいかなないと答へると假定します。其時に、イヤ此鐵道は地方的の問題のやうに見えるが、實は日本全體の利益になりますといふやうな口實を作つて、或は運動したり何かして、他の方面に向ふべき經費を持つて來て鐵道を造る爲に使ふといふ是れが即ち政略であります。之に反して、それは地方の利益には相違ありません。其鐵道を架けて貰ふよりは更に急なる事業が有るならば仕方が無い此方は見合せませうと、さう云ふ公明正大なる立場で行けば、それは政略ではありません、當然の主張であります。地方的問題の爲に運動するのは不可ない譯はありません、否日本では冷淡過ぎます、地方の人がモット地方の利益を主張するのは宜しいです、但

し、それを國全體の利益と混同し政略を弄するのは甚だ不可ません。政策と云ふのは其ではありません。

政策の目的は全體の利益

政策と云ふのは國民・社會の中に在る各種の利害關係の上に付きまして、全體の利益に最も合致する或特殊の利益を主に立て、事物の總ての成行を左右しやうとする一切の設備行動を稱するのです。人爲的であるといふことは政策も政略も同じです。政策は若し之が無ければさうならない事を政策を施す爲に變るもので、事物自然の成行を左右し、人爲を以て自然を制するのです。乍併其目的たる畢竟全體の利益を圖るのです。全體の利益を圖ると言ひましても全體の誰も彼も皆満足する遣り方といふものは殆どありません。理想としてはさう遣りたいけれ共其は先づ出來ないのです。そこで各種の利益の中で一番全體の利益に合しさうな利益を取つて之を助長する。故にさう云ふ政策を施す以上は、必ず或種の犠牲が其處に起ることは已むを得ないのです。

八方美人主義は不可能

八方美人主義と云ふのは到底出來ない。若し何處にも犠牲を生ぜしめまいといふやうな政治家ならば、

何もしないで無爲にして居るか、經濟上何も施設せず經濟政策を行はないで黙つて居る外はありません。さうすれば國の經濟は進歩しません。

關稅政策の一例

例へば經濟政策の中で肝要なのは、外國から這入つて來る品物に對する政策であります。之を關稅政策と申します。例へば我邦に於きましては今鐵に稅を掛ける、機械にも稅を掛ける、羊毛にも稅を掛ける。目的は其物の價を高くするにあります。此物を買ふ人は皆それが爲に迷惑を感じます。我々が着て居る物、我々が使つて居る物は殆んど皆關稅を拂つて居るものであります。舶來の文房具も皆稅が掛つて居る。赤坊の呑む舶來のミルクも可なり高い稅が掛つて居る。是れは或立場から申しますとどうも怪しからぬ、乳が無くて已むを得ずミルクを呑んで育つ子供から稅を取るなど随分酷いと云へば云へます。尤も高い關稅を拂ふまいと思へば味の悪いコンデンスミルクも有りませぬ。併し迎も舶來のミルク程良いのは出來ない。幾ら保護しても今日は未だ出來ないので、即ち確かに抵抗力の無い赤坊は犠牲に供せられて居る譯であります。乍併之を犠牲に供しても何年か後日本に於けるコンデンスミルクの製造業を發達せしめた方が宜い。安い良い國產のコンデンスミルクを後世の赤坊に供するには今の赤坊には氣の毒ながら犠

牲を拂はせると言ふ是れが政策であります。さう甘く行かないかも知れませんが、目的とする所は其處にあります。詰り今或犠牲を拂はせるのは、他日より大なる利益を授け得ると思ふからであります。是れが經濟上に於て言ふ所の政策であります。

政策の考は昔より在り

何れの時代にもさう云ふやうな政策と云ふ考へのない事は無いのです。殊に東洋などでは政治家の考へを以て事物の自然の進行を左右したことが澤山あります。東洋の政治家は動もすると自分の萬能力を信じて強いて人爲の政策を施します、自ら任じてやると云ふ風が有りました。

王安石太湖開墾の話

支那で申せば王安石と云ふやうな人は政治家としても偉い人で又經濟政策家としても随分色々な事を企てた人です。此王安石に就て面白い話があります。其は太宰春臺の『經濟錄』六第百十三頁にも、亦草間直方の『三貨圖彙』八第三頁にも載せてあります。今春臺の方を引いて見ます。『宋の代に王安石宰相にて天下の政を執し時、新田を好みければ、下より其事を願ひ望む者數多出來て種々の説をな

す、其中に或者太湖と云ふ五百里の湖を、水を落して新田に成さんと願ければ、安石悦で其事を創んと思けるに、客數多ありし日、客に對して其事を語出し、扱太湖の水をば如何にして落さんや、面々如何思給ふぞと問けるを、一座の客皆安石に語ひ或は頓に是非を辨へぬも有りて、答の未だ出ざるに、劉貢父といふ人、是こそ最易きことなれといひければ、安石さては如何にと問ふ、貢父が答に、太湖の水を落さんとならば、太湖の傍に、別に今一つ太湖程の湖を鑿たらば、太湖の水すなはち落べしといふ、安石も流石に學者なれば是を聞て忽ち悟り大に笑て罷みしとかや、是程のことは安石も知べき事なれども、利に惑て智の暗みたる也、貢父が別に又太湖を一つ鑿るべしといひしは、至極の道理必然也、元來地になくて叶はぬ天造の湖を乾して其代りを人の力にて作らねば、必ず天より作る也、されども此理は天を知り地を知りたる者ならでは會得せぬこと也、昔より水澤を填て平地となし、或は水を落して新田となせば、必ず其邊洪水の難多きこと異邦我朝其例多し」とあります。又た草間直方は同じ話を引いて、さて『米價の高下も金銀の融通も、天理の自然にて人力の儘には成り難し』と申して居ります。王安石は賢い人でしたから、一度は飛んでもない間違つたことを思ひ立つたのですが、劉貢父の一言に大笑して罷めました。而して王安石の埋めようとした太湖は數百年後の今日も依然としてあります。上海の直き近くにありまして、私も先年行つて見まして、此話を追懐致したことがあります。

『レッセ・フェール』の由來

西洋にも能く似た話があります。佛蘭西のコルベールといふ大政治家は、王安石にも勝る大手腕家で、國の富を増す爲めに種々の計劃を立てた人でありましたが、或時何かの機會に或事を計劃するについて、如何にしたら宜らうと民間に意見を徴しましたときに、或る故老が之に答へて『行くに任せよ、過ぐるに任せよ、爲すに任せよ世界は自ら運行す』laissez aller, laissez passer, laissez faire, le monde va de lui même と申したサウで、コレカラ『爲すに任せよ』レッセ・フェール主義（放任主義）と云ふ語が出たと申す言傳があります。

謬れる政策

王安石は極端な經濟政策家で、劉貢父と云ふ人は人爲の政策の愚なることを極端に言つて退けたのであります。太湖の水の溜るのは溜るべき譯が有つて溜る。之を人爲で取除ければ矢張り何處かに水が溜つて来る。一朝雨でも降れば水を押流して来る何もならない。之を遊ばして置くのは如何にも無駄なやうであるが、遊んで居るのは遊んで居るだけの理由が有つて遊んで居るのです。唯だ理窟から言つて政治家

が政策を以て事物の自然をさう無暗に動かして了へば、折角田を拓いても水が少し出て来れば其田は皆押流されて了ふのです。處が王安石以來今日まで幾百年も経つて居りますが、各國の政治家は相變らず劉貢父に笑はれるやうな事、太湖の水を干すに等しいやうなことを随分やつて居ります。我邦でも琵琶湖を埋めて田にせよと論じた人もあります、上野の不忍池を埋めて、大運動場とせよなどと馬鹿なことを唱へた人もあります。奢侈取締などと云ふことは、之れに似た愚案に屬するものが澤山にあります。

新らしい意味の經濟政策

兎に角經濟政策と云ふものゝ決して今日俄かに始まつた譯で無く昔からあつたとは明かでありませんが、最も適切な新しい意味に於ける經濟政策と云ふものは英國に對する獨逸の努力が具體的に代表して居るのであります。又此獨逸の經濟政策程有力に行はれた政策は少ないのであります。此度の大戰争になつてから獨逸の軍國主義は誠に怪しからん、ベルンハルデー、トライチエケなどと云ふ學者が此怪しからん主義の張本人であると云つて、英吉利や亞米利加などで今になつて其本を翻譯したりして、騒ぎ立て居りますが、是は如何に英米人が獨逸の思想の變遷を今まで知らなかつたかといふことを證明する一例であります。我々から言つたら何でも無いのであります。トライチエケが英吉利人に大變重要な學者であるやうに

見えるのは、政策といふことの意味を目前として、此の政策を應用し採用することを獨逸人に教へた點に在ります。乍併此意味に於ては、獨逸のトライチエケのみではありません。トライチエケは多數中の一人に過ぎないので、彼の外に澤山學者もあり政治家もあつて、政策の思想を鼓吹したのです。何しろ獨逸は非常に遅れて起つた國であります。非常に勤勉努力するにあらざれば、今日の世界の表に立つて第一等國となるとは出来ない。殊に英吉利の壘を摩さうと云ふには、非常な覺悟を要するのです。此意味に於て人為的の政策を行はなければならぬといふことを主張した學者は澤山あつて、其中で現在獨逸の政策を指導する者は誰かといふと、決してトライチエケや、ベルンハルデーでは無い、トライチエケやベルンハルデーは、英吉利人の眼には大變有力に見えるが、實際の獨逸人には彼等は餘り極端な事を言つたものであつて、獨逸人全體の心服を買ふに足らないのです。獨逸全體の思想を支配し、實際政治を支配して居る處の政策の考へは何であるかといふと、經濟政策が其の重なるものであります。

獨逸の經濟學は政策に偏す

此經濟政策は主として英吉利の經濟學に對する獨逸の反抗であります。ですから獨逸に於ける經濟學の進歩發達は専ら政策の方に在つて、前に申した第一の分科である經濟原論の方面には、單に部分的に止る

のであります、尤も壞太利を獨逸へ算入すれば可なり著しいものがあります。獨逸だけでは、全體に亘る理論の研究は人の想像する程進んで居るではありません。殊に近頃の哲學かぶれの似而非經濟論に至つては、寧ろ退歩と見る可きものであります。獨逸の學問が非常に進歩したといふのも、純正經濟學・理論經濟學ではありません、獨逸に於て磨き出されてありますのは、専ら政策の問題、殊に商業政策即ち自由主義に對する保護主義、工業を唯一の國是とするに對して、工業もだが、農業も亦、保護して行く云ふ國是れであります。此意味に於ては、英吉利流の學問の好い處長所は澤山有りますが、又大なる弱點を持つて居ります。之に對して獨逸の經濟學と言へば、經濟政策・商業政策・農業政策が著しく重きをなして居ります。

國民經濟學の内容

原論と各論とを併せて國民經濟學と申します。コレハ前申した通りの次第で、單に經濟學（即ち狹義の經濟學）と申しても差支はないので、從來は左様でありました、將來とても其れで差支はありませんが、特に國民經濟と云ふことを力説する必要ありと考へらるゝ場合に、此語を冠せらるゝものと御承知を願ひます。所が世間では、此國民經濟と國家經濟とを混同するものが往々あります、此點は後に至り更に説明致

しますが、國民經濟と國家經濟とは決して混同してはならぬもので、國家經濟は國民經濟から見れば矢張一の單位で別の研究を要するのであります。

國家・企業及家計經濟學の略解

經濟諸學の中、現在の經濟に關する研究は、第一に國民經濟、第二に國家經濟、第三に企業經濟、第四に家計經濟、第五に世界經濟の五が有ります、夫々別の學問を形作る可き筈であります。國家・企業・家計の三者は國民經濟の單位でありますから、此れ等を研究する學問を總稱して單位經濟學と申して、一方には組織經濟學たる國民經濟學、他方には世界經濟學に對立せしめても宜しいと存じます。企業經濟學は、今日は經營學（之を普通農工商に分つ）として多少發達して來ましたが、未だ一の獨立した學問と認め得る程度には達して居りません。近頃獨逸で、私經濟學と名づけて居るものは、名異にし、實は此學のことを意味するのであります。私經濟學と云つても私人の家計即ち消費のことを研究するのではありません、此は別に家計學として取扱はれます。私經濟學の問題とするは營利的私經濟計りであります。故にこれを營利經濟學と名けても宜しいのです、營利經濟の組織は企業ですから、企業經濟學と稱へた方が分り善いのです。之に對する消費（私）經濟學は即ち家計經濟學であります。家計經濟學も家計學として少々

試みられて居りますが、是又幼稚極るものであります。之れに反し國家經濟に關する單位學は、財政學として、大に發達して、國民經濟學に對し優に獨立の門戸を張つて居ります。財政とは即ち國家經濟のことであり、國家經濟は國民經濟中最も大きな單位非常に大きな塊まりであります。故に國民經濟のことを知るには、此一番大きな塊りである國家經濟の事を、更らに深く立入つて知る必要が有ります。故に經濟學の發達と相提携して財政學も亦同時に發達して來たのであります。財政學は必竟國家の家政學であります。和蘭語に *Staathushoudkunde* (國家家政學) と申す字があります。尤も其れは獨逸語で *Statistik*、*Statistiklehre* と申したのと同じに、財政學のことでなく國民經濟學の事です。此點和蘭は未だ遙に後れて居るのです。但し財政學の其意味は此一事のみに盡きるものではありません。何故となれば、國家の財政は獨り己れの爲めにするのみでなく、國民經濟を組織して居る他の諸々の單位に重要な作用を有して居るものであります。殊に國家の收入は其大部分を諸々の他の經濟單位から強制的に無償的に得來するものであります。其強制徴收の種類方法等によつて、他の單位の經濟の立て方に著しい影響を及ぼすものであります。財政學は一面國家の家政を考究すると共に、他面此の方面のことを十分に研究せねばならぬものであります。

財政學と經濟學との關係は極めて密接

扱此國家經濟學又は國家家政學たる財政學は、國民經濟學と始終重大な關係を持つて居ります。我々が稼いで拵へた物、或は俸給を取る或は商賣をする或は金の利息を收める、何の所得があつても一部分は租税として國家に上納する、我々の賣買と貸借とは多くは國家の機關を利用しなければならぬ。土地を買へば登記所へ行つて登記する。金の貸借をすれば、收入印紙を證書に貼らなければならぬ。我等の財産が人の爲に侵害せられれば訴訟を起す、國家の機關である裁判所を用ひなければならぬ訴訟入費を拂はなければならぬ。若し我々が誤りがあれば刑法に觸れる、國家の機關たる裁判所で罰金を申付けられる。我々の財産や所得の中から罰金を納めなければならぬ。又直接に租税若くは罰金で無くても、專賣が段々多くなつて煙草も鹽も樟腦も專賣となり、我々の生活の重要品の供給を國家に仰ぐことになる、國家の財政が旨く行つて居れば我々はそんなに負擔しないで済むけれ共、國家の經濟が拙くなつて居る時には、重い荷を脊負はねばならぬ。國家の經濟に入費が要る、其入費は官業、官有財産の外には何處からも外から出やうが無い我々が出すより外に仕様が無い。であるから此國家の經濟運用如何は國家文の問題で無く、國民一般に關係が有る。三井三菱は金は多く持ち之に關係のある人も澤山あらうけれ共國民全體と關係があ

る譯ではない。彼等の仕事に儲らうが損しやうが、我々は痛痒を感じません。處が國家經濟の消長は直ぐに我々に關係します。殊に國家が一定の財政政策・租稅政策を立て、格別の方針に基いて各經濟單位間の所得分配の狀態に大なり小なり干渉することになると、其方針如何によりまして、國民經濟が全體として受ける影響は甚だ大なるものであります。如何なる國家と雖も、多少此意味に於いて一定の方針を立てないものはありません。或は其を十分意識して居ない場合はありませう、然し意識せずしてやつて居ても、其間自ら或種の方針、傾向は存するを免れないであります。例へば富者に厚く貧者に軽くするとか、中流階級を特惠するとか云ふようなことは、よくあることであります。更らに又、國家經濟は一の共同經濟と見る可きものでありまして、此點からは、他の單位とは、全く異なる任務を有するものであります。其事は後段第十二章に於いて詳述します。そこで國民經濟の事を研究するには、是非共同國家の經濟、即ち財政の事も知らねばならぬのです。是れ即ち經濟諸學の中に財政學が含まれる所以であります。

國家財政と地方財政

財政學は又之を二つに分ちまして、國家財政學と地方財政學と致します。即ち中央政府の財政を研究するものと各地方の縣或は市町村の經濟を研究する者とあります。我々は國家に對して直接稅間接稅を納めるのみならず地方稅を納めます。地方稅は國稅同様諸々の負擔になります。國家の經濟が幾ら甘く行つても地方の經濟、縣の經濟、市町村の經濟が拙くては駄目であります。其れが我々の頭上に掛つて來ます。然るに地方財政學は餘り發達しては居りませぬ。是れ是非モット發達せなければならぬものであります。殊に日本では地方稅の負擔がナカ／＼重くあります、稅の種類も中々澤山あります、國家財政の遺線上出來る丈負擔を地方に押付けると云ふ有様であります。一番分り易い例を舉げて見ますれば小學校の義務教育の負擔です。國民教育即ち小學教育の事を我邦では義務教育と稱へて居りますけれども、實は義務は受ける子供に在るので無くして國家に在るのであります。國家は國民に對して六歳から始めて六年の間教育を授けてやらねばならぬ義務を引受て居るものであります。子供の方から言へば教育を授けて呉れると要求する權利を持つて居る譯です。

義務教育實は權利教育

ですから私は數年前から義務教育と云ふ言葉は間違つて居る。權利教育と稱する方が適切であると主張して居ります。義務教育と言ふと權利教育と言ふとは同じことの様ですが抑もの考へ方見方が違ひます。權利教育と申せば國家に教育の義務が有ると云ふ點に重きが置かれます。従つて國家としては必ず履行し

なければならぬものであります。今日の文明國に於ても未だ國民に對し食たべさせてやる義務は認めて居りませぬ。苟くも國民として生れた者は、食べて行ける丈の事をしてやると云ふ義務は國家は認めて居りません、之を認む可しと言ふ人はあります。即ち何れ後段に御話しますが、國民の生存權を認む可しと云ふ是れであります。今日の國家は國民の生存權を認めて居りませんが、小學教育だけは國家が一般の國民に對して義務を認めて居るのであります。理想的に申しますれば、食べたることは勿論人間として生存して行くに必要なものならば、國家が之を保障して呉れるが一番宜いのです。澤山で無くとも我々の住む丈の土地は得られる、我々の這入る丈の家は粗末でも宜いから得られる、食べる丈の食物は最低限でも宜いを得られる。更に進んで教育・治療・醫藥、又た進んで高尚なる専門教育を受けらるゝと云ふ様になれば理想的國家であります。今日の國家は其の中小學教育だけは、全部其義務を認めて居ります。醫藥救済も一部分は之を認めて居ります。國家が直接やらす共日本では濟生會で自分の病氣を癒す力の無い人を治療してやります。社會全體に害を流すやうな傳染病は當人に力がなければ、國家が公の入費を以つて癒してやります。又た極貧民は養育院其の他の公の機關によりてどうと云ふ救済してやります。然し此等は部分的に認めるので、全部認めて居るのではありません。文明國何處へ行つても國家が全部認めて居る義務は國民教育であります。

國民教育の負擔を全部地方財政に課するは非

これは國家の義務であつて地方自治體の義務ではありません。故に地方自治體の經濟をして其經費の一部分の負擔を被らしむることは差支ないが、全部負擔せしめて國家は丸で負擔しないといふに至つては全く道理が無いのであります。國民教育に要する經費の或部分は、當然國家が負擔すべき筈のものと存じます。殊に日本におきましては監獄費は大體に於て國庫支辨になつて居ります。元地方支辨であつたものが國庫支辨になつたのです。社會に害をなす悪人を取捕まへて投り込んで置くのは國家が經費を出して居りますが、人を教育して善人にする事には國家の財政は關らないのです。唯時々表彰だとか選奨だとか言つて少しの事をやるに止まつて居ります。それで國家の務を盡したと考へて居るのは大變な間違ひと存じます。是れは畢竟地方財政が中央財政に壓迫せられて未だ反抗の力が無いからであります。地方には地方の仕事が澤山あります。少くとも國家當然の義務に屬して居るものは之を國家に譲つて、地方財政に餘裕を與へたいものですが、それを主張するだけの力が無いのです。此の如く中央財政と地方財政との權衡が取れて居ない事の如きは、日本財政學の重要な問題であります。(大正十三年附記。其後幸にも國庫が若干額の義務教育費負擔をするやうになりました。甚だ不十分ではありますが、兎に角國庫が當

然負擔す可き筈のものであると云ふ原則の認められたことは、甚だ喜びに堪へない次第であります。但し目下の負擔額は何の爲か譯の分らぬ西比利亞駐在費丈け位もない、誠に貧弱なものです。

統計學の意義及必要

話は元へ戻りまして、經濟諸學の中に含まれて居りませんが經濟學と始終相提携して居る學問が一つあります。其は統計學です。統計學は元々經濟學と離れて別な學問であります。實際に於ては經濟學を研究する人は統計學を研究して居る。否しなればならない姿になつて居ります。何となれば經濟の研究は統計によらなければならず、統計の問題は何れも經濟と密接な關係を持つて居るのであります。依つて統計學とは如何なる學であるかを略説致しませう。統計といふのは合計といふ意味の字であります。合計・統計・總計、皆同義語であります。統計は統る計は量る數へると云ふことで、統計學は數を以て量り得る限りに於て社會上の現象を網羅的に説明する學問であります。

網羅的と云ふが統計の生命

數を以て言ひ現はすことの出来ないものは、統計の問題になりません。併し數を以て言ひ現はし得る限り何でも研究すると云ふもので無く、統計學の對象は數を以て量り得る所の社會現象殊に大數現象（之を社會大數と名づけます）であります。而して其社會現象をどうでも宜いから集めて來ると云ふのではありません。一切を網羅しなければならぬのです。英語で申すと exhaustive 獨逸語ではエルシヨプフェンド (erschöpfend) 即ち有らゆる關係事項を悉く網羅して研究するのであります。其意味から言ふと、普通統計と稱するもので統計で無いものが随分あります。唯ホンの一部のものをチヨイ／＼調べた丈では眞の統計とは申されません。一部分丈けと全體とは大變違ふことがあります。一部分に就て見れば違つて居ても全體を統括して見ると左程違はないとが往々あります。又反對に一部分に就て變化がなくとも、全體は大いに變化して居る場合もあります。金澤市の人口一ヶ年の増減の總數は餘り殖えも減りもしない。十年前も今日も殆ど變らぬとした所で、日本全體は必ずしもさうで無いのであります。日本全體の人口は大變殖へて居ります。歐洲文明國は現在百人に付て一人殖えるのが大體の目安ですが、日本は其より殖えて居ります。是は日本全體を網羅的に調べた上で初て知る事が出来るので、石川縣丈け、又は金澤市丈け調べて得た結果は唯其地方の有様を知り得るだけであつて、日本人全體の殖える有様は窺ふとは出来ません。

人口調査の急要

それで統計の中肝要なのは所謂人口調査（我邦では、國勢調査と稱へます）であります。國中に有る丈の人間を皆調べ上げる一人も漏さず調べ上げる、是が人口調査（Census）と云ふものであります。所が我邦は文明國であり乍ら段々延期に延期を重ねた揚句、やつと大正九年十月一日になつて始めて、一週之れを行つたのみであります。尤も其れ以外に一地方一都市ではやつたことがあります。即ち東京市では先年不完全乍らやりました。神戸市・京都市・熊本市・佐渡郡・札幌區及臺灣でも致しました。然し日本全國に亘つて人口調査は未だ一度限りしか行はれません。普通に日本の人口は五千萬あるの六千萬あるのといつても、それは本當に正確なる數ではありません。戸籍原簿に擧がつて居る人口、警察署で調べる所の現在人口は夫々に違ひます、實際を調べ上げたら、餘程違ふことと思はれます。即ち今日の所謂人口總數なるものは甚だ不正確なるものであります。現に居る處の人間を一々勘定するので無ければ本當の正確なる人口の數は分らないのです。人口の總數が分らなければ、一切の人口統計の研究は不正確なるを免れませぬ。幸ひ第一回の國勢調査があつて、此等の點が餘程正確に分るやうになりましたが、然し眞に正確なるものを得やうとするには數回の調査を比較することが必要であります。願はくば、此後財政の都合などで定期を亂ることなく、毎五年なり毎十年なりに、十分徹底的な調査が續行せられて、人口の状態を的確に知り得るやうに致したいものであります。

經濟史の必要

近來發達した經濟諸學中の一分科は經濟史であります。前既に申上げた通り經濟上の事と云ふものは皆一朝一夕に出來たものではありません。段々長い間の發達の結果出來たものです。今日の國民經濟と云ふのも數百年掛つて出來た結果であります。今日我々が見て少しも怪しまない事でも、昔は丸で無かつたことも澤山あります。事實や現象は皆是れ歴史的發展の結果であります。是等の事實や現象の眞相を得やうと云ふには、どうしても歴史を調べなければならぬのであります。然るに従來の歴史といふものは、悉く皆政治史でありまして、國の主権者を中心とした歴史で、政治上の出來事のみを重に取扱つて居ります。主権者の下に居る無数の國民がどう云ふ生活をし、其生活がどう云ふ風に變遷したかといふ事は殆んど全く顧みられません。例へば大化の革新と云ふ政治上の出來事があります。然るに此の大化の革新ほどの位變化を國民の生活に及ぼしたかと云ふことは少しも調べて無いのであります。又た封建制度が起つて來たと云ふと其政治上の方面は能く調べて居るが、封建制度の根源をなして居る莊園といふものゝ實質、莊園の經濟上の組織なり性質なりといふものは、誠に僅かしか知られて居りません。歴史家は何時も雲の上の方面のみに着眼し際立つて卓出した英雄豪傑の事蹟は詰らない事までも調べます。所謂忠臣義

士となる日本國民の運命消長に大して關係の無い事でもさう云ふ人の行跡等を詮義します。が扱て一人の豪傑一個の忠臣を生み出した數百數十萬の日本國民は、當時どんな生活をなして居つたか、果して能く治つて居たか生活上樂であつたか、物價が高かつたか安かつたか、皆目分りません。經濟史と云ふのは即ち此等の事を研究する學問であります。故に之れを研究した上で無ければ、經濟上の事實は充分には分らないのです。従つて歐羅巴に於ては最近に至つては此學問は大いに發達して參りましたが、我日本では未だ誠に情ない有様に居るのであります。故に私共は常に其必要を特に力説したいと思ふものであります。

經濟學の研究法

經濟學の研究法を極く簡単に申述べます。英吉利の學者の舊來の通説では經濟學の研究は大抵演繹的に行つて行けば宜い、即ち誰人も疑はないやうな若干の原理原則を發見して、後は唯だ之を運用し、此原則に違ふ點丈を調べ上げればそれで宜いとして居ります、人間は大體に於て自分の利益を求むると云ふ念のみに驅られ居るもので、而して費用を成る丈け少くして結果を成る丈け多くするといふ原則を置いて、總ての事を是れから割り出して演繹して行けば宜いとするのであります。是れは或方面に大變に役に立ちます。英吉利に於て最も發達した銀行・金融・外國貿易等の問題を論ずるには、此演繹的研究法は随分役に立ちます。何故となれば銀行家・金融業者・貿易業者等と云ふ者は所謂黒人であります。だから今言ふ原理原則は殆んど除外例なく守ります。故に是等の問題を論ずるには、右申した通りの演繹的の法でそんなに外れないのであります。

演繹法の及ばぬ所

所が是等の問題以外になるとナカ／＼左様は參らないのであります。殊に家族經濟の立方などになると大きに違ひます。人間は唯經濟上の利害打算ばかりで動いて居るのでなく、利害の打算以外に習慣の支配があり、人情の顧慮があり、家族關係・愛國心・友情・宗教上の信仰もあり、學問上の主義もあり、其他色々なものが有つて、經濟上の働きを左右して居ります。商人が商賣上に於てやるやうな風に行かないのであります。金錢の計算上一番安く附く方法が有つても、愛國心の上から、或は宗教上から敢てしないことがあります。故に唯だ簡單なる若干の原理原則から事實を推及ぼして論ずるといふことは、全く事實に遠ざかる結果を生ずることになります。

歸納法の必要

そこで其反對に歸納的研究法と云ふものゝ必要が唱られる様になりました。即ち歸納法とは、手短かに申せば實際の事實、箇々の違つた場合を成る丈け漏れないやうに集めて、さうして其間に共通の點を見出すと云ふ研究方法であります。始から或原則を置いて是から推及ぼすので無く、箇々の様々な事實を先づ調べ上げて是れから論じ詰めて行くのであります。獨逸の經濟學は英吉利の演繹的研究法に反抗して、専ら此歸納的研究法を主張します。英吉利のやうに銀行・金融・貿易の發達して居る國と違つて、獨逸の様な國では、銀行・金融・貿易の事でさへも色々な事情、政治上・社會上・倫理上・道德上・宗教上・家族上色々な關係で左右せられて居るから、簡單なる若干の原理原則から論じ詰めるといふことは甚だ當を得ないのであります。箇々の事實を成る丈け澤山に集めて、慎重に研究し具體的の調査をし、夫から最後に原理原則を發見することを勉むる必要が有ります。今日では此歸納的研究法を主とするのが獨逸では認められて居ります。併し演繹的研究法を全然捨て、居る譯ではありません。宜しきに随つて兩者を兼ね用ふ可しといふことになつて居るのです。が扱て實際に當つては、言ふは易いが行ふは難いのであります。

今日の實際家は却て演繹論者

今日の有様を見ますと、實際家・實業家などの論ずる處は多くは演繹的のです。彼等は實際家だから實際的の議論をしさうなものだが、西洋でも日本でも實際家の經濟上の議論といふと兎角演繹的に流れます、甚だ不思議なやうですが、實は不思議ではありませぬ。所謂實業家、財界の有力者の議論をお聞きになつて御覽なさい、大抵は演繹的であります。多くは初めからチャンと獨斷を置いて、それに基いて議論をして居ります。

米價調節論

例へば先年問題となりました米價調節に關する議論の如き多くは左様であります。一派の人々は米價は十四圓より下げては不可ないと、斯う始めから定めて掛かります。何故十四圓から下げては不可ぬかといふ理由は一向説明して呉れません。一石十四圓より下げては不可ぬ譯は言はないで、此を動かさない所と斷定してそれから色々な議論をして居ります。農家が立行く爲め、十四圓でなければ不可いと云ふことは調査も研究も要らない事として簡單に定めて居ります。

在外正貨問題

又嘗て八釜しく論ぜられた在外正貨の問題の如きも兎角左様云ふ風でありました。日本は一時倫敦・紐

育に十數億圓の在外正貨を持つて居りました。そこで之をどうしやうかと云ふ事に付て、實業家の説が色々出ますが、其説は初めから在外正貨と云ふものはどう使つても構はないと定めて掛かつて居る様です。在外正貨は一體どうして出来たもので、其性質はどんなものであるかと云ふことは些とも考へて居ないのであります。唯だ茲に十幾億の金が出来た、一つ之を使はなくては不可ぬと定めて掛かります。所が使はなければならぬか問題であるのです。使へるとなればそれは色々な方法があります。然し在外正貨が十何億何千萬貯つたから直ぐ使はなければならぬといふ論は何處から出て來ますか、何の爲めに十何億何千萬と云ふ金が出来たか、其の出来た道行を考へて見なければ使つて宜いか悪いかは分らないのです。又た十幾億の在外正貨は、一體どう云ふ形に於て西洋に在るか誰も判然とは知らないのです。日本銀行及び大藏省中若干の人達が知つて居るのみで、外間の我々は知ることが出来ないのであります。政府も日本銀行も之を國民には教へて呉れないのです。然るに其判然と分らないものに付て大まかに其處分法を論じ合ふと云ふのは、其大膽や嘉す可きかも知れませんが、我々學問の上から考へますと、甚だ險呑に感ぜざるを得ないのであります。尤も此頃は、在内外總計の正貨高と其所有者及所在地の區別と丈は、月々公表することになつたやうであります（大正十三年附記。今日では其額さへも公表を差止めて仕舞ました）、在内外正貨は真正正銘に正貨（金貨及金塊）でありますが、在外正貨なるものは、決して左様ではない

ので、果して如何なる形の物となつて居るか、一向公表しない秘密であつて、我々國民の目の前には、得體の分らない代物であるのです。而も其の得體の分らない在外正貨中の一部は國內で發行する日本銀行兌換券の準備に在内外正貨と全く同資格で充てられて居るのです。加之斯く充てられたる在外正貨準備高が何程であるか一向我々に示して呉れないので、我々は唯だ間接に推算して見るに止るのです。試みに大正九年五月十五日の現在高として公表されたものをあげて見ますと、左の通りであります（此數字を最近のものに訂正したいのですが、前述の通り、一切金額の公表を停止した今日、其れは出来ませんから不得已舊版の數字を其儘に致し置き、別に公表停止前の最後の數字を下段に示して置きます）。

（單位百萬圓）

| | | | |
|----------|-------|-------------|-------|
| 正貨總額 | 一、八六〇 | 同日の日銀正貨準備額は | 一、六五三 |
| 所有者 日本銀行 | 九四九 | | 五二六 |
| 所在地 内 | 六七九 | 即ち在外正貨準備はな | 一、〇五七 |
| 外 | 一、一八一 | くなつて居ます。 | 四四五 |

即ち當時我邦所有の正貨總額十八億六千萬圓中、十一億八千萬圓が在外正貨であつたことだけは分りますが、其十一億餘の中政府がイクラ、日本銀行がイクラ持つて居るのかは、皆目分らないのです。然し政府は内地には、殆んど正貨の現物を持つて居なかつたと推測す可き理由がありますから、其所有高の

全部即ち九億千百萬圓を悉く海外に置いて居るものと看做しますと、111—111—270二億七千萬圓は日本銀行所有の在外正貨高となります。然るに右五月十五日に於ては、日本銀行の正貨準備高は九億千六百四十萬圓でありました。同日に日本國內にあつた正貨の高は六億七千九百萬圓に過ぎないのであります。假りに其全部が兌換準備に充てられてあるとしますと916,4—679—237,4一億三千七百四十萬圓は在外正貨を以て兌換準備に充てたものと推定し得るのです。即ち日本銀行所有の在外正貨總額二億七千萬圓の大部分は兌換準備に充てゝあるので、其以外の餘裕とは三千萬圓計りしかないのであります。斯う考へて來ると在外正貨を處分せよと云ふことは、政府に對しての問題であつて、日本銀行に對しての問題でなく、日本銀行に對する問題は、右様に國內にありませぬ正貨を準備として兌換券を發行することの不法、不埒を責む可き一點に歸着するのです。而も其大事な兌換準備たる在外正貨が如何なる状態に於てあるか、國民には秘してあると云ふことは、實に不都合千萬な事と云はねばならぬのであります。唯在外正貨の處分と云ふ丈で、問題の真相を究めないは、如何にも愚な話であることは、此れ丈でも御分りになつたことゝ存じます。

歴史派の意義

これは實際家實業家が經濟上の問題を演繹的に取扱ふと云ふことの最も適切な例として差支ないと存じます。其他豫算の問題や財政の問題でも矢張始終さうです。之が爲にどの位損して居るか分らぬ。何故といふと實業家とか財界の有力者とか云ふ者は勢力があります。慎重に考へて見れば實に成つて居らぬ處の説ですけれ共、兎に角人を以て言を探ると云ふのが世の中の常であります。詰らない事でも偉い人が言へば、何だか意味が有る様に取れます。そこで是等の演繹的獨斷説が動もすると蔓延ります。其爲に飛んでも無い損をします。米價調節在外正貨を始め經濟調査會等のやつた所謂調査の大部分がさうであります。あの遣り方で御やりになつて居る以上は逆も駄目であります。今から豫言しても差支ないと信じます（大正十三年附記。果して其の通りになりました。其後帝國經濟會議と云ふものが出来ましたが、矢張兄たり難く、弟たり難きもので、兎に角物になつたのは、其の社會部で調査決定した借地・借家臨時處理法のみで、跡は皆何の爲に貴重な時間を費やしたか、一向無意味なものであります）。是れ皆演繹的に經濟問題を取扱ふ處の弊であります。如何に智力の足らぬ能力の足らぬ者でも、歸納的に具體的に一々に調査すれば間違ふ事は少ないのであります。醫者が病人に對して腹が痛い熱が有るからと言つて無暗に藥を投ずるのは險呑です。名醫は周章て藥を投じないで多少病人は苦んでも、先づ何の爲に斯う云ふ病が起るかといふこの原因を探つて後初めて投藥します。歸納的研究法とは先づ斯う云ふ風なのを申すのであります。其に

は歴史と統計とに依ることが極めて必要であります。依つて之を歴史的・統計的研究法とも申します。

國民經濟思想の變遷

次に國民經濟思想發達の大勢を一寸御話します。遠く溯ればズツと昔から經濟に關した説、思想・學說と云ふものがあります。けれ共前にも申した通り今日言ふ經濟と云ふ思想は、歐羅巴で十六世紀國家自足經濟時代に初て起つたのであります。其意味から言ふと、經濟思想と云ふものは東洋の方が西洋より古く、遙かに優先權を持つて居ると申しても宜いかと存じます。支那に於きましては周漢の時代から經濟と云ふやうな考へは有りました、學者では管子（管仲）等になりますと、餘程進歩した經濟思想を持つて居ります。管子の輕重論と云ふものがあります。此の輕重論と云ふのは收支適合論であります。天下國家の經濟と云ふとの研究は支那では餘程早くから進んで居つた様であります。唯だ支那に於てはそれが永く停滞して其後發達を致しません。周の時代殊に周公の如きに至つては經濟上餘程進んだ考へを持つて、又之を實際に施した政治家と言つて宜しい様です。孔子の教の中にも經濟思想と云ふものは大分あります。孟子も大分經濟論を試みて居ります。之を希臘のプラトーン、アリストテレス時代の經濟論に比べて見ると各々特色が有ります。斯く餘程古くから經濟思想が發達して居つた様であります、それは今日の

經濟思想に直接に關係はありません。間接の遠い因縁があるだけですが、それは今日の

商賣は平和の戰爭なりとは謬想

今日の文明諸國の經濟殊に國民經濟の根本思想は十六世紀以來、即ちザツト四百年以來のことでありませす。歐羅巴諸國が各々鎬を削つて争ふて、自國を進めて他國を押潰さうとした時分に起つた考です。其經濟思想はどうしても喧嘩的競争的であります。所謂商賣は平和の戰爭なりといふ一言が能く言ひ表はして居ります。鐵砲を撃ち合つたり刀で斬り合つて自分の國を強くし、他の國を潰さうといふ様に、商賣では血は流さないが、人の國の利益を奪ひ自國の利益を増大することは矢張り同じであります。斯う云ふ考へから商業を平和の戰爭なりと言ひました。が此位間違つた馬鹿々々しい思想はありません。今でもさう云ふ謬想があるからこそ世界の平和が屢々破れるのです。處が實業家だの政治家だの云ふものは往々にして商賣は平和の戰爭なりといふことを言つて平氣で居ります。相當の見識の有る人までがそれであります。

商賣と戰爭とは全く別物

然し商賣と戦争とは根本から性質が違ひます。抑も人を殺したり城を屠つたり港を毀したりする、個人
 の行爲として此位恥づ可きことは無い。平常から人を殺す覺悟を持つて居り、人を殺す爲にサーベルや鐵
 砲を擔いで歩く、人を殺し人の城を屠る、個人としては悪い事をした者が、一番功勞が有つて金鷄勳章を
 持つ、是れは國家の爲にするからこそ貴ぶべきで、若し個人の爲にしたならば此位悪い事は無いのです。
 軍人のする事と云ふものは國の爲と云ふ事が有るに依つて高尚なものになるが、若し國の爲といふとが無
 くなつて了へば、あの位不都合な事は無いのです。あの位不名譽な仕事は無いのです、戦は軍人がする事
 です。若し國民が皆其れに従事したら其國は潰れて了ひます。能く世間で武士道は日本の精髄だといふ
 人がありますが、國民皆武士になつて了つては、誰も米を作る者も無ければ芋を作る者も無い、國民は餓
 死するのです。國民の一部分が人を殺す仕事をやつて居ればこそ大變難有いのです。皆がやつては大變で
 す。多數の國民が従軍章も貰へなければ金鷄勳章も貰へない、百姓に従事し商賣に従事し教育に従事し
 色々な事に従事して居るから、軍人が戰の稽古ばかりして居つても濟んで居るのです。

二宮翁の名言

二宮尊徳翁の二宮翁夜話に『諸職業中、又農を以て元とす、如何となれば、自ら作つて食ひ自ら織つて着

るの道を勤ればなり、此道は一國悉く是をなして差間無きの事業なればなり(中略)、凡そ事天下一同
 に之を爲して、閑なき業こそ大本なれ、夫官員の顯貴なるも、全國皆官員とならば如何、必ず立可からず、
 兵士の貴重なるも、國民悉く兵士とならば同く立可からず、工は缺く可からざるの職業なりといへど
 も、全國皆工ならば必ず立可からず、商となるも又同じ、然るに農は、大本なるを以て、全國の人民皆農
 となるも、閑なく立行く可し、然れば農は萬業の大本たる事是に於て明了なり(略)故に天下一般是をな
 して閑あるを末業とし、閑なきを本業とす、公明の論ならずや』活版本百六十七・八頁と書いてありますが、今日の
 時勢では、此言を其儘當嵌めることは無論出来ませぬ。國民皆百姓になつたら却つて困ります。百姓もあ
 れば、商人もあり、工業者もあつてこそ我々の生活は維持せられるのであります。然し二宮翁の言を擴張
 して生活維持に必要な一切の業を翁の農に代へれば、翁の言は實に味ふ可き名言であります。生活に必
 要な産業は國民皆之に従つて何の差間もありません、之に反し、國民皆軍人となり、武士となつては其國
 は亡びます。軍國主義とは其事であります。之に反し商賣は遣り方により悪い遣り方も有るでせうけれ共、
 遣り方さへ正しくば誰が何時やつても宜いものです。何處の國でやつても宜い、戦争はさうではありませ
 ん。適當な時機に於て戦ふ可き相手があつて戦つて初て戦争も宜い。無謀なる戰無名の帥を興したなら
 ば、其國に取つても民に取つても世界に取つても誰に取つても損計です。

武士道は非常道

即ち戦といふものは非常特別なものであります。商賣は極めて尋常和平なもので、丸るで行方が違ひます。然るに、商賣は平和の戦争なり杯と馬鹿なことを申して戦争の種類に書入れやうとするのは、飛んでも無い間違ひであります。武士道を以て國民道德の基礎としろなどと云ふのも飛んでも無い事です。さう云ふ間違つた考へが有るから商業道德が低いのです。相手は即ち敵だ、自國さへ利すれば外國は如何なつても構はぬ、粗製品・濫造品・贋造品・模造品をドシク作れ、儲りさへすれば宜い杯と考へては、商業は昌へるものではありません。處が歐洲に於て初て國家自足經濟の起つた時の考へは極めて惡辣なものであります。自國さへ富めば他の國は潰れやうが構はぬとして居りました。

自由主義經濟學の起り

然るに是がスツカリ變つて今日のやうな考へになつたのは十八世紀の終り、極く押詰つての事でありませす。即ち此時に於て近世經濟學の父と云れる人が英吉利に出て參りました。アダム・スミス(Adam Smith)と云ふ人でありませす。其以後にも澤山の學者がありますが、アダム・スミスが經濟學の父となつて居る。



スミス・ムダア
Adam Smith
(1723—1790)

實申すとアダム・スミスの先輩で殆んど先生位の地位に在つたヒューム (Hume) と云ふ大哲學者が思想上の開祖と申して宜しい人であります。併しヒュームはアダム・スミスに合併されて了つた形になつて今ではアダム・スミスのみが光つて居ります。アダム・スミスは外國はどんなに虐げても構はぬ、侵略しても構はぬ、商賣は平和の戦争であるといふ舊時代經濟思想をスツカリ打破りました。世界各國は皆御互に相利しやうとするもので無ければならぬ、それが本當に永久の利益で、他國を虐げて自國の利益ばかりを進めて行かうとするならば、それは僅かの間しか續かない結局損になるといふ事を唱へ出した。今日までも此思想が勝を占めて居るのであります。

反動起る

然るに十九世紀の終に方つて反動が起つて來ました。即ち英吉利にて有名な植民大臣チアンパレーンが政治界に勢力を得てから所謂 Imperialism (帝國主義) と云ふ者を唱へて、アダム・スミスの自由主義とは著しく傾きが違つて來ました。今やアダム・スミスが自由主義を唱へて以來百有餘年の間ズツと續いて來た自由主義的英吉利的經濟思想は大分變らうとして居るのです。どう變るかは何もハッキリ之を見る事が出來ませんが、獨逸には所謂獨逸流の世界政策あり、英吉利には英吉利の帝國主義が有り、亞米利

加でも亞米利加のモンロー主義、或は全亞米利加主義が有り色々ですが、何れも單純な自由主義に満足せず之を變へやうとする點は一つであります。

歐洲大戰の齎らせる一大轉機

斯くの如く、世界の經濟思想は一轉變をなさんとする機會が餘程熟して居つた時に歐洲大戰が起りました。此戰爭は經濟思想の上から言ふと此變遷を非常に早めたのです。どつちへ變るかは問題ですが、兎に角變遷の勢を早めました。然しイクラ變遷しても十六世紀・十七世紀時代の外國敵視主義の再興する事はありませんまい、唯アダム・スミス流の自由貿易一點張の思想は廢れて、主として國民經濟の確立、其獨立と統一の建立と云ふ事に重きを置く様になる事と存じます。



トッレガーマ母のスミス・ムダア
Margaert Smith
(née Douglas)

第二編 國民經濟の組織

第八章 國民經濟を組織なりと云ふことの眞意

誤解多し

前編に於て、經濟は組織でもあり、又活動でもあると云ふことを説明致しました。所が此組織と云ふことに就ては、中々誤解が多いのであります。此點を十分に正しく諒解しないと、今日の國民經濟の眞相を窺ふことが出来ないのであります。乃ち本編に於ては、此組織のことを、更に少しく立入つて御話を致します。

組織と有機體との差違

組織と云ふのは、英語で『オルガニゼーション』Organizationと申します。其意味は、有機的に結び付

けられた全體と云ふことであります。此字と能く似たものに有機體、英語で「オルガニズム」Organism とふ語があります。此二つの語は甚だ似て居りますが、決して同一物ではありません、之を混同してはいけないのであります。有機體と申せば、一の生物のことで、必ず一の生活の中樞を有して居つて、此中樞と關係がなくなつた部分は、直ぐ死んで仕舞ふものであります。言を換へて申すと、各部が一の生活中樞と結び付いて居つて、其で一體となつて生きて居るものが、有機體であります。人體は此くの如き一の有機體であります、手を切り放ち足を切り取れば、其手其足は生活の中樞と關係を絶たれて仕舞ひますから、手足は其と共に死んで仕舞ひます、身體からもぎ取られた手足が獨立して生きて居るとは決してありません。組織は是れとは違つて、全體の中或部分が離れても、其部分はずしも死んで仕舞ひません、元の通りに生きて行くことが出来ます。其と云ふのは、組織は一の生活中樞を有して居るものでないからであります。尤も前既に申した通りに、家族經濟・國家經濟及び企業經濟の如きに於ては、經濟主體と云ふものがあります、全體の意志を決定し、常に其全體を指導して居りますから、一寸考へると一の生活中樞がある様にも考へられますが、有機體の生活中樞とは大いに違つて居ります。個々の人間が家族の一員、國家の一員として居る間は主體とは切つても切れない關係がありますけれども、家族や國家を離れたとて、其人々は、必ずしも死んで仕舞ふ譯ではありません。猶太人の様に、國家を持たないでも幾百年の久しきに渉つて今日まで死絶えないうで永續して居るものがありますし、又國は亡びて他國に併呑せられても、其人民は木相變繁殖して行く印度人や、波蘭人の様なものもイクラもあります。家族から離れても生きて居る人の數は澤山あります。極端な例を申せば、親の爲めに捨られた棄兒でも、孤兒院で育てられて、立派に成人するものも不尠あります。妻に離れ、子に別れ、天涯の一孤客となつて大事業を起す人もあります。

兩者に共通の點

右の次第で、組織と有機體とは、決して同一物でないことが明かでありますが、又他方には兩者に共通の點があります。其れは即ち各部分相互に有機的に結付けられてあると云ふ一事であります。有機的に結付けられると云ふは、相互間に生命が通つて居る、單に烏合の衆でないことと云ふことで、石の塊を積んだ様でないのであります。石の山を成して居る此石と彼の石とは唯一つの所に置かれてあると云ふわけでありまして、相互間に生命が通つて居ませんから有機的に結び付けられて居るではありません、有機的に結付けられてあるものは其れとは違ひ、相互の間に生命が通つて居るのであります。

大なる組織の國民經濟には主體なし

同じく組織と申すも、國民經濟の組織は、又少しく違つた意味を持つて居ります。即ち前編に於て一寸申上げた様に、國民經濟と云ふ組織は大組織であつて、家族經濟や、企業經濟は、此の大組織中の小組織であります。無数の家族や、企業が集つて單位となつて、此の大きな組織たる國民經濟を形作つて居るのであります。其活動の本源は却つて、此等の單位にあるのであります。此等單位は夫々に主體を持つて居つて、一定の意思に基いて、秩序ある生活維持の活動を營んで居りますが、大きな組織である國民經濟には別に主體と申す可きものはないので、従つて統一的に意志を定め一定の秩序計劃を立てると云ふことがありません。唯各單位夫々に立てる所の秩序計劃が、集つて國民經濟の秩序計劃となるのであります。故に此點から申すと、國民經濟は統一の中心なき經濟、云はゞ一の無政府的狀態にあるものです。今日國民經濟に於て動もすると生産の過剰と云ふことが起ります。生産の過剰とは需要よりも生産の方が多から起るので、始からチャント需要の高を計つて置いて、一定の計劃を立て、之に基いて生産するならば、過剰などと云ふことは起る筈がないのであります。然るに、今日の國民經濟に於ては、生産者が準備可き確定の計劃が極まつて居るのでなく、各生産者が己が儘に見込を立て、今年はこの位賣れるだらう、

來年は彼の位需要があるだらうと推測して、生産に従事して居ります。其推測が必ず的中するとは限りません。見込違ひが往々起ります。左様云ふ場合に生産過剰とか、又は反對に生産不足とか起るのであります。此れ、今日の國民經濟に、一の中心意思・一の統一計劃のない明證であります。恐慌などの起るのも、其一部の原因は此點に存して居ります。一定の秩序計劃に基いて收支の適合を圖つて行くことが十分に出来れば、恐慌は起らないで済むのですが、其が缺けて居るから、適合が出来ないで、恐慌と云ふ變態が起るのであります。

社會主義の國民經濟改造論にも一理なきにあらず

故に、社會主義の學者は、恐慌とか生産過剰とか其の他の變態の起ることを根絶する爲めにも、今日の國民經濟の組織を改造して、其無政府的狀態を已めて、一定の中樞機關を設け、國民經濟運行上に統一的の秩序計劃の立つ様にす可しと主張するのであります。其れは將來の問題でありまして、果して論者の主張する様な社會が現出せられ得るか否かは、今日に於て何れとも云へないのであります。兎に角、實際の事實としては、國民經濟なる組織は決して有機體でないことは勿論、同じ組織の中でも最も漠然たるものであることは、之を事實として認むるの外はないのであります。乍併其組織の性質が漠然たるからと云

つて、國民經濟なる組織は、全然存せぬものと主張するものも、亦他の極端に馳せた説であります。從來の英國流の經濟學に於ては、此種の謬想が普く行はれて、國民經濟なる組織は全くないものとし、従つて國の經濟は單に各經濟單位の集合體又は總稱に過ぎぬものとし、家族經濟や、企業經濟が、分業と交換と云ふ二つの事によりて、雜然と集まつて居るものであると説いて居ります。是れ彼等の經濟學に於て、國民經濟と云ふ一事に、殆んど何等の重きを置かない所以であります。

ソコデ右兩極端説を學問上命名して前者を「有機體説」、後者を「個人主義説」と申します。歴史的に申すと後者の方が先に起り、次で前者が其反動として起つたものであります。故に先づ個人主義説の方から説明させよう。

個人主義の國民經濟觀

十八世紀に於て、社會政治の學問が發達し、經濟學も亦一科の學問として漸く成立しました時に於て、普く歐羅巴に行はれた哲學思想は所謂自然法説であります。自然法説とは、人間社會には自然に定まつた法規があつて、人は之に従ふものである。其の法規の前には各人は皆平等且自由であると申すのであります。かう云ふ考へが十八世紀に於て勢力を得るに至つたのは、深い理由のあることであります。歐洲の中世

に於ては、封建制度が行はれ、又基督教の極めて狹隘なる思想のみが人の心を支配して居りまして、凡てのもの皆權威と習慣とを以て束縛せられて居りました。従つて人間個人と云ふものは何等の價値なきもので、唯社會の習慣と上長の權威に服従す可く、其以外に人各々の自由意思杯と云ふものゝ發動することは、全然禁ぜられてありました。所が、十六世紀以後所謂啓蒙運動と云ふものが起り、個人の權威人格の自由を高唱し出しました。即ち、中世を支配した權威と習慣との暴力に對する反抗、個人の覺醒を促がしたのであります。宗教の上に於ては、羅馬法王の教權萬能を打破し、各個人自ら聖書を読み、自ら直ちに神に近づいて、自己の良心の命ずる所に従つて、自由なる信仰を養ひ、羅馬法王が之に干渉することを拒むと云ふ所謂新教が起り、政治上に於ては、封建諸侯の壓制に反對して人民の幸福を主とする様になつたので、其が又一般に學問上にも一の啓蒙運動となつて顯はれました。此啓蒙運動の進んだ形は即ち自然法説であります。

自然法説は革命論なり

自然法説は一の革命論であります、一の現状打破論であります。自然法と云ふ以上は、各人が各々自然法なりと信ずる所を主張することが出来るので、權力者が之を獨占する譯ではありません。之が自然法で

ある、此以外に自然法なしとは、誰人と雖も主張することは出来ません。元々人の心の中に存するものでありますから、各人勝手の解釋を下すことが出来るのであります。之が爲めに人の思想の自由を刺戟したことは、實に莫大なものであります。

現状維持と現状打破

人間の思想には、常に保守と急進、現状維持と現状打破との二の傾向があるものであります。時に従つて或は保守思想が勝を占め、又時あつてか反對に急進思想が勝を得るので、古來何千年の社會發達は、此の二の思想の互に勝敗する間に進んで來たものと見て大過ない事と存じます。自然法論は、即ち一の急進思想・一の現状打破論でありまして其の最も極端なるものとなれば、直に革命實行主義となるものであります。十八世紀の自然法説の行き詰つた所は、即ち佛國大革命となつたのであります。十九世紀の英佛の社會思想も・政治思想も、此大革命の影響を受くること甚だ大なるものであります。即ち其急進論は極端なる個人主義・自由主義となつて顯はれました。

「メルカンチリズム」に對する反動

經濟學の上に於ても、亦た同様でありまして自然法説から派出した自由主義・個人主義・自然主義は、所謂自然主義の經濟論となつて顯はれました。此れには當時に於て他の學問に於けるより、更に深い原因があつたのであります。即ち前章に於て一寸申して置きました通り、十六世紀から十八世紀に渉る歐洲の經濟思想は、國家自足主義でありました、之を學問上「メルカンチリズム（重商主義）」と名づけます。「メルカンチリズム」は、國家自足經濟の主義を實現する爲に極端なる干渉主義を取り、國民の經濟生活に非常に繁雜な命令を下し、一々政府の政策の下に立つて行動す可きこととし、國民の經濟上の自由と言ふものは、殆ど認められず、國民産業の活動は、唯だ國家の命の儘に、又國家の利益の爲めにのみ許されるに過ぎない有様でありました。故に自然法論的自由を待ち望むことは、經濟上に於て最も痛切であつたのです。ソコデ「メルカンチリズム」の正反對に自然法説に基いて起つて來た經濟論は佛國の「フキジオクラシー」論でありました。「フキジオクラシー」とは「自然の支配」と云ふ意味で、政府や執權者の利己的な政治を廢し、凡て事物の自然に任かすと云ふことで、つまり個人の自由活動を力説するものであります。今日の經濟學は、此「フキジオクラシー」に端を發するものでありまして、彼の經濟學の父と呼ばれるアダム・スミスは、此自由主義を完成した人でありまして、でありますから、アダム・スミスの説を承け繼いで居る英國の學者は、何れも皆個人主義説を探ります。是れが經濟學に於て國民經濟を組織と見る

ことが永く疎かにせられ、國民經濟は必竟個人經濟の集合體に外ならぬ、唯だ交換と分業の二者によりて國中無數の個人が結び付けられて居るのであると説く所以であります。此思想の誤りなることは、前章に於て粗ぼ説明致した通りであります。

有機體説の國民經濟觀

所が此個人主義に正反對の説が起りました、畢竟個人主義は一の反動説で極端論でありますから、或る時代に於て時弊を矯めるには大に役に立ちますが、何時迄も其説を墨守して居れば、却て新なる弊害を惹起します。個人主義説の爲めに惹起された弊害は澤山ありますが、殊に其甚だしいのは労働者に關する事柄であります。個人の自由と云ひますけれども、其は財産のあり、又地位のある個人の語で、財産もなく權力も持たぬものは、個人の自由と云ふ名の下に、却つて甚だしい壓制を蒙つて居ります。殊に労働者と雇主との關係を、個人の自由行動に一任すと云ふのは、其の實財産のあり力のある雇主に取つて都合の宜い計りで、財産もなければ力もないものに取つては自由と云ふのは名前計りで、實際は常に雇主の命の儘に、極めて不自由不平等な取扱を受けて甘ぜなければならぬのです。乃ち此等労働者の爲めを思ふ人が、猛然と起つて個人自由主義に反抗しました。其説は即ち有機體説で、主として所謂社會主義者が之を唱へます。

個人無視の謬想

有機體説とは、社會を以て一の有機體なりとする説です。社會が一の有機體なれば、國民經濟も亦一の有機體である、決して個人説の説く様に、單に個人經濟が分業と交換とで渾然と結付けられたものではない。個人は全體の中に吸収せられて殆んど無くなつて居る、我々の着眼すべきは、其一有機體を形作る國民經濟其ものであるのみであると主張するのであります。此説も亦一の反動的極端論でありまして正鵠を得て居りません。

正しき國民經濟觀

國民經濟は、單に各單位體の集合體でもなければ、又た單位の存在が、殆んど認められない程に全體に吸収せられてゐる一の有機體でもありません。國民經濟は一の組織であります。此組織は、各單位が雜然と機械的に集合して居るものでもなければ、さりとて此組織は單位を吸収し盡くして居る者でもありません。其中にある單位は、各々獨立して存在して居ます、否國民經濟の活動も繁榮も、畢竟此單位の活動と

繁榮とに依らなければ望む能はざるものです。各單位は、單に交換と分業と丈で結び付けられて居るのではなく、モット密接に有機的に結合して居るのであります。コレが國民經濟は組織なりと申すことの意味であります。

第九章 國民經濟の成立

歴史的觀察の必要

組織としての國民經濟は、昔から今日まで一貫して存在して居るものではありません。今日我々の經濟生活が非常に進歩した結果として漸く成立つたもので、畢竟は一の歴史的の階段に過ぎないのであります。昔は無かつたので、又將來永く此儘に繼續して行くものとも限らないのです。故に、我々は今日の國民經濟は、如何にして出来て来たかを、歴史的に考究して置かねばならぬのであります。此國民經濟の成立といふことを歴史的に考究することは、經濟史の最も重なる仕事でありまして、其必要を認むるに至つたのは、前にも申した通り所謂歴史的經濟學が起つてからのことであります。此研究を重ねて行きますと、前段に指摘して置きました個人主義説と、其の反對の極端である有機體説とが共に誤りであることも明瞭になります。

孤立の個人なし

人間社會の經濟生活は、自足經濟から起ることは、既に稍々委しく説明致しました。さて、此自足經濟は人間一人を立て、行くことは殆んど不可能であります。尤も特別な場合、例へばロビンソン・クルーソーの様に、絶海の孤島に唯一人漂着した場合の如きは、外に致し方がありませんから、唯一人で經濟を営みます。通例の場合に於ては、如何に文明の程度は低くとも、人間は何人か群居して、小さい乍らの社會を形作つて生活するもので、従つて生活維持の經營は、一人一人が孤立してやるものでなく、必ず何人が相合して、一の小さい組織を作つて其組織内に於て各々産業に従事するのであります。

孤立經濟に関する誤

此の組織は、今日の國民經濟とは大いに違ふものでありまして、此れよりも遙かに小さいものであります。而して、此の小さい組織は、自足自給の經濟を営んで居りまして、他の經濟と交渉することは全く無

いか、又あつても極めて稀であります。従つて一の經濟と他の經濟とが相合してより大なる組織を作ると云ふことがありませんので、各組織は自足的であると共に、孤立的であります。故に、學者によつては之れを孤立經濟時代とも名けます。併し、此語は誤解を招き易いのです。孤立と申しますと、何だか個人個人が孤立して經濟を營んで居る様に聞えますが、左様なことは斷じてあり得可からざることでもあります。孤立と云ふのは、小なる組織が孤立してゐると云ふ事で、決して個人が孤立して居る事ではありません。然るに個人主義經濟學では、之を個人の孤立と解釋して、人間の經濟の始めは個人の孤立經濟であつた、恰も洋中の孤島に於けるロビンソン・クルーソーや、エデンの花園に於けるアダムの如く、人各々孤立して食料を探し廻つたもので、文明の進歩につれて、漸く相互に團體を作るやうになつたのだと説きます。此れは歴史上の事實には少しも合ひません。又今日現在の自然民族、野蠻未開人に就て見ましても、世界何れの所にも、人間一人一人孤立して生活を營んで居るものは、之を見出すとが出来ないのであります。人間である以上は、必ず社會を作り、必ず何人か相合して共同の生活を營むものであります。孤立經濟時代と云ふ語は、此の個人主義的經濟觀と混同せられる虞れがありますから、成る可く用ひぬ方が宜しいと思ひます。

原始の經濟組織に関する二個の説

さて、此原始の小組織たる自足經濟は如何なるものでありましたらうか。此に就ては、種々の説がありますが、大別致すと二説に分れます。一は群團説（ホルデン・テオリー Hordentheorie）と申し、一は家族説（ファミリーエン・テオリー Familientheorie）と申します。家族説の方が古いので、群團説は十九世紀の半過ぎに起つた一の反動説でありまして、社會學者や社會主義者の間に一時大に流行りましたが、今日に於ては、學問上其れは維持の出来ない謬説と認められる様になりました。尤も今日と雖も、社會學者や、社會主義者や、又は其等の人々の説を受賣する學者の間には未だ全くは廢れて居りません。

群團説

群團説とは、人間の最原始の社會は、一の群團であつたと主張する説でありまして、従つて原始の經濟組織は群團的のものであつたと説くのであります。即ち、此説は人間の原始状態には家族なるものがなかつた。家族と云ふものは人類文明が餘程進んでから出来たものだ、決して原始的のものでないと申すのであります。然らば、家族がなかつたと云ふ論は何處から出て來るか尋ねますと、畢竟人類の幼稚なる時

代には、婚姻と云ふものがなかつたのだと申すことにあるのであります。今日の社會は婚姻によりて成立つ所の家族を單位として出來上つて居ります。此の婚姻の制度も決して萬世不易のものではなく、永い年月の發達の結果、今日の様な一夫一婦婚と云ふものが成立つたものなることは疑を容れないのであります。然るに、群團説によりますと段々昔に溯つて行くと、遂には婚姻と云ふ制度が全く存在しない時代に達すると云ふのであります。

無婚亂交の時代

此無婚姻時代を『プロミスキュエティー』Promiscuityの時代と申します。譯語に困りますが、つまり無婚状態、或は亂交時代とでも申す可きであります。即ち此の時代には、人間も獸類と同様に、男女入亂れて相交つて居つたので、一人の男と女（一夫一婦）又は一人の男と多數の女（一夫多婦）又は其反對に一人の女と多數の男（多夫一婦）とが、繼續的に一定の關係を保つと云ふが如きとはなかつたと申すのであります。ソコデ、一人の女は無數の男子に接しますから、犬や猫の様に子を産みましても、誰れの種であるか分らない、母親丈は分るけれども、父親は丸で分らないと申すのです。従つて、生れた子は唯母あるのみで皆父なし子であるから、自然母に従ひ母の家に育つ外はないので、其證據は昔は人の姓は皆

母に従つて定めてあつたと申します。成程支那でも昔の姓は皆女に従ふもので、姓と云ふ字からして女扁であります。支那古代の姓を調べて見ますと女扁の字が甚だ多いのであります。我邦でも子が母の家に入り、母の姓を冒した例は随分あつた様であります。ソコデ此の如く、男女間に一定の認められた繼續的關係がない以上、家族と云ふものゝ存在し様がないのであります。此の家族なく婚姻關係なく、唯漫然と同一の地域に住んで居る人類の一體を群團（ホルド）と名けるのであります。

氏の起源

此ホルドから氏と云ふものが出來たと申します。其次第は、唯雜然と一定の地域に住んで居る群團も、段々文明に進んで來ると、一種の政治體・社會體を形づくる、其一體が所謂氏となると申すので、氏とは凡て母に従つて共に生活する血族者の團體を申すのであります。我邦で氏と申すのに當るものは、希臘では『フラトリー』Patrie 羅馬では『ゲンス』gens 獨逸では『ジッペ』Sippe 又は『ゲシュレヒト』Geschlecht 蘇格蘭では『クラン』clan であります。此等は即ち群團から發達して來たものと申すのであります。父のない群團から發達して來たものであるから、氏は皆何れも母に従つて成立つて居るもので、其の母なるものが氏中の最高權威者であると申します。

母權制度

此を名づけて母權と申します。母權によりて結付けられて居る氏の制度を、氏族制度（ゲンチル・フェルフアツスング（Gentilverfassung）と名けます。自然民族の間に女の酋長を見ることが往々あるのは、此母權的氏族制度の遺物だと申します。又屢々其祖先は男ではなく女であると稱する民族を見出すこともあり。我邦でも天照皇大神は女性に涉らせらるゝと申す言傳であります（男性に御坐しませりと主張した學者も徳川時代にはありましたが）。又は九州には女の酋長で中々武力の強いものもあつたと云ふこととでありますし、現に神功皇后の如き卓越した女性も御坐しましたのであります。

其説は誤り

斯く人類社會には母權が行はれ、女が威張つて居たと云ふことは、今日の新しい女諸君が聞かれたら決して黙つては居ないことゝ存じます。現に歐羅巴の女權論者の中には、此群團説の學問上誤りなることゝ明なる今日、猶好んで此説を受賣りするものもありません。彼等に取つては誠に都合の宜しい説で、又同時に社會主義には持つて來いの説であるのであります。彼等は申す、人間は元來右の如くであつたのが、

男子の專横の爲めに今日の様に男尊女卑の社會となつて仕舞つた。我々は何も空想を抱くのではない、唯人間原始の状態に復舊せよとの正當の要求を主張するのみであると。成程、群團説が事實誤りなものなら、其主張は一應の道理がある譯ですが、其が誤りである以上は、矢張り空想の誇りは免れないのであります。然し、復舊でなく全く新しいことだとて、其が正當なれば一向差支ない譯であります。何も苦しんで、學問上明かに謬説と極まつて仕舞つた説の助けを借りるには及ばないので、群團説は誤謬であります。其を一々詳しく論ずると、一冊の書物を作らねばならぬ位ですから、今は手短かに學問上此説が捨られるに至つた理由を説明して見ませう。

婚姻なき社會なし

第一に人類の原始状態に於ては婚姻がなかつたといふことです。婚姻と云ふことには種々の形があります。一夫多妻（ポリガミー polygamy）もあれば一妻多夫（ポリアンドリー polyandry）もあり、又一夫一妻（モノガミー monogamy）もあります。兎に角男と女とが或は一生涯或は或時期を劃して繼續的に交りを持つこと、是が婚姻であります。必ずしも同棲しなければ婚姻ではないとは申されないので、昔殊に一夫多妻の場合に於ては、妻は其親の家に住まつて居て夫の方から通ふた例は往々あつたのです。

此習慣は實際餘程廣く行はれて、我邦の上古にも其事のあつたことは、古事記や書紀に載せてあります。無論婚姻關係の完きを望む點からは、同棲が必要でありますが、其は今日の狀態に就ての話で、昔は必ずしも左様ではなかつたのであります。併し其昔、男女同棲せざる時に於ても、其の女は誰でも通つて來る凡ての男に身を許すと云ふ譯ではなく、或る一定の男にのみ許すとすれば、其れは即ち婚姻であります。其關係が一生を通じて繼續すると云ふのが今日の原則ですが、昔は必ずしも一生と限つた譯ではなく、兎に角或る時期に涉つて繼續すれば其れが婚姻です。言を換へて申すと、同一時に於ては、唯一人の男に身を任せると云へば其が婚姻であるのです。彼の一妻多夫と云ふ事は、寧ろ例外で、多くは極く貧しい民族の間にのみ行はれた習慣ですが、此れとて其夫とする人は、二人とか三人とか定まつて居るので、誰れでも手當り任せと云ふ譯ではないのです。

飛驒白川の大家族

飛驒國白川村に大家族と云ふ一種變つた家族制度があつて、其風俗習慣は、右申述べた昔の家族制度に餘程似て居ることは、今日では可なり多くの人の知つて居る所であります。明治廿一年には藤森氏、同三十二年には本庄學士が其地に行かれて詳しく御調べになつて、夫々其結果を公にして居られます。藤森氏『飛驒國風俗』東京人類學會雜誌三ノ廿九、高木氏『飛驒の白川』社會一ノ九、本庄氏『飛驒白川の大家族制』同氏著『經濟史研究』四六一頁以下

私も大正七年の夏親しく其地へ參つて、大家族中の大家族と稱せられる白川村字御母衣の遠山喜代松と云ふ人の家へ一泊致し、又た長瀬・平瀬等と云ふ字へも參つて見ましたが、成程餘程變つた風俗の行はれて居る處です。白川村と云ふのは大野郡の最西部加賀との國境に在りまして、有名な白山は手に取るやうに眼の前に見え、前は莊川で射水川と云ふ川が流れて居まして、高い山と山との間の長く幅の狭い谷合であります。北は越中の城ヶ端に、南は美濃の正ヶ洞を経て白鳥に、東は莊川村の新淵を経て高山へ通ずる夫々一本の道がある計り、其れも南の方美濃へ出る道丈けが、稍々平易な峠である丈けで、高山へ出る道は三つも難澁な峠があります。全く行き詰りの山の奥ではありません、通り抜けは出来るのですが、其行路は今日と雖も辛うじて馬車を通ずると云ふに止まります。而して山の谷合であるせいか、米や麥は殆んど出来ません、主として稗が取れる丈け、其外には莊川で鱒が取れる位の極めて天然の恩恵を被ることの少い地方であります。私は此事情が大家族制度が今日まで存續する一大原因ではないかと想像するのであります。

其の系圖調

さて、其大家族と申すのは、一軒の家に十五人二十人の家族が合居して居つて、其れが何れも血族で、

| 字 名 | | | 大正五年 | 大正五年 | 大正七年 | 明治卅二年 |
|-------------|---|--------|------|------|------|-------|
| | | | 戸 | 籍 | 現 | 在 |
| 福 島 | 口 | 數 | 42 | — | 35 | — |
| | 戸 | 數 | 3 | — | 4 | 3 |
| | | 一戸平均口數 | 14 | — | 8.8 | 11.3 |
| 御 母 衣 | 口 | 數 | 94 | 73 | 100 | 92 |
| | 戸 | 數 | 4 | 4 | 5 | 4 |
| | | 一戸平均口數 | 23.5 | 18.3 | 20.0 | 23.0 |
| 長 瀬 | 口 | 數 | 224 | 159 | 222 | 287 |
| | 戸 | 數 | 11 | 11 | 14 | 16 |
| | | 一戸平均口數 | 20.4 | 14.5 | 15.9 | 17.9 |
| 平 瀬 | 口 | 數 | 131 | 72 | 129 | 162 |
| | 戸 | 數 | 10 | 5 | 17 | 7 |
| | | 一戸平均口數 | 13.1 | 14.4 | 7.6 | 23.1 |

戸籍上の現住調と戸口調の結果とを對照し、更らに之れに明治三十二年に於ける高木正義君の調査を比較して見ると左の通りであります。

右表を御一覽下されば直ぐ分る通り戸籍在籍者數、現在人口數共に警察の調査よりは口數が多くなつて居ります。警察の調は一翻新しくもあり又實際に近いのでありますから白川の大家族と一口に申しましても實際の口數は左まで多いのではありません。高木氏の調も實際の戸口によられたのではなく、戸籍面によられたのですから、假令二十年以前であるとは云へ、恐らく實際よりは口數が多く現はれて居るものと存じます。高木氏より十年の後、私より十年の前に實地調査せられた本庄學士の御論文に家族四十名以上のものとして載せてある實例に就て見ましても、私は現に其等の家へ參つて尋ねましたら、本庄學士の記されたより、實際の口數は少なかつたのであります。即ち學士が四十四名の口數ありとせらるゝ大字長瀬の大塚安太郎家では、戸籍の口數は三十四となつて居りますが、實際は二十七名しか居りません、學士が四十二名ありとせらるゝ同大字の中谷藤太郎家 現戸主は其長男の幸作氏であります。では在籍口數が三十五名で、實際は僅か十三名しか現存せず餘の二十一名は何れも他出して居ります。其の戸籍本は大正七年十一月三十日に作成して貰つたものであります、其れには死亡者が一人も載せてないのですから、本庄氏が行かれた明治四十三年以後に何人死んだか調べる事が出来ません、多分前戸主藤太郎氏死亡と共に戸籍原簿を書き改めたのでせう。大字御母衣の遠山家へは私も一泊まで致しましたが、本庄氏によると四十名あるとしてありますが、戸籍面には三十三名載せてあつて、實際は三十二名居りました。此の家が一番口數の多い家で、且つ種々な記事に適例として引いてある家であります。本庄氏御論文には家の構造圖がのせてあります。前に寫真に出した

のは實は此の家と其の全家族であります。即ち四十名以上の口數を有するものは一もないので、三十二名が最多數であります。其の外には少くとも前出四大字中には三十名以上の口數を有する大家族は一もありません。遠山家の次に多いのは、大字長瀬の山下家で在籍者二十八、内一人は出嫁、一人は他へ奉公して、現在者は二十六名であります。其次が、大字平瀬の坂次家で在籍者二十六名、現在者二十二名であります、跡は何れも二十名以下であります。本庄學士の行かれたより十年の後の事ですから、必ず他出者の數が殖えたに相違なく、又た自家・認知・出嫁等の新現象も増したことに存じますが、其れにしても、學士のあげられた數は少々多過ぎるやうに存じます。

最も著しい點

然し口數は、世に傳へられた程多くはないにしても、前に系圖調べで御覽の通り、我々の見て居る普通の家族とは、大いに趣きを異にして居るのであります。其最も著しいことは、戸主以外に妻と云ふものはなく、其他の男子には妻も子も見えて居らないこと、其反對に家族中の妙齡以上の女が大抵私生子を有して居ること之れであります。而して出嫁するものは極めて例外に屬するので、皆己の家に一生留つて居るのであります。戸主以外の男子に妻子の見えないのは、實際妻子がないのではなく、事實はあ

るのですが、其の妻を自家へ呼入れず表向きに婚姻することなく、單に私通關係に止まるので、其の私通の相手方たる女子は依然として其叔父なり従兄なり又は甥なりの戸主たる家に止つて居て、私通して出来た子供は、己の私生子として其の屬する家の中で生み、其の戸籍に屬せしめるのであります。是れ戸主以外の男子に妻子なく、女子には何れも私生子が附屬して居る所以であります。此頃は時々認知されて其家を出る子のあることは、前の系圖にも現はれて居ります。又偶には分家したり、嫁に行つたりする例もありますが、其れは今日とても寧ろ例外に屬するのであります。

婚姻なきに非ず

さて之れ丈けのことを申上げますと、私は白川の大家族をフロミスキユキテーに基く母權の例としてあげたものと御考へになる方があるかも知れません。否左様に主張する學者もあるのであります。私も親しく實地を見るまでは、或は左様ではないかとの疑を持つて居たのですが、さて能く調べて見ますと、却つて其反對であるのです。白川の大家族の實例は、一見母權制・雜婚制と見えるものも能く調べると決して左様でないことを見出すと云ふ事の適切な證據だと存するのであります。

白川大家族中の男子は成程公然婚姻もせず一牛同棲することもなく、共に子供を育てることもないので

すが、然し其の性的關係は決して濫りではないのです。一人の男と一人の女とがチャント極つて關係を結んで居るのであります。決して誰れでも手當り任せでないのみならず其關係は、都會や他地方の村落に於けるよりも、却つて鞏固なもので、妄りに相手を取換へるなどは致しません（尤も偶には不都合な男女のあることは無いとは申されませんが、其れは婚姻制度の確立して居る他の地方より多いとはないと云ふことを種々の人々から確聞しました）。従つて生れた子は法律上は私生子、家族内では日蔭者ではあります。即ちプロミスキユキテーは決して存して居らぬのであります。

母權の實なし

又決して母權の行はれて居るのでもありません。大家族の戸主は必ず男子でありまして、而もその戸主の權力は絶大なものであります。家族の者は唯々其命を奉ずるので、一切の農作物は戸主のみに歸するもので、家族は一定の仕事以外、自力で得た収入（其れは極めて乏しいものです）のみを私有し得るのみで、其収入中から男は他家の私生子たる自分の子、又他家にある私通の相手たる女に貢いだり、女は己の私生子の爲めに費やしたりします。但し戸内の私生子は衣食一通りは戸主が之を與へるのであります。

資本制以上の労働掠奪

白川大家族は其殆んど一切の労働をあげて戸主に奉仕し、其報酬として食住を供せられる丈です。マルクスの所謂労働の掠奪は後に詳論は決して資本制生産社会に於てのみ、資本家のみによつて行はれるのではなく、此の如き幼稚なる生活をして居る大家族中に於ても行はれ居るのです、否資本の掠奪よりも遙に徹底的に掠奪するのです、マルクスの掠奪説の誤謬なることの絶好の一例としても白川の大家族は興味の深いものであります。今迄視察された諸君が此事に論及して居られないは、何故ですか、私は不思議に思ふのであります。

群團説を打破る一例

其れと同時に白川の大家族は決して、群團説を支持するものでなく、寧ろ之を打ち破る可き一例であることも、又十分に明かにされないのは残念千萬な事と存じます。少くとも此一例によつて、婚姻なき社会ありと主張することは、到底出来ず、却つて、事實上の婚姻は此くの如き原始的生活を送る白川大家族に於ても、チャント存して居ることを知り得るのであります。

生理上不可能

婚姻は人類あると共にありと申す可きです。其處が人間と獸と異なる所です。生理上、人間の女は同一時に多数の男に接するときは、妊娠の力を失つて仕舞ひ子を生まなくなるのです。娼婦が生殖力を失ふのを見ても知れます。如何に野蠻幼稚でも、人間は人間です、獸物とは違ひます。若し群團論者の主張する様に『プロミスキューピター』のみが行はれて居たなら、人類は疾くの昔に死に絶えて居る可き筈です。此一點を以てしても、無婚亂交時代なるものゝ存在は否定せなければならぬのです。

原始民族の婚姻制度

加之、群團母權論者が其説を立つる根拠を、歴史に照し又今日現在の未開人に就て能く吟味して見ると、何れも誤解又は附會に基くものなるを發見するのです。此の説が、一番有力の論據としてゐるものは、所謂團婚（グループ・マリエージ）と云つて、一の團體の男と他の團體の女とが、團體的に婚姻すると云ふ事實で、其れが布哇諸島に存在して居ると申すのです。然るに學者が段々研究した所によると、其は決して一般普通の現象ではなく、例外として行はるゝ所であります（臺灣土人の間には今日未だ多少其形跡

存して居る様です。即ち阿里山蕃の達邦社に於ては『結婚ハ多ク交換結婚ニシテ甲家ニ男子五人女子五人アリ乙家ニモ女子五人男子五人アル時ハ甲家の長男ト乙家ノ長女娶シ次男ヲ次女ニ配スルガ如シ』。臨時臺灣調査會第一部蕃族調査報告書曹族阿里山蕃第七十四頁であるそうです。白川の大家族間にも相似寄つたことがあることは系圖にあげたI家とO家とを並べて見ても分りますし、又我々の近くにも似たことがあります。兄の妻の妹が弟の妻である例は珍らしいことではありません。原則としては矢張り一人の男と一人又は數人の女とが繼續的に關係を結ぶことが普通なるを見出すのです。次に又生れた子が母に從ふと云ふは決して父が知れないからではなく、女は多く自己の家に在つて夫の通ひ來るを待つと云ふ習慣から起ること、母權論者の云ふ様に、母が至上の權を握ると云ふとはなく、矢張り家の中では男子が權力を持て居るのであります(母が權を持つ場合もありますが其は却つて例外に屬します)。故に母權ではなく正しくは母系(母に從つて系統を定めること)と申す可きで、其は婚姻の存在しない證據とはならないのであります。白川の大家族は其最適例で、何れも母系ではありませんが、母權ではありません。

家族と氏族

右の次第で、群團説は今日は廢れまして、家族説が眞理なりと認められて居ります。原始の自足經濟は家族であつたのでありまして、群團でもなければ、又個人でもなかつたものと認められて居ります。唯其家族と云ふものは、必ずしも今日我々の有する家族とは同一物とは云へません、種々異なる點があります。殊に、氏の制度の廣く行はれて居る所にあつては、氏族の方が家族よりも重きを成して、婚姻は氏族の利益を本位として結ばれますし、經濟上の活動も氏族を中心として行はれます。即ち今日の様に夫婦と其の間に生れた子とで一の經濟單位を作るのではなく、一の氏族の中には、澤山の夫婦があつて、其等の人々が相合して一の自足經濟を成して居る、之を氏族自足經濟と名づけます。概して申すと、農業民族の間には、夙に此の氏族制度が行はれて、幾多の夫婦が合して一の自足經濟を作つて居りますが、其反對に狩獵牧畜民族にあつては早くから狭い意味の家族が一の自足經濟單位を形作つて居つたものであります。家族の形態は經濟上の生業によつて定まると申しても大過ないのです。氏族は必ず家族より後れて起つたと一概に斷定することは出来ないのです。羅馬では家族からゲンス即ち氏族に發達したとは有名なフユステル・ド・クランジュ氏の説ですが、其は羅馬人は主として狩獵民であつて、後に段々農業に移つたからであると存じます。

招婿婚と嫁娶婚

農業民族の間では、女は經濟上大に役に立つものであります。今日でも農家では妻は夫を助けて耕作に従事します。婦人有業者の割合は今日と雖も何れの生業よりも勝つて、農業に多いのであります。従つて農業民族に於ては、娘を他へ嫁として出すことは夫れ丈け貴重なる勞働力を失ふ所以でありますから之を好みません。娘は依然親の手許に止めて置いて勞働に従はせまします。殊に土地が貧弱で勞働を要すること多く、又は竈を分ける丈けの餘裕のない所では左様です。飛驒白川の大家族制に於いて、女子の出嫁も、男子の分家も共に爲さないので、畢竟之れが爲めと存じます。相當の年齢に達すれば、夫を持つことは許しますが、娘が夫の家に入ることを許しません。或は夫の方から娘の家へ入るか、或は夫は夜なく娘の處へ通つて來る様な制度を取ります。白川のは其原始的の一例ですが、稍進んだのは所謂招婚婚(俗に云ふ入婿)の風俗であります。臺灣の土人の間には今日でも猶此う云ふ習慣があります、舉げて見ませう。

曹族阿里山蕃の婚姻

「男子四五歳ニナルヤ、兩親ハ彼ノ爲ニ相當ノ配偶者ヲ定ム、之ヲ「ヤハングユ」ト云フ許嫁ノ事ナリ、其時男家ヨリ女家に反物一二尋ヲ贈ルヲ常トス、十四五歳ニ至リテ始メテ婚ヲ結ブ、サレド多クハ十歳頃ヨリ兩親ニ隠レテ、夜窃ニ女家ニ赴キテ肉交ヲ始ム、婚姻ニハ媒介者「トフソング」ヲ頼ムコトアレドモ、多クハ兩家ノ兩親ニテ取り定ム(略)。カクテ大凡二三日ヲ經レバ新夫婦は新婦ノ實家ニ赴キ居ルコト二三年、或ハ子ヲ生メバ男家ニ歸リテ、始メテ家族トナル、其の間新郎新婦ハ時々男家ニ歸リテ仕事シ、一泊或ハ二泊スルコトアリ、サレド女家ニ手不足ナル時ハ容易ニ新夫婦ヲ歸サズ」(臨時臺灣舊慣調査會第族阿里山蕃第七十三頁)

臺東廳アミス族の婚姻

「本族ノ婚姻ハ、男ガ女ノ家ニ入ルヲ例トシ、男ガ女ヲ娶ル場合ハ、始メ男ガ女ノ家ニ行キ、若干日ヲ經テ女ヲ伴ヒ歸ルヨリ「ミツオ」(附隨)ナル名稱ヲ生ジタルニアラズヤト察セラル、本族ノ婚姻ハ、男ガ女ノ家ニ入婚スルヲ正則トシ、女ガ男ノ家ニ入ルハ殆ンド絶無ノ變則ナリ」(同上第二卷二百十九頁)

臺東廳プユマ族の婚姻

「本族ハ婚姻ヲ「ブルマ」ト稱ス、招婚婚ヲ正則トシ、之レヲ「ムカムサバク」トイヒ、嫁娶婚ヲ變則トシ、「ピナクラバク」トイフ」(同上三百九十九頁)

阿眉族馬蘭社の婚姻

「當社ハ贅婚ヲ以テ法則トスレドモ、兩親ノ知ラザル間ニ他社ノ娘ト情交ヲ結び其娘ノ男家ニ來ルコトアレバ、男子ノ兩親非常ニ喜ビ子息ノ功ヲ賞揚スト云フ」(同上馬蘭社) (第四十五頁)

卑南族卑南社の婚姻

「一夫一婦ハ定則ナリ、然レドモ男子ハ必ず女家ニ婚入スル風習ナルヲ以テ、其結果稍婦ハ夫ニ勝ル權力アルヲ認め、金錢ノ出納ノ如キハ一ニ婦人ノ任トス」(同社第四) (十九頁)

阿眉族奇密社其他の婚姻

阿眉族奇密社「男ハ皆他家ニ婚入スルナリ、但シ女子ト雖モ兩親ノ許サヌ男ヲ夫ニ持ツ時ハ別家スルヲ常トス」(同社第五) (十九頁) 其他太巴壠社(同社第百) 同馬太鞍社(同二百) 馬里勿社(同二二) 皆右と大同小異であります。概して申せば、阿眉族にては男子は永久に女家に入り、曹族にては或期間女家に入り後男家に歸るので、始めから女が男の家に居るのは(即ち嫁娶婚)主としてタイヤル族丈けである様です。

タイヤル族の婚姻

「タイヤル族ノ婚姻ハ、女ガ男家ニ入ルヲ本則トシ、其反對ニ男ガ女家ニ入ルヲ變則トス、前者ハ即ち嫁娶ニシテ、後者ハ招婚ナリ、招婚ハ妻ヲ娶ル資力ナキモノ之ヲ爲シ、其數嫁娶ニ比スレバ甚ダ少シトス」(同書第一卷) (二百十一頁)

タイヤルと申すは、臺灣蕃族中最も獠猛な蠻人で、近い頃まで彼の恐る可き首狩りをやつて居つたもので、重に山奥深く棲んで狩に従事して居るものです。狩獵民間には男權が強いのが世界到る處に見る現象です、故にタイヤル族では嫁娶婚が行はれます。アミス族は何れも海岸に住んで居る土人で、曹族は早くから支那人に接觸して居つた土人です。何れも農業を営みますから、勞働力としての女を大事にして、原則としては招婚が行はれるものと存じます。同じ臺灣蠻族の間に、斯く種々の婚姻制度の行はれて居ることは、甚だ興味ある現象であります。が、其何れに於ても群團亂交の状態のないことも、亦注意す可きことでもあります。

女の經濟上の價值に依つて異なる

農業民族の間には、女が労働者として重寶がられ、従つて之を嫁として他家へやることを好まず、親の家に止め生れる子も皆其家の者とします。ソコで自ら氏の制度が普及し一夫婦の同棲を前提とする家族は認められないのです。其反對に狩獵民族の間には男のみが生業に従事し其權力は強く、且つ早くから私有財産の觀念又奴隸制度が發達しまして、他より女を取り之を奴隸又は財産として完全に私有します。従つて男權家族（パトリアーカル・ファミリー patriarchal family と稱す）が早くから發達するのであります（但し財産のないものは入聲となることタイヤル族の例の如くであります）。

鎖封的家族經濟

斯くの次第ですから、家族説と申しますが、實は氏族及家族説と命名した方が適當でありまして、人類原始の自足經濟は、狩獵民族の間に於ては家族であり、農業民族の間に於ては氏族であると申す可きであります。獨逸のブヒアーと云ふ學者は、之を總稱して鎖封的（孤立的）家族經濟（家族は家族と氏族を含む）と申して居ります。即ち氏なり、家族なり、兎に角一の孤立的排外的血族團體が一の自足經濟で營んで居ることを指して申すのであります。此れが人類經濟の第一期であります。

莊園經濟の事

然るに人類文明の進むに従ひ、政治的權力が發達し、また貧富の隔が大となり、同じ様な孤立的氏族又は家族の中で、自ら他に勝りて權力の強いものが起りました、之れが莊園と云ふものになります。莊園とは豪族の營む大規模の自足經濟であります。我邦でも所在に此くの如き土豪が起りまして、澤山の部曲と稱する私民を有し、又田莊と稱する私有地を占め、恰も一の獨立國の如くに自足經濟を立てました。ブヒアー氏は之を鎖封的莊園經濟と名けて居ります。然しこれは我邦や獨逸に就いては十分に認めることが出来ませんが、他の國他の社會に必ずしも共通な發達の徑路ではありません。つまり自足經濟の規模が段々擴大して行くと云ふことの一の現象でありまして、必ずしも莊園と云ふものになると限つたものではありません。

共同經濟起る

さて、兎にも角にも、人類は始めは或は氏族、或は家族を以て一の組織として、自足經濟を立て、居つて、他の組織と殆んど相交渉することなく、生産し消費しつゝ數百年を経過して來たものであります。其

中に、氏族と云ふものは、段々崩れて家族になつた場合が多いのであります。其れと云ふのは、多數の人の合同は經濟上の進歩に伴ひません、種々の點に於て不便不都合が起ります。又人間自然の要求として、個人の活動は擴張して行くものであります。併し、其れと共に他方には或る仕事を限つて目的とする共同經濟が起つて参ります。單位たる自足經濟の範圍が小さくなると共に、其自足的性質は段々崩れて、各單位が或る事業或目的の爲めに共同經濟を營む様になるのであります。ソコで我邦で申せば、五人組の制度とか、座の制度とか云ふものが起りました。西洋では『タイシング・コムパニー』(tithing company)と申す一種の共同納税團體や、又た『ギルド』(guild)と稱する商工業者の組合が起つて参つて、一方に自足經濟の自足的性質が大分薄らぐと共に、他方には澤山の經濟が寄り合つて一種の共同經濟を立てる様になつたのであります。私は之を自足本位の共同經濟時代と名けて、經濟發達の第二期と認めて宜しからうと思ふものであります。併し強て第二期とせず、第一期自足經濟時代の進歩したものと見る方が穩當かも知れません。

都市經濟の事

所が、此の自足本位の時代が全く一變して流通經濟時代に入る様になりました。プエヒアー氏は、之を

都市經濟時代と名けますが、其は獨逸丈に就て申せば、必ずしも不當ではありませんが、之を一般的の名稱とするのは宜しくないと思ひます。故に獨逸の學者中、之を改めて國民經濟成立の時代とか流通經濟の初期とか申して居る人もあります。然し何れの國でも、流通經濟は、先づ都市に於て殊に商工業に於て起つたのでありますから、都市經濟と云ふ名稱は参考としては大に取る可き所があります。我邦では都市經濟と申すよりも、寧ろ封建經濟とか各藩經濟とか申した方が適當でありませう。兎に角、都市なり、各藩なり、又獨逸で申せば領域(テリトリウム)、我邦の藩の經濟に能く似たものなり、稍と範圍の広い流通經濟が起つて段々自足經濟を崩した時代であります。

國家自足經濟

此の時代の次に來るものは即ち前編に於て説明致した國家自足經濟であります。而して國民經濟は此の國家自足經濟から發達して來たものであります。此點は既に多少説明を加へて置きましたから、今其れを繰返す必要はありません。

國民經濟完し

今日の國民經濟は、斯くの如く長い間種々の變遷を経て、漸く成立したものであります。個人主義の教へるやうに個人經濟と云ふものが、始めから今日まで一貫して来たものではありません。さりとて又た、其反對に國民經濟は、今日に於て一の有機體を成して居るものではありません。國民經濟を形作つて居る各單位は、夫々チャンと獨立を維持して居るので、其れ自らの生活力を持つて居ます。一の生活中樞があつて其と連絡して居なければ、各單位は直ぐに消滅して仕舞ふものではありません。

第十章 經濟の種類

二様の種類分け

經濟の種類は、今日に於て之を一性質の上からと、二形態の上からと、二つの立場から分ることが出来ます。性質の上から申すと、經濟には

- 一 綜合經濟、二 共同經濟、三 特殊(又は單位)經濟

の三種があり、形態の上から申すと、

- 一 家族經濟、二 企業經濟、三 團體經濟、四 國家經濟、五 國民經濟

の五種があります。

特殊經濟

特殊經濟とは、前に説明した經濟單位のことであり、即ち大きな組織を形作る所の單位たる小さな組織の經濟であります。言葉を換へて申せば、必ず一の經濟主體を有し、一定の意思の下に活動し、一定の秩序と計劃とを持つて居る生活維持の組織が特殊經濟であります。

個體經濟

此特殊經濟が、今日の國民經濟の個體でありますから、之を個體經濟(個人經濟とする人もありますが其は誤解を招き易いから、個體と申した方が宜しくあります)とも名づけれます。個體と云ふのは、英語で「インヂウキヂュアル」と申します。「イン」は「不」「デウキヂュアル」は可分物(ヂウキイド即ち割ると云ふ動詞から出て来た語です)の、「インヂウキヂュアル」とは不可分物と申す事です。割つて割つて最極點に達し、最早此以上に割ることの出来ないものがインヂウキヂュアル即ち個體です。國民經濟を

段々其各部に分解し、割つて割つて仕舞に切り切れないものに到達する、此が個體經濟であります。即ち家經濟は最も純粹の意味の個體特殊經濟であります、社會には種々の團結があります、會社もあれば政黨もある、學會もある法人もある。此等は不可分のものもあれば、可分のものもあります。政黨を分解散したとて、社會は大して痛痒を感じません。否今日我邦の政黨なるものが皆つぶれて仕舞つたとて、我々は何とも思はぬ、却つてつぶれて呉れた方が國利民福上宜いかも知れませぬ。會社となるとつぶれても少しも差支のないものもありますが、又つぶれては少し困るものもあります。然るに一國中にある家族が皆解散するとすると、其の國民經濟の活動は停止して仕舞ひます。尤も或る家族が解散したとて、其れが直ちに影響を及ぼす譯ではありませんが、今日の文明社會は、家族制度と私有財産制度とを二つの大黒柱として成立つて居るものでありますから、其の一本の柱が倒れては、社會は崩れる外はありません。此の意に於て家族經濟は個體經濟、即ち不可分單位であります。

家族は不可分の單位

今日の社會を改造しんと主張する社會主義は、二本の大黒柱の中私有財産制度を改造しんと主張しますが、家族制度を廢せよと主張するのは寧ろ少數であります。何故となれば、今日の社會に於て家族制度は

最も弊害の少ない、平等の理想に一番近いものであります、社會主義者と雖も之を根本的に否認するに及ばないからです。今日の國民經濟は、國民經濟として其の自分の生命の中樞を持つて居りません、生命の本源は此の個體經濟たる家族にあるのであります。國中無數の家族が一定の秩序計劃に基いて營々として活動して居るのが、國民經濟を維持して行く所以であります。有機體説の様に、家族が活力本源たることを否認して、社會其もの國民經濟其ものに活力本源があると云ふのは、事實に合しない空論であります。故に國民經濟の發達繁榮には、家族の神聖を尊重維持し、家族經濟の經濟的活動と獨立とを圖ることが、第一の肝要事であります。

歐洲も家族本位

我邦に一種の愚論が行はれまして、日本は家族本位の國である、歐洲諸國は家族本位でなく個人本位の國であると主張します。これは飛んでもない間違ひであります。歐洲の社會と雖も、其不可分の個體は家族でありまして決して個人ではありません、家族を分解して個人にして仕舞つて居るのではありません。社會を組立て、居る單位は、決して個人ではなく、個體不可分の家族であります。其點に於て日本も歐洲も少しも異なる所はないのです。無論歐洲では個人の活動が日本に於けるより發達し、又個人の權威を認

めることは日本よりも大であります。乍併社會の上より見れば、依然として其單位は家族であります。國民經濟の個體は家族經濟であります。決して文字通りの個人、個人經濟が單位ではありません。人が生活維持をするには、原則として家族を立て、其家族の組織の中で爲して居るので、各個人が一人々々で經濟を立て、居るものではありません。尤も歐洲に於ては、男も女も獨身者の割合が多いのですから、必ずしも凡ての人皆家族の中にあると云ふ譯ではありませんが、如何に歐洲とても其等は例外の人々で、國民の大多數は家族の中にあるもので、其が通則となつてゐることは、日本と少しも異ひはないのであります。一種の謬想から、家族の制度を否認したり、己の僻見から家族の破壊を主張したりするのは、今日の社會組織を根本的に改造しない限り空論であつて、國民經濟の健全なる進歩發達を害することになる外はないのであります。

企業經濟

特殊經濟には、家族の外に企業と國家とがあります。同じ特殊經濟でも、家族經濟と企業經濟とは大分赴きが異ひます。國家經濟に至つては殊に然りであります。家族經濟は直接に生活維持を圖る特殊經濟でありますが、企業も、國家も、共に間接に生活維持を圖るものであります。企業は、専ら物の生産を司

るものであります。純營利的の一組織です。家族は其性質として營利的のものではありません、尤も家族經濟の經營は、今日の營利經濟の生活に於て爲すものですから、個々の活動は營利的でなければなりません。家族經濟其ものは營利組織ではないのです。之に反し、企業は徹頭徹尾一の營利組織であります。従つて、國民經濟は營利經濟になればなる程、其活動其發展は獨り家族經濟のみならず、企業經濟に源を發することが多くなりました。而して前申した營利經濟の普及してゐる今日に於ては、進取的の活力は、寧ろ主として純營利的の組織たる企業から起つて來て、全國民經濟を活動せしむることになつて居るのであります。

特殊經濟としての國家經濟

國家經濟は一の特殊經濟ではありませんが、同時に又共同經濟たるものであります。即ち國家の家計維持と云ふ點から申せば、國家經濟は一の特殊經濟でありまして、家族經濟や、企業經濟と同じ地位を占めて居るものであります。言葉を換へて申すと、既に成立つて居る形態の上から見れば、國家經濟（即ち財政）は一の家計で、歳入歳出の均衡適合を主眼として居るものであります。今日の立憲國に就て申せば豫算を編成し、これに基いて財政の運用を爲す點に於て、國家の財政は一の大きな家計であるのです。殊に官

有財産の管理、官業の經營を爲して居る主體としての國家は、私人の家計や企業と同地位に立つて居るもので、時としては民業と相反する利益を以つて居て之れと競争するものです。京濱間の鐵道省の電車と、京濱電鐵會社の如きは、全く同等の地位に立つて競争的に營業して居るもので、此點に於ては國家經濟と企業とは特殊經濟たる廉は全く同じであります。此の點から見ても、國家經濟も亦一の個體特殊經濟と認めらるるのであります。

共同經濟としての國家經濟

然るに、國家の財政は其自らが目的であるのでなく、國家當然の目的から云へば一の手段であります。即ち一の營利組織たる企業とは異ひます。企業其ものが目的であります、國家は電車會社と競争して電車事業を營んで居りましても、其は國家其もの目的から云へば、一の手段としてやつて居るに過ぎないのであります。國家には、事業よりも更に高い目的があるのです。而して國家は此等の事業を經營したり、官有財産を所有したりすることは、寧ろ從たる收入方法であつて、國家經濟を支へる最も主要の財源は租税であります。是れは他の經濟に全く無い所の收入であります。租税とは相互關係でなく又た報酬關係でなく、國家の大權によつて他の經濟の收入の一部分を強制的に徵發するものを云ふのです。何故國

家が此くの如き徵發をするかと申せば、國家は國民各個の共同經濟組織であるからであります。昔にあつては、我々は我々の自足經濟で一切の用を充たして居りましたが、段々文明が進み社會的、又國家的生活が発達して來ますと、我々は自分丈で一切の用を辨じなくなり、辨じ度くとも辨じられないことが殖えて來ます。之を學問の語で共同欲望と申します。共同欲望とは共同體によつて始めて充たされ得るか、又は共同にやることによつてより能く充たさるゝ所の欲望を指して云ふのであります。

國家經濟の三方面

今日の國家は、我々に代つて、此の共同欲望を充たす爲めに働いて呉れるので、國家經濟は自分自身の爲めに存するのみでなく、國民の共同經濟組織として存するのであります。之を公共經濟とも稱します。つまり公共の利益を圖る所の共同經濟と云ふことです。従つて、國家は私人と少しも變らない營利事業を營みましても、其最終の目的は、此の公共の利益、公共欲望の充實と云ふことに存するのであります。従つて國家の營む營利事業は之を公企業と名けて、私企業とは異なつたものとして取扱ふのが正當であります。又國家は共同欲望充實に必要な事は収益を圖らずして經營します。此場合に二つあります、國家の設くる此等の機關を利用するものから何等の支拂を要求しないの無償主義と云ひます、利用者から支拂

を要求しますけれども其は唯だ實費の一部又は全部を支辨するに止めて、其以上收益を圖らないのを手數料主義と云ひます。故に國家經濟の行動には一無償主義、二手數料主義、三收益主義の三つがある譯であります。無償主義によるものは之を公經濟と名けます、手數料主義によるものは公營造物經濟と云ひます、收益主義によるものは公企業經濟と名づけます。

其他の共同經濟

ソコデ、性質上から見た第二種の共同經濟といふことの意味が御判りになることと思ひます。國家の共同經濟は共同經濟の代表的なるものであります。我々は此外に夫々の場合の必要に應じ大小各種の共同經濟を立てます。國家の公共同經濟に一番近いものは、自治體經濟であります。自治體も亦國家の如く、自治體の公共同經濟・公營造物經濟・公企業經濟を持つて居ります。之に續いては、各種の公法人がおります、組合もあります、衛生組合・水利組合・學校組合の如き其例であります。此等を總稱して團體經濟と申します。

國民經濟は綜合經濟なり

性質上の第三種たる綜合經濟とは、前に屢々大きな組織と申した其の經濟のことであります。即ち今日に於ては、國民經濟之れであります。國民經濟は無論特殊經濟ではありませんが、此の點は誤解する人は殆んどありませんから、別に説明は要りませんが、國民經濟を共同經濟だと思ひ、従つて國民經濟と國家經濟とを混同する人が尠からずあります。是れは十分明瞭に辨別することを要します。

國民經濟と國家經濟とを混同するは不可

國家經濟は一面に於て國家と云ふ一個體の家計でありますから、一の特種經濟でありますが、其抑もの目的の上から申すと、畢竟國民全體の共同生活上の組織でありますから、又一の大きな共同經濟であります。故に能く考へないで表面の事許りを見ると、國家の經濟は即ち國民全體の經濟の事かと見えます。これは大きな間違であります。日本國全體の經濟は、大正十三年九月二日決定更正豫算額十五億八千萬圓の收入支出を以て立て居る日本國家の經濟とは違ふ、モットずつと大きいのであります。十五億有餘を以て家計を立て居るのは政府の財政で、之れは日本國民經濟の一部に過ぎません。日本の國民經濟の收入支出は其何倍か分りませんが、是よりもズット大きいのであります。國家經濟は國民經濟中、一番大きな家計であるには相違ありませんが、決して同一物ではないのです。國民經濟は國家經濟を始めとし、各自自治體の經濟、其他の

共同經濟、其から多數の特殊經濟、即ち我々各自の家族經濟や、澤山の企業經濟此等一切を悉く綜合したものであります。故に綜合經濟と名くるのであります。苟くも、一國家の下にあり、其國家の人民が、其領土の上に於て立て、居る總ての經濟がスツカリ寄つて初めて國民經濟となるのであります。然るを、其中の一たるに過ぎない國家經濟と同一視するのは飛んでもない大誤謬であります。我邦で能く人が、何の事は國家經濟上得策なり、何々の事業は國家經濟に害あり等と申しますが、其意味は政府の財政に利あり害ありと云ふのではなく、日本全體の經濟即ち國民經濟に利あり害ありと申すのです。コレは語の誤用でありまして、其國家經濟と云ふのは、實は國民經濟と申さなければならぬのであります。此頃では新聞等でも此類の誤りは少くなりまして、國民經濟と云ふ語が稍々川ひられる様になりましたのは、此の語を早くから擴めることに心を川ひて居つた我々の喜びに堪へぬ處であります。此事は單に言語の問題ではありません、國民經濟と國家經濟とを混同するのは實際上に少からぬ弊害を生ずるのであります。

實例を以て説く

何故となれば、國家經濟の利害得失は、必ずしも國民經濟の利害得失と一致するものではありません。政府財政の都合上、或は租税を増徴したり、專賣制度を設けたり、鐵道を國有にしたりしますれば、其は

國家經濟上は得策であるでせうが、國民經濟上は害があることがイクラもあります。我邦の鹽の專賣の如き、國家經濟上・財政上甚だ都合の宜しい制度ではありませうが、國民經濟上には害があります。近頃も或學者が鹽の專賣は我日本の化學工業の發達に大害ありと論じて居りますが、其れは正しい議論かと存じます。

兩者調和の必要

國家經濟は元共同經濟たることが目的ですから、國民經濟と利益が相反することなかる可き筈ですが、既に國家經濟と云ふ一の家計を立て、居る以上、またの特殊經濟でありまして、自分の都合を先きにして、公共の利益を後にすることは兎角免れ難いのであります。特殊經濟としての國家經濟は他の特殊經濟と競争もすれば、利益の衝突もしまして、延て國民經濟上公共の利益と相反することもあるやうになります。近來、我邦でも財政經濟を壓迫すと云ふことを申しますのは即ち夫れです。又た、財政と經濟の調和を圖らざる可からずなどと申します、其れは即ち國家經濟と國民經濟の調和の意味であります。斯くの次第ですから、國家經濟と國民經濟とを同一視するのは危険なる誤謬たることが十分御分りであらうと存じます。

第十一章 國家と國民經濟

國家は國民經濟の地盤

國民經濟を以て、單に分業と交換とだけによつて機械的に結び付けられた個體經濟の集合と見ることに誤りなるは粗々説明致しました。英國流の學者は、經濟上の事柄に於ては國家と云ふものは無いものと看做して差支ない、資本の移動や労働の移動には國境なし、唯其需要大なる處を求めて移つて行くと云ふ風に説いて居ましたが、是は甚だしき誤謬であります。今日の我々の經濟生活には國家は密接な關係を有して居ります。否我々は何事を爲すにも國家の範圍内で營むのであつて、國家の法律や制度の爲に、或は大に助けられることもあり、又反對に大いに妨げられることもあるものです。故に獨逸の學者中には國家を以て最も重要な生産の要素と認め、土地・資本・労働・企業等と同じく之を生産要素として論ずる人もあります。私は此説に與しません。土地・資本・労働・企業等と國家とを同一視するのは、事の前後緩急を誤るものと存じます。國家並に其制度は經濟上からのみ見る可きものではありません、其元來の目的は他にあります。之に反し土地・資本・労働・企業等の生産要素たることは、純然經濟上のみ限られて居ることで、之を考究するのは一貫した一の經濟學の題目でなければなりません。性質上違つた點の甚だ多い國家を、之と同一列に置くのは道理上不都合たるは勿論、實際學問講究上甚だ不便な事でもあります。故に私は兩者を別々に觀察せねばならぬと存するものであります。

國家の制度と國民經濟

さて、國家が國民經濟に及ぼす影響を考へて見ますと、今日の國家は一切の經濟的活動の行はるゝ土臺を設け、凡ての經濟組織に其の準據す可き規模を與へるものであります。若し國家の制度が今日現存の有様と著るしく違つて参りますれば、他の經濟上の事實に何等の變化が起らなくとも、我々の生活維持の活動は、又た非常に變らなければなりません。此意味に於ては、後に説明致す可き生産要素の意味も、畢竟今日の國家と其制度とを前提して居るものであります。即ち國家は我々現在の文明的生活を可能ならしめる根本たりと申さねばならぬのであります。

扱國家が國民經濟に最も直接の影響を及ぼす點は、公的方面と私的方面の二つがあります。公的方面は即ち國家が人民を治める行政制度に於て現はれます、私的方面は國家が人民相互間の關係を規定する私法

制度に就て見るを得るのであります。今先づ行政制度のことを極く簡単に説明し、次に私法制度に就ては稍々詳しく御話をして見ませう。

行政組織と國民經濟

國家の行政は三つの點に於て國民經濟に影響致します。第一行政組織の性質、第二行政權の範圍、第三財務行政の性質、是れであります。

行政組織の性質が國民經濟に及ぼす著しい例は、英國と獨逸とを比較すると容易に之を知る事が出来ます。英國は自治制度の發達して居る國で、其行政の任務は名譽職たる自治體の議員等の手にあるものが多いのであります。反之獨逸は官僚政治の國でありまして、一定の官歴を経過したものでなければ行政上の重要な地位に就くことが出来ません。其結果英國に於ては經濟上營利事業に従事するものも、之に成效して富を作れば後には國の行政に干與する身分となれますが、獨逸にては實業界に一度身を投ずれば、唯其道に於て昇進することが出来るのみで、如何に成效したとて、後年に於て國の政務に干與することは出来ません（但し歐洲大戰後此點は餘程違つて來まして、實業界から一躍重要な官職に就く人も出来る様になりました）。故に政治に興味を有するものは、初めから官吏となつて立身することを圖らなければな

らぬので、同國に於ては優秀の青年は官吏登龍の門に蜚集しまして、實業界へは第二流以下の人物が向ひます。國內で職を得られないものは外國に招聘せられて、獨逸の學問と才能とを獨逸の競争者たるべき外國に賣ることになるのです。英國では此等の人才優秀は實業界に多く向ひます。故に、獨逸は生産要素の最も肝要なる人間を人間の儘で輸出する譯で、英國は之に反し、其人間を國內の産業に止め、其代り此等の人の生産した品物を外國へ輸出します。原料を輸出する國は、精製品を輸出する國には敵ひません、況や生産要素を其儘外國へ輸出する獨逸は、生産品完成品を輸出する英國に敵せないのであります。

行政の範圍

次に行政の範圍も英獨を比較すると大に違ひます。英國に於ては國家は成る可く民業を奪はぬ様に經濟上の仕事に於ては行政の範圍を小さくするに勉めますから、民間の活動は大であります。獨逸は之に反して、國家が經濟事業に自ら従事する範圍は大でありまして、従つて其れ丈け民業の活動を奪ふこととなります。

財政制度

第三に國家の行政には莫大な費用が要ります。國家の財政が國民經濟に重大な關係のあることは既に前に説明致しましたが、其財政制度組織の性質如何も重大な關係を持つて居ります。此點に於ても英國と獨逸とを比較すると甚だ興味があります。英國の財政は主として直接税を財源として居りますのに、獨逸帝國（聯邦は別です）の財政は間接税を主なる財源として居ります。即ち英國は財産あり所得多き階級に多く税をかけて居りますのに、獨逸の帝國財政は其れが出来ませんで、下民の負擔を重からしむる間接税によつて居るのであります。此は獨逸得有の事情から來るので、獨逸は帝國の出來る前に、各聯邦に於て夫々大抵の直接税を課して居ましたから、新に帝國が出來ても、モウ直接税を課す可き餘地がありませんでした。故に不得已關税を始め各種の間接税を以て帝國の財源に充てたのです。其爲め英國の財政は國民經濟の活動を害すること少く、獨逸の財政は大に之を妨げつゝあるのであります。此度の大戰争が濟んだ後に於ては、獨逸は此點に於て大に苦しむことと存じます（大正十三年附記。果して現在左様であります）。英國は成程莫大の負擔を蒙りましたが、其財政制度が元來殆んど理想的に健全に出來て居りますから、此負擔に堪へる能力は又大なるものであります。如何に獨逸が焦慮しても此點に於ては、逆も英國の足許へも寄り付くことは出來ないのであります。

私法制度と國民經濟

國家と國民經濟との關係に於ては、私法制度は國民經濟内に於る人間相互間の關係を規定し、其活動の根柢を定めるものであります。其の重要は殊に大であります。依つて少しく詳しく之れを説明致して見ませう。

今日の國家は私法制度によりて人民の行動に一定の道を指示して居ります。私法と申すは、専ら人民相互間の關係を定める法律のことを云ひます。其中經濟上に關係の深いのは、人格自由の制度と、私有財産制度でありまして、今日の文明國は何れも此二つのものを根本原則として認めて居ります。即ち法律の支配の下に、人民は完全なる人格的自由を享有して生活の維持に従事することが出來ると共に、又一定の富を自己の私有財産として獨占し、他人に侵されないので、國家は其あらゆる機關を以て之を保護することは是れであります。

自由起源説

昔に於ては、人格的自由は無かつたものです。此點に關して二個の相反せる學説があります。一は、人

間社會は始めは皆自由を以て始まるものと説きます。一は其反對に人間の原始社會には自由はなく、自由は今日の發達した文明に於て始めて之を見るものであると説くのです。第一の自由起源説は、佛蘭西の有名な學者モンテスキューと云ふ人が自由は獨逸の森林より出づと申して以來、少くとも今日の獨逸民族の原始社會は自由民の社會であつた。然るに段々抑壓を蒙つて此自由はなくなつたのだと申します。此立場から、百般の社會上經濟上の發達を觀察しますと、始めは皆自由民同志の間に起つた制度であつて、歴史的變遷とは要するに、此の原始的自由が段々無くなつて行く行程に外ならない様に見えます。經濟史上には久しく其説が行はれて居りまして、莊園の發達でも、私有財産制度の發達でも、將た亦同業組合の制度の發達でも、其端緒は皆自由民間の一制度であつたやうに説きました。従つて原始社會には平等主義の共產共有制度が行はれたものであるとの説が、一時大に勢力を占めました。畢竟原始社會には完全なる自由が認められて居たと云ふ一の前提から出て來るのでありまして、其前提が破れますと、其他の事も亦餘程疑はしくなつて來るのであります。原始社會は自由であつた、故に我々が今自由を要求するのは何も新しい事を要求するのではない。要するに復舊復權に外ならぬと云ふので、其れは主張者に取つては甚だ便利であります。恰も彼の母權論に基く女權恢復論と同一轍に出るものです。此の原始自由論は十八世紀の自然法論者が好んで主張する所で、今日の所謂自由主義は其輩に倣ふものであります。これは基督教で

人間の始祖アダムは元來無罪無垢のものであつたが、惡魔の誘惑によつて墮落して、今日の様な罪深い人間となつたと説くのと同じ事でありませぬ。又た漢學者流が、先王三代の世は道遺るを拾はず、誠に黄金時代であつたが、其れ以來世は段々澆季となつたと云ふのとも大に似た所があります。

歴史派の見解

自然法論の反對説は、即ち歴史派の説でありまして、事實に就て調べて見ると、成程昔の獨逸民族の間には自由が大に行はれて居たが、其自由は畢竟野蠻の自由である、其以來人間は墮落したのではない、人の智の進歩と共に歩一歩向上發展して來たものである。今日が一番理想に近い状態にあると申すのです。前申した通り、歴史派殊に所謂自然發展説と云ふものは、自然法論の現状打破論に對抗する現状謳歌少くとも現状辯護の論でありまして、改革を嫌ふ人々には大に歓迎せられる説であります。

兩説共に誤れり

右兩説共全部の眞理として請取る譯には參りませぬ。論者が賛否共に常に引合に出ず獨逸民族に就て見るに、成程自由を享有して居る公民もありましたが、大多數の人間は始めから自由を享受して居らなかつ

た事は事實疑ひを容れない所でありまして、經濟上の制度に就て申せば、今日まで連續として繼續して居る事柄は、殆んど皆自由のない人民の間から起つて居るのであります。さりとて歴史派の主張する様に、其以來常に唯だ向上進歩の一本筋ではなかつたので、大に自由が進んだ事もあるれば、又た反對に自由を失つた時代もあつて、一進一退一消一長様々の變化を経て來たものであります。而して今日と雖も決して眞に完全の自由計りが存して居る譯ではなく、名義上は自由であつても、事實上甚だ不自由な例がイクラもあるのです。

獨逸民族の原始的自由

獨逸民族は歐洲の中で其歴史が一番能く保存せられて、極く古い所までも多少知り得る便利がある民族ですが、此民族のみに就て見ましても、經濟上の制度は大抵奴隸の制度に源が發して居るのであります。自然法的自由論者は之れを墮落したのだと申しますが、何故左様に墮落したか、何故完全に自由を有して居たものが奴隸にまで落ち來つたか、其落ち來つた有様は如何であつたか等の事實は毫も之れを説明しないのです。説明しない筈です、説明は到底出來ないのです。又歴史派の學者は、此の奴隸制度は最原始の状態ではなく、其前に完全に自由の行はれた時代があると主張するのですが、其證據を擧げて呉れと申し

ても、是れ又擧げることには出來ないので。獨逸民族に就ての一番古い記事は、羅馬の英雄皇帝ケーザーの書残したガリア戰爭記、并に羅馬の大史家タキトスのゲルマニア志ですが、其記事によつて經濟上に完全なる自由が行はれた事は證明が立たないので。況してや所謂完全自由の状態から奴隸制度に移り行つたと云ふ其有様は丸で記してないのです。

獨逸民族に就ては右の通ですが、佛蘭西人や英吉利人となると、猶更以て奴隸時代の記事計で、毫も自由時代の形跡をだに見出すことが出來ないので、右の説は愈々疑ひを深くせしむるのみです。

故に、我々は原始時代に自由が行はれて居たとも居なかつたとも何れも斷言は出來ないので、原始社會當時の事は分らないと答へるの外はないのです。唯我々が確實に知り得ることは、今日までに見出された最古の記録に現はれて居る歐洲今日文明國民の古代状態は、決して自由の行はれて居た状態ではなく、却て反對に何れも奴隸制度や準奴隸制度が普く行はれて居る状態であることは是れであります。

奴隸制度

奴隸は種々の原因から生じます。戰の際捕虜にした敵兵を殺す代に奴隸として使つたり、犯罪人を奴隸にしたり、又時には借金返せぬものを奴隸としたりします。或學者の主張する様に、始めは敵の捕虜の

みに限つて居たとか、外邦人のみに限つて居たと云ふとは、一概に言はれないと存じます。兎に角獨逸民族に就ては農業は皆奴隷にやらせて、自由の公民は、農業を以て賤しき業とし、自分は戦争か狩獵にのみ従事して居た事は、ケーザーの記述によつて疑ふ可からざる事實であります。他の民族に就ては、此程明確な記録は存して居ませんが、經濟上の生業・生活維持の爲めに必要なものを生産することを、餘りに尊重しないことは、幼稚な文明社會には共通の現象であつて、此等は成る可く之を奴隷及び婦人に強制的にやらせたものと見えます。故に經濟的活動は主として、始めから自由を認められてない人達の手にあつたものと申して大過ないことと存じます。

農奴制度

所が人口が増加し、人智が進み、従つて生活維持の努力が重要となるに従つて、生業を自由なき民にのみ任せず、又自由なき民は段々之を解放して、何分づつか自由を與へることになつたのです。之が即ち農奴制度となつて顯はれました。農奴とは若干の土地を宛がはれて耕作に従事し、其の收穫は己の得分とするを得ると共に、終生否な世襲的に其土地を離るゝ能はず、而して、地主の命の儘に勞力の徵發に應じ、又た諸種の物納の義務を負つて居る百姓のこととあります。此れは畢竟純然たる奴隷、何の自由もなく又

人格も認められず、單に一物品として取扱はれる百姓に任せて於ては、生産力の増進を期することが出来ないからです。

農民解放

故に十三世紀の頃からは、所謂農民解放と云ふことが起りまして、農奴を更に解放して、自由人格のある良民とし、土地の耕作を一種の小作制度によつて營ましむることとなりまして、小作料を上納するだけの義務を負ふに止る百姓が段々殖えて來ました。獨逸の如きは甚だ後れましたが、其れでも十五世紀に入つては漸く此勢が盛んになつて來ました。英國に於ては、十四世紀の頃既に小作制度は餘程擴がつて來まして、農民解放に先鞭を着けました。

工業勞働の今昔

工業上の勞働も、略同様の變遷を経たので、歐洲文明國何れに於ても、工業勞働の發端は奴隷でありました。工業の發達に伴ひ所謂賃仕事起り、半自由民・全自由民たる工業者が發生しました。中世に於ては手工業と云ふものが起つて、工業を營む親方と云ふものは、獨立自由の市民として、餘程重要な身分を

享受する様になりました。但し親方以外の職工は、十分に自由なるものでなく、種々人格上にも職業上にも、又社會上にも束縛せられたものでした。而して十六世紀に入つて、家内工業が起つてからは、工業者は更らに其地位を向上することを得ました。

職業の自由完し

十九世紀に入つてからは、農工商業何れに於ても所謂職業の自由が漸次に認められて、何人も其從事する職業の如何によつて、人格上に制限を蒙り自由を束縛せられることがない様になりました。此に伴つて住居の自由・移住の自由・結社の自由・契約の自由も認められる様になり、今日に於ては、原則として、國民は法律の許す限りに於て、此等一切の自由を享有するものと認められ、經濟的活動は各人の責任たると共に、各人の自由に選擇し自由に營むを得るとなつたのであります。かく永い歴史的變遷を経て、經濟上に於る人格の自由が漸く認められる様になつた其主なる動因は、生産力増進・能率向上の必要であります。昔の様な單純な生産に於ては自由のない人民が之に當つても大して差支はなかつたのですが、身心共に強健にして向上心に富み責任の觀念厚く、従つて能率の高き労働者でなければ生産に従ふ能はざる様になれば、自ら労働者に自由を與へ、其人格を尊重することが必要となつて來て、以上申述ぶる様な發

達を促したのであります。此點に於ては社會進歩、人倫向上の最大の動因は經濟上の必要より來るとの説も、之を否定することは出来ないであります。

形式上の自由と實質上の自由

斯く申すと、今日の文明社會に於ては各人は眞に完全に自由を享有しつゝあるもの、様に聞えますが、名義上の自由は必ずしも事實上の自由ではありません。法律の目の前に平等なりと云つたとて、實際の生活關係に於ては各人の權能が平等であるとは限らないのであります。今日の文明國に於ても、法律が認むる所の自由、國家が保障して呉れる所の平等を完全に樂みつゝあるものは、富を有し權力を持つて居る階級でありまして、其他の階級は事實上に於て幾多の制限束縛を受けて居るのであります。即ち實際上から見ると、今日の社會制度は、主として富者權者の利益を中心とし、其保護を本位として出來て居ると申して大過はないのであります。富者權者に都合の良い事はドシ／＼改良もされ新設もせられますが、之に都合の悪い事は、其事自らは善い事であつても中々實行せられないのであります。立憲政體・民本政治と申しましても、多くは財産のある者だけが政權に參與し、國の所帯に關し容喙することが出來て、其他の者は如何ともする能はず、民本政治の其の民と云ふのは富民の意味である場合が多いのです。能く人の申

す民権蹂躪とか、民業壓迫とか云ふ事も、其の實は金のある人の權利を蹂躪し、財産を持つ人の營業を壓迫することの謂で、貧民は蹂躪せられ壓迫せられても、一向攻撃の聲を聞かない例が澤山あります。例へば或る營業を政府へ買上げて官營にする、鐵道を國有にする、簡易保險を官營する等の場合に、民業壓迫と云ふ聲を聞きますが、其れが他方に於て多數の貧民下級民に大なる利益を持ち來すと致せば、富者が壓迫を蒙つても、其れは國の爲めの犠牲であると申して差支ないのですが、民業壓迫非難の聲を徒らに大にして、政府をして實行に躊躇せしむる場合が往々あります。富者權者は誠に得手勝手な事を云ふ場合が多いので、自分達の利益を以て直に一般の國民幸福と同一視する弊があります。民権の蹂躪とは、國民大多數の權利を蹂躪する場合のみ云ふ可きとたるは勿論ですのに、僅に一部の金持が迷惑するとて直に此語を濫用するのは、國民全體から申せば迷惑千萬な事でもあります。是畢竟今日は自由の時代と申しますけれど、其實質は未だ甚だ偏つて居るから來る事でもあります。従つて其程度の厚薄によつて其國の經濟上の出來事が種々異つた影響を受けます。之は國民經濟の事を研究するに決して度外視してはならぬ重要な點であります。

政治上の自由と經濟上の自由

名義上或は十分ならずとも、實際に於て國民の大多數が自由を多く得て居る方が、名義上立派であつて其實大多數の者が自由を得て居らぬ方より遙かに勝つて居るのであります。又た政治上の自由は經濟上の自由と必ずしも相伴ふものではありません。政治上自由の甚だ大なる精國は、經濟上の自由に必要の條件ですが、其自由の内者に自由が少い國であります。元より政治上の自由は、經濟上の自由に必要の條件ですが、其自由の内者如何によつては、却て經濟上の自由を妨害する結果を生ずることもあります。併し此は寧ろ例外に屬する場合でありまして、大體に於て政治上の自由の多い國は又た經濟上の自由の大なる國であります。

私法と實際生活

之に反し、私法上表面の自由と、實際經濟上の自由とは相背馳する場合が少からずあります。何故と申すと、今日の私法なるものは前編にも一寸説明した通り、貨幣價値を以て其主眼と致して居ります。而して人と人との關係、人の行爲を出來る文貨幣價値で見積り、又言表はす所の契約と云ふものに引直して取扱ひます。即ち今日の文明とは、契約本位の文明でありまして、殊に經濟上に於ては、一切の出來事・一切の行爲を契約事項として取扱ひまして、一寸常識で考へては受取り難い程契約萬能の世の中となつて居ります。我々成年に達すると其一切の行動が皆契約に依るものと認められます。下宿に宿を取ると其れは

契約、外へ出て車に乗るコレモ契約、電車に飛乗ると其れから契約が成立ちます。友達から何か借りる、人に金を貸す、相當の年齢に達して妻を貰ふ、何れも皆契約です。我々は契約盡くめの生活を送つて居るのです。此れは法律上左様なつて居るのであります。所が契約とは何であるかと申すと、各人が自由意志を以て互に合意する事でありませう。試みに考へて御覽なさい、我々が東京市の電車に乗るのに相互に意志の合致等と申す事がありますか、我等が何と思つたとて七錢出さなければ電車に乗れないので、其れがイヤなら乗らないで済す外はありません。即ち七錢と云ふ事はチャント極まつて居て、我々は其を甘諾するかせぬかの二の内、一つを選択する丈けの自由しい持つて居らぬのであります。之を契約と見ると云ふは素人考へには合はないのです。又た婚姻を契約と申しますが、タツタ一度チョット會つた許り跡は親達が勝手に極めて御嫁にやられる娘さんには何の自由意思の合致等があるものですか。其等は暫く措いて論ぜずとして、經濟上最も肝要な労働者と雇主との關係を考へて御覽なさい。今日の私法制度では此は雇傭契約と申して一の契約と認めますが、雇主は完全な意思を以て誰を雇ふも、賃金を何程與へるも、如何なる業務に、如何なる場所で従事せしむるも勝手ですが、労働者の方は左様は行きません。雇主の定むる條件がイヤだと云へば雇つて貰へないので。所が彼は何の貯へもない人間で、家には一日の稼ぎ高を當てに空腹を抱へて待つて居る妻子があります。否だと云へば家中の難儀となります。仕方がないから雇主の云

ひなり放題の條件で雇つて貰ふ外はないのです。何の自由意思がありません、何の意思の合致がありません。其んな事は丸で空談です。所が法律は之を自由意思の合致と認め、其雇傭關係は尙當事者と對等なる意思の完全なる合致によつて定められたものとして取扱ひます。ダカラ、實際労働者の利益に反する事が澤山起るのであります。是れ法律上・形式上完全なる自由が與へられてある筈で、實際は決して左様でないといふ生活上の矛盾から來ることでありませう。此等の點は經濟問題を研究するに方つて大に注意せねばならぬ所であります。

私有財産制度

今日の文明國は皆人民の私有財産を認め、私法制度を以て之を規定し、又保護致して居ります。凡て現在國家の法制中、此私有財産制度位國民の經濟と、密接な關係を持つて居るものは無いと斷言致して宜しう御座います。私有財産制度は家族制度と相並んで、今日の社會を維持する二大黒柱と申しても差支ないのであります。英國流の極端な論者中には、國家は唯だ人民の身體と財産の安全を保護しさえすれば其能事了れり、他には何を爲すに及ばぬと主張するものもありません。又た我邦で人のよく申す法治國と云ふ語は、獨逸學者の『レヒツ・シニタート』Rechtsstaatを譯したものでありますが、其意味は主として人

民の身體と財産の安全を保護すべき法制を立つるを以て、最高の職分とする國家と云ふことであります。法治國と云ふのは、實は決して國家の理想でもなければ其現在の有様を充分に云ひ表はしたものでありません。今日の國家は、單に法制の制定者並に維持者たるを以て甘んじて居るものでなく、又た甘んず可きものではありません。國家は更に重要な文化的職分を持つて居るもので、理想としては法治國でなく文化國家たる可きものと存じます。

財産法治國

而して前に申す通り、今日の實際に於て、私法制度は富者、財産階級が本位となつて居りますから、其法治國と云ふのは、財産法治國たるの實があるのであります。決して萬民に一樣なる法治を爲しつゝあるものとは申せません。即ち今日の國家は、議論上は兎に角、實際上に於て、私有財産制度の維持者擁護者として最も重く視られて居るので、世の富權者階級の主として國家に期待する所は、私有財産制度の番人たることであります。故に此の現在の國家の下に在る國民經濟に取りては、其國々の私有財産制度は最も重大密接なる關係があるものであります。獨逸の學者ワグナー氏は特に國民經濟と私有財産制度との關係を研究して大著述を著して居ります。又た他の經濟學者何れも私有財産制度の研究に其れづゝ力を用ひて

居ります。然るに英國や佛國の學者は私有財産制度を一定不易の前提と看做し、其以上深く立ち入つて研究しないのが通例で、偶に論ずる人はあつても、之を獨逸學者の所論と較べると迎も同日の談ではありません。一は獨逸歴史學派當然の主張より來ることではあります。其最大原因は、私有財産制度は社會主義が今日の社會を非難する最要點で、彼等は其攻撃の主力を擧げて、私有財産制度の論評に盡くして居て、就中獨逸社會民主黨の攻撃が有力である爲めに、獨逸の學者たる以上之が答辯を爲すことを辭し能はざるが故であります。

是又歴史的産物

さて、私有財産制度は、今日は文明國に於て一般に認められて居るものですが、此が昔から終始一貫して今日に及んだものかと云へば、決して左様ではないのでして、今日現在の如く完備した私有財産制度並に私有財産の法律は寧ろ新しいものであります。古代に於ては此の如きものゝ存せなかつたことは勿論、中世に於ても私有財産制度は決して今日の様に整つたものではなかつたのです。即ち幾百年と云ふ永い年月を閲して漸く今日の状態に達したのであります。其發達を取調ぶることは經濟史の重要な研究事項であります。

私有財産の起源

扱然らば我々の知り得る限り昔の財産制度は如何なるものであつたかと申すと、之には二つの説がありまして、一は昔の昔から今日の様な私有財産制度があつたと主張し、一は昔は私有財産制度は全くなく、共産制度・共有制度があつて、其が永い年月かゝつて段々今日の様な私有財産制度になつたものであると主張します。此後の方の説は獨逸歴史派の取る所の説で、獨逸流の學者を始め英米佛國の學者中新しい見解を喜ぶものは多くは此説に賛成するものであります。私自らも永い間此説を奉じて居ました。併し乍ら能く考へて見ますと、此説には疑ひを挟む可き餘地が甚だ多いのであります。昔から今日の様な私有財産制度があつたと云ふ説は、此は歴史上の事實が明かに否認する所でありまして、今日の學説としては最早取るに足らぬ説であります。従つて別に論ずるまでもないのであります。之に反して原始社會には共産制度が行はれ、それから漸次に家の財産、團體の財産が發達して、財産の主體が小さいものとなり、最後に今日に至つては、其主體は最も小さいものとなつて、個人の私有財産が認められる様になつたと説くことは、學者間には中々勢力のある説でありまして、我邦では穂積博士の如きも一、共産、二、家産、三、人産、と云ふ順序を以て此説を主張して居られます。社會主義者中進歩した學者も又此説を取り、其

に基いて却て私有財産制度廢止論を唱へます。

原始共産制度論必ずしも信じ難し

所が、抑も原始の社會に於て、共産共有が行はれたと云ふことは、事實に照して如何なるかと申すと、其證據として擧げてあるものは、嚴重に之を吟味して見ますと、甚だ疑はしいものとなるのであります。經濟學上此の原始共産制度の論を主張した最も有力な學者は、白耳義のラヴレエと云ふ人で、其『所有制度と其原始の形態』De la propriété et de ses formes primitives と申す書は、今日迄に數版を重ね、又澤山の外國語に翻譯せられて居りますが、さて其書中に原始共産の事實として擧げてあるのを見ますと、何れも他の學者の研究を取つて之を綜合したものであります。英國に於ては大法制學者のサー・ヘンリー・サムナー・メーンと申す人、獨逸に於てはマウラー、ハンセンの兩氏を始め、此問題を研究した人は澤山ありますが、第一に此等諸氏が一樣に最も有力な證據とする所は、獨逸民族の古代の有様であります。其は前段に申しましたケーザーのガリア戰爭記、タキトスのゲルマニア志にある記事に基くのですが、其等記事を見ますと、財産が共有であつたと云ふことは決して記してないのであります。何れも解釋によつて共産制度が行はれて居たと見るに止まるのであります。又右に續いては印度の例ですが、此れは又た其道

の研究の段々進んで来た結果、共產共有制度の存在を證據立てることが出来ないのであります。斯くの次第でありますから、昔に於て共產制度のあつたことは事實でありませうが、何處でも一般に左様であつたとは、決して主張することは出来ないのであります。況んや人類原始の社會に於ては、必ず共產制度から始まると斷定するが如きことは到底許す可からざることでありませう。

權力財産説

私の考へでは、成程財産制度の大に發達したのは一種の共產制度であつたやうですが、其は人民が一種の平等權を有する所の共產ではなく、一種の共同使用制度であつて、所有の權は何人も權力の強い人に存してゐて、人民は其人の權力の下に結び付けられて、一種の共同使用を許されて居たものだらうと思ふのです。即ち財産が共有せられると云ふ意味に於ての共產制度でなく、使用が一種の共同であつたと云ふ意味の共同制度であつたのだらうと存じます。財産權は多數の人の有する所ではなく、一人又は少數の人の占領する所で、此權利者が多數の者に共同的使用を許したものと見るのです。若し何か名をつける必要があれば、私の説は權力財産説とか權者許容共同使用説とか申す可きであります。前に掲げた飛驒白川の大家族では、戸主が全財産を占領し、家族には其共同使用を許すのみで、何等の權利を認めません。或

學者は白川の大家族を共產體であると認るさうですが、私は反對に、此こそ權力財産説の有力な證據であると存するので、昔の共產體なるものも多くは此様なものではなかつたかと思つて居るものであります。

私有財産の二種

財産に動産と不動産とがありまして、其の發達は一樣ではありません。概して申すと、動産に就ては、早くから私有財産制度が起つて居りますが、不動産に就ては私有財産權は甚だ後れて起つたものであります。動産の早く起つたのは戰利品で、續いては自己勞働の產物たる日常の使用品であります。續いては家畜であります。戰利品中では奴隸・殊に女が重要な地位を占めて居ります。

不動産の發達

不動産即ち土地は、永い間共同使用に任せて、私有財産とならなかつたのです。同じ土地の中でも、一番先に私有財産となつたのは居住地です。續いて農耕地です。之に反し牧場・森林・山川・藪澤等は永く私有物とならず、共同使用に任せてあつたもので、今日と雖も未だ其例を見ないのであります。飛驒白川では今日でも、森林は殆んど全く共有ですが、農耕地は各戸主の私有財産であります。

大寶令の制度

我邦の昔に就て申すと、大寶令で規定せられた所謂口分田の制度と申すものは、土地國有の原則によるもので、人民は滿六歳以上になると、一人に付二段（女は其三分の二）の使用を許されたものです。死ねば又た政府へ還へすのです。莊園の制起つてから、口分田は廢れ、土地は事實上皆私有財産となりましたが、其れでも山林等は依然として共同使用でありまして、今日も民法に入會權と云ふものが認められています。之は一の共同使用權であります。然し大寶令の出来る前既に莊園の端緒がありましたので、所謂田莊と申す私有地が中々多くあつたことは疑ひがない様であります。私は嘗ては我邦に於ても、始めは土地は共有であつた様に考へて居りましたが、今日では之を疑ふものでありまして、矢張り我邦に就ても權力財産が土地に就て行はれて居たのではないかと想像して居ります。

支那の井田法

支那の田制に就ても、色々な説がありまして、孟子以來所謂周の井田法なるものを理想的制度と認めて居ります。井田法と申すは、土地を公有とし、人民には均一に使用を許すと云ふのでありますが、矢張り

一權力者が土地財産の主體であつたのではないかと存じます。

所有權の主體

兎にも角にも人類の幼稚な時代には、テンデ財産權と云ふ考へはなかつたと考へる方が適當の様であります。人民一般には財産を私有すると云ふ考への起らない時、少くとも財産となる可き物の中最も重要な土地に就て之を私有すると云ふ考へがないか、又は考へはあつても其力のなかつたとき、茲に他人に勝りて權力の強い人がありますれば、其人は有る所の土地なり動産なりを己一人の物と致して、他人をして擅に手を着けさせない様にする事が出来ます。其が積り積れば、確定不動の一の權利となりて、一般に尊重を強ゆることとなりませう。權力が大なれば大なるほど、其財産とするものは多く、且つ其權利も鞏固なものとなります。従つて己必ずしも要するにあらず、又た己一人之を使用することが出来ない程澤山の財産を持つ様にもなりませう。然れば、其一部分を割いて他人に使用を許し、其代りに對して報酬（主として勞役續いては物納）を徴することとなります。其使用を許すに動産なれば個人的に許すのです。土地となると個人的に許すこともありませうが、多くの場合に於ては一村全體一部落全體、獨逸で申せばマルク Mark と云ふ様なものに、共同的に一括して使用を許したものと見えます。之が獨逸のマル

ク團體とか、支那の井田とか云ふものであつたかと思ひます。尤も、實際の場合には種々差別があつて、一村共同、一マルク共同で土地を開拓し各自に分割して使用して居た所へ、権力者が出て来て最高所有者となつて貢納を命じた場合もある様に思ひます。或は此くの如き場合の方が多かつたかも知れません。併し何れにしても、所有權の主體が共同であつた場合は稀であるやうに存じます。

生産能率増進の必要

さて私有財産制度の變遷は、人格的自由の變遷と同じ様に、段々個人の權利を認めることによつて生産能率の増進を實現したものであります。人口増殖し土地に不足を告ぐる様になれば、原始的の共同使用は甚だ不自由でありまして、各人の創意を妨ぐること大であります。故に個人的能力の増進を期するには、土地の使用を自由にする必要で、其れには百姓に土地の所有權を許さなければならなりません。併し封建時代には、法律上百姓に土地の所有權を許しませんで、土地は皆領主の物とし、凡て賣買を嚴禁しました。其れは制度の上の事ですが、實際は百姓の土地所有權は認められたも同じ事で、且つ賣買も中々盛んに行はれました。左様しなければ、土地の收穫を増すことが出来なかつたからです。故に封建時代の財産制度史は法律違反の歴史と申しても宜しいので、法律の文面を如何に逃れ様かと云ふ工夫は實に巧妙

に發達したものであります。我邦の頼納、英國のコムモン・レカヴァリー Common recovery 等と云ふ何れも是であります。

私有財産制完し

而して封建制度廢れ、近世的産業組織の起ると共に、名義上・事實上共に、凡ての財産私有は公認せらるゝこととなりまして、今日の文明國は人民一般に財産の私有を許すこととなつたのであります。

相續制度

私有財産制度に必ず伴つて居るものは財産相續の制度でありまして、此れ又た右申述べた財産制度の變遷と同じ様な歴史を持つて居りまして、昔は相續權は認められなかつたものであります。中世に於ては相續權は極く範圍を狭く認められて居りました。今日に於ては、法律は人民の私有財産を許すと共に其相續も認めて居ります。併し今日と雖も、封建制度の遺物として、長子の特惠するとは随分廣く行はれて居ります。長子相續の制度は、畢竟財産自由の極く制限せられて居た頃の制度で、相續は許しはするが、之を長子のみ限り、他には許さなかつたことから起つたのです。即ち専ら封建時代の制度で、武士の采地に

は一般に行はれましたし、又た農奴から一步進んだ状態にある百姓の耕作地に行はれた制度であります。我邦で申す家督相續は、即ち長子相續の制度で、普通世人は家督相續と云ふのは家を重なる精神から出て来たものと思つて居りますが、徳川時代に於て家督と申したのは無形の家の事ではありませぬ。家に附いた財産、即ち秩祿知行の事でありませぬ。即ち家督何百石とか何千石の家督とか申して居つたのです。事實財産のない家督は相續上に就て別に面倒も起りませぬし、之を大騒ぎやる譯もないのです。財産が附いて居るから、家督を争つて訴訟をしたり、甚だしきは兄弟姪姪相害する様なことが起るのであります。今日の我邦に於ては、長子相續相續の根柢は大に薄弱となつたので、又た經濟上の進歩發達を害する點が尠からずあるのであります。西洋に於ても英國は實に此の長子相續制度の爲めに大なる弊害を醸し、國民經濟上大なる損を被つたのであります。佛國のドロア・デーネス *Droit d'aînesse* 獨逸のアネルベン・レヒト *Anerbenrecht* 等も亦似たり寄つたりであります。

兩制度に對する攻撃

斯くの如く今日の國民經濟は、其根本として私有財産制度及相續制度を持つて居りますが、此の社會を改造しやうと主張する論者、即ち社會主義者は主として其攻撃を此兩制度に對して加へて居ります。彼等は私有財産及相續制度存在の理由を否定するのであります。之に對して、今日の社會組織を擁護せんとする者は、私有財産制度を以て必要なりとし、從つて其存在の論據を示すことに力を盡くして居ります。是れが所謂私有財産理論と申すものであります。

私有財産制度の理論

私有財産理論には色々ありますが、大別致すと第一人格説、人格を維持する爲に私有財産は必要なりと云ふ説で、一名自然説とも申します。人の自然の本性は私有財産制度を必要とすと主張するからであります。此説は獨逸に於ては哲學者フキヒテが其『自然法論』並に『鎖國論』に於て唱へた所であります。哲學者ヘーゲルも亦私有財産を以て人間の自由を維持する要具なりと其『法律哲學』と云ふ著書に於て主張して居ります。其他法律哲學者シュタールも私有財産制度は人間個性の發現に必要なりと申して居りますし、同じくラッソンも似寄つた説を唱へて居ります。此説を本とし更に經濟的の考へを附加した説は、第二經濟的人格説でありまして、人間經濟上の天性は私有財産の制度を必要とし、經濟上に於て個人性の活動する爲に此制度を缺く可からずと説くのであります。經濟學者のミルの如きは此説を取つて居ります。第三には羅馬法の觀念から私有財産の論據を説くので、之を先占學説と名けます。即ち人間社會に

私有財産制度の起つたのは、無主物を先占したからであると申すので、此は自然法論者の好んで主張する所であります。第四は勞働説であります。即ち人間が自己勞働の産物を私有財産としたのに起因する説なのであります。此は英國の大哲學者ジョン・ロックが創説したものと認められて居ります。第五は法制説と名けまして國家が其法制を以て認るから私有財産制度があるのだと説くので、獨逸の經濟學者ワグナー氏が最も熱心に此説を主張して居ります。第六は社會利用説で私有財産制度は社會に利用があるから存在するのだと申すので、新しい經濟學者例へば米國のセリグマン氏等の説であります。今此等の説を一々に評論する事は、餘り専門に深入りすることになりますから見合せますが、此等の説何れも多少の眞理を含んで居りまして、全然誤謬なりと斷定して宜しいものは一もないのであります。さりとて又た何の説が全く正鵠を得て居ると定めることも出来ません。何れも非難を容る可き餘地があります。

理論よりも事實

私の考へ丈けを簡單に申述べて見ますと、右等の説は私有財産の起源を説明すること、此制度が今日に於ても存在す可き根據あるものなるを證明すること、を混同して居ります。抑も私有財産の如何にして起つたかと云ふことは、理論上の問題よりも、寧ろ歴史上の事實問題であります。之に反し、今日現在に

於て其が存在せなければならぬものなりと云ふことを主張するのは、理論上の事柄であります。私有財産制度が如何にして出来たかと云ふ事は前段簡單に申述べた通りであります。然らば今日此制度が存在せねばならぬ論據は如何と申すと、右等六箇の説何れも十分之に答へないのであります。私の考へでは今日此制度が必ず現状の儘に存在せなければならぬと云ふ事を理論上證明することは、甚だ困難でありまして、以上何れの説を以てしても證明出来ないものであります。我々は唯之を事實として承認する外はないのであります。ワグナー氏の様に、以上の諸説を一々詳に理論的に評論したからとて、私有財産制度存在の論據が立證せられる譯には行きません。現在の私有財産制度は卒直に申せば、凡ての理論を超越して居るのであります。唯之を攻撃する人々に對して理論上對抗する事丈けは出来ませんが、ソレナラバ更に積極的の汝の論據を擧げよと申されても、今日の學問の進歩の程度に於ては出来ないのであります。恰も神様の存在と同じ事で、神なしと主張する論者の論を破ぶことは夫々に出来ても、積極的に神ありとの論據を示すことは、大哲學者カントですら出来なかつたので、彼は唯我々の道德律は靈魂の不滅と人格神の存在を必要の前提とすと申すに止まるものであります。私有財産制度も其如く、今日の我々は現在の社會律は私有財産制度の存在を必要の前提とすと申得るのみであります。其以上の主張を致しますと非論理的となります。ソコデ今日一番汎く行はれて居る説は歴史説でありまして、私有財産制度は歴史的産物なり、我

が社會が幾百年の久しきを経てやつと完成した制度であると説くのであります。而して之に基いて、斯く發達し來つたのは必竟其れが必要であつたし、又た今も必要であるからと附け加へるのであります。歴史派の説は前申した通り、凡て現状辯護の態度を執るものでありますから、右の如く説くのも無理ならぬ次第であります。

兩制度の缺點からす

兎に角、今日の國民經濟には其前提として、私有財産制度なるものが存在して居るので、之を度外視して經濟上の問題を考へることは出來ないのであります。之は毫も疑ひを容れぬ所であります。其れと同時に此制度も種々缺點があり弊害のあることは十分に之を知つて置かねばならぬのであります。此缺點弊害を取除いて國民經濟の健全なる進歩を圖る事は、學問上重要な研究事項たるは勿論、國の幸福を希ふものゝ、必ず心を用ひなければならぬ所であります。而して今日現在の國民經濟の組織は此私有財産制度なるものを根柢として居ることは一時たりとも忘れてはならぬのであります。従つて此國民經濟内に起る一切の經濟的活動や現象は皆此根柢、此前提の上に行はれるのであります。此前提が無くなれば其等の活動や現象は全く面目を一變するのであります。經濟學は常に此前提の上に行はれる事實や現象を問題として

考究するのであります。此前提が變れば今日の經濟學は又著しく變化して仕舞はなければならぬものです。而して其は前編にも申述べた通り將來の經濟研究として別の事に屬するのであります。現在の經濟學は常に私有財産を根柢とし前提とするものなることは能く御記憶を願ひます。

第三編 經濟行爲の根本觀念

第十二章 目的行動と風俗習慣

本編の内容

經濟とは組織と行爲とを併せ稱するものなることは、本講話の始めに一寸御話した處であります。前編に於て組織としての經濟のことを稍々細かに説明致しましたから、本編に於ては經濟の行爲のことを少し詳しく御話して、前段に大略申上げて置いたことを更に十分明瞭にしたいと存じます。

さて經濟 爲とは、序論に於て定義致して置いた通り、我々が厚生増進・生活維持の爲めに秩序と計劃を立て、價値の比較判断を致しつゝ行く所の一の目的行動であります。本章に於て先づ目的行動の意味と之れに對する風俗習慣の作用とを御話し、次章に於て價値及び貨幣價値のことを説明致します。

目的行動の意義

經濟行爲の特質は目的行動であることは是れであります。目的行動とは本能動作と區別する爲めに申すのでありまして、目的行動とは目的原因を以て起る所の行動の意味であります。抑も人間の行爲には必ず原因があります。此原因に目的原因と動作原因とがあります。我々が或行爲を爲す前に豫め目的を立て、其目的を達する爲に行爲を營むときは、其目的が行爲の原因であります。之を目的原因と名づけるのであります。其反對に別に目的を達せんが爲に行爲するのでなく、或る動作を受けて行爲するときは、其行爲の原因を動作原因と名づくるのです。分り易く申しますと、動作原因を以て行はれる行動といふのは、丁度此處に立て居つて、後から押された爲に、前へ自ら歩いて行くがごときものであります。即ち原因はいつも後方にあつて我れを突きます。突かれて始めて行動するのであります。其行動は、いつも突かれた行動である、本能の行動は即ちそれでありまして、之に反して目的原因は、いつも我れより向ふにあります。後でなく前にあります。斯ういふ所に達したい、斯ういふことを成し遂げたいといふことがあつて、前からそれを引くのであります。丁度赤兒を歩かせるのに此處迄くれば甘酒進上と言つて、前から獎勵して來させる様なものです。後方から押出して歩かせる法もありますが又前方から誘つて歩かせる法もありま

す。歩いてくれば物をやると申します。其の如く行爲を完結すれば其目的が達せられる、完結せなければ其目的が達せられない、完結して目的が達せられるのであります。其行爲がスツカリ終つて一番終ひに實現されることが抑も行爲を起す原因になつて居るのであります。

例を以て説明す

例へば、東京から金澤へ来る其爲に東京驛若しくは上野驛から汽車に乗ります。抑も汽車に乗る時に、金澤へ到着するといふ目的があつて始めて私は汽車に乗ります。私が汽車の切符を買ふことから汽車に乗ること、汽車の中に坐つて居る一切の行動は、金澤へ到着するといふ一つの目的の爲に起るのであります。金澤へ来るといふことがなければ、汽車に乗るといふことがないのです。又汽車に乗るにしてもそれが金澤へ行くのでなく、青森へ行くのであつたならば、其汽車へは乗らないで外の汽車へ乗ります。金澤へ行くといふ目的があるから、何時何十分直江津廻り金澤着の汽車へ乗ります。私をして汽車の時間、汽車の列車の番號を選ばせしめる一切の行爲の原因は、いつ何日迄に金澤へ来るといふ一定の目的であります。其目的は私が十數時間汽車の旅をして金澤へ到着して始めて達せられ、私の行爲は始めて意味を生じます。若し途中で故障が起つて其汽車が金澤へ来なければ、私の行爲は完結して居りませぬ。私は只汽

車に乗つたといふだけで、金澤へ行つたといふことは言へません。金澤へ行くといふ行爲は金澤へ着いて始めて完結するのです。

目的により意味異なる

所が私と一所に同じ汽車に乗つて居る人達は色々でありまして、金澤へ来る人もあれば金澤を通過してモツと先へ行く人もあり、途中で直江津に下りる人もあります。が色々違つた方向に行く人も汽車へ乗つて居るのは同じであります。碓氷峠を通過する列車には數百人の乗客が乗つて居る。其數百人の乗客が碓氷峠を汽車で今登りつゝあるといふことは同じであります。其瞬間を捉へて言へば彼等は皆同じ行動をして居る、同じ碓氷峠を上つて居るのであります。併し一々の者に付いて言へば、これは新潟へ行く人であるこれは長野へ行く人である、これは富山へ行く人である、これは金澤へ行く人である、これは米原へ行く人である、これは敦賀へ行く人であると云ふ様に、色々あります。が、其人の乗つて居る乗方に違ひはありません。金澤へ行く人も富山へ行く人も汽車の乗り方は同じであります。只遠くへ行く人は安心して緩く乗つて居る、近くで下りる人は早く下りる準備をするの差ひであります。只心に持て居る目的が違ふだけです。金澤へ行く人も富山へ行く人も同じ汽車に乗ります、抑も初めに極めた目的、

汽車に乗る時に極めた所の目的の如何が違ふのです。

目的の内容

又均しく金澤へ来る者が十人あるとしますれば、何の爲に金澤へ来るかといふ目的の内容を尋ねると又夫々に違ひます。金澤へ友人を訪問する爲に行く、金澤へ商用の爲に行く、金澤へ公用を帯びて行く、金澤へ何の目的なしに見物に行く、色々ありませう。均しく汽車に乗つて金澤へ来るものも、銘々の人の持つて居る目的が違ひます。

目的行動の妨げらるゝ場合

然るに同じ碓氷峠を上つて居つた此客人が、汽車が顛覆した爲に多少の損害を蒙り多少の怪我を蒙つたと假定しますと、事變の爲に受ける所の損害は其人の抱いて居る目的の爲に大變違ひます。只遊山の爲に金澤へ行くといふ人は、怪我さへ治ればそれで宜しい、遊山すべきものを病院で暮らしたといふだけであつて割合に損害が少い。然るに親の急病を見舞ふ可く金澤へ来る人に取つては、一時間でも二時間でも遅れることは非常に苦痛でありませう。況んや二日も三日も四日も事故の爲に途中淹留して居らなければなら

ぬといふと、精神上物質上非常に苦痛を被ります。商賣用の爲に行くならば、汽車が遅れた爲に商賣の利益を丸で失くして仕舞ひ、物質上目に見えた大なる損害があるかも知れません。此と同じ様に經濟行爲と云ふものゝ意味は其事自身にあるよりも、其人の持つて居る目的原因の如何に依つて大變違ふのであります。經濟行爲は總て斯の如き目的原因を以てする行爲でありますから、之れを目的行動と名けます。同じく物を賣つたり買つたりするといふことであつても、何の爲に賣るか何の爲に買ふか、一々目的があります。其目的の如何に依つて意味が違ひます。これを機械的に解釋することは出来ないといふことが、目的行動といふ言葉の中に含まれて居ります。

必ずしも目的を立てざる行爲

我々の行爲は必ずしも一々に目的を立てるとは限りませぬ。又我々は一々に付いて其目的を自覺するとは限りませぬ。殆ど習慣的に營んで居る行爲が少からずあります。又は全體としては目的を意識して居るが、一度之を始めるると跡は只繰返すに止まつて、一々の意味を問はないこともあります。

流行の變遷

其最も著しいのは流行趣味の變遷の如き是であります。何か或物が流行り初めるには、其の流行の元を作つた人は新發明を成し新工夫を凝らして、從來のものと比較して、此方が利益が多いといふことを計算して、目的を立て、造り出すに相違ないのですが、これが一度流行となると、之を用ひる人、之を買ふ人は、最早斯くの如き比較や打算をせず、只流行るから買ふ様になります。其流行品は或は從來のものより不便であるかも知れぬ、却て不經濟であるかも知れないのですが、只流行であるから、其流行を追つて無意味に買ふ、争つて之を求めると云ふ様なことは能くあることであります。

人間は模倣の動物

人間は行爲を爲すに當つて大部分は模倣を爲すものです。佛蘭西の社會學者タルドといふ人は、模倣を分つて自分の模倣と他人の模倣との二つにして居ります。人間は人の眞似もするが自分の眞似もするものです。どつちが度数が多いかと言へば自分の眞似をする方が遙に多いものです。

習慣は自己模倣

習慣といふことは畢竟自己の模倣であります。此場合に斯うする彼の場合には斯くすると一々考へない

で、前に一遍したことを其儘眞似をして居ることが多いのです。例へば疊の上へ坐れば直ぐに胡床を踏かうか、坐らうかと考へてするのではない、詰り昨日もやつた一昨日もやつたからやる、目的を問はぬで、知らず識らずの間に繰返す、是れが自己模倣であります。模倣には色々ありますが、若し人間の行爲に自己模倣がなかつたならば、人生はどの位冗をするか知れませんが。

習慣は冗勞を省く

我々は自己模倣の爲に時間も力も費用も大に節することを得るのであります。朝起きてから夜寝るまで坐臥進退一々目的に付て吟味して如何にすべきかといふことを考へると致したならば、時間が掛つて殆ど一日の事は一日で出来ないであります。我々は朝起きて先づ先へ飯を食ふ可きか、それとも顔を洗ふことを先にすべきか、衣服を着ることを先にすべきか、若くは食物を先に食つて其から顔を洗つて最後に衣服を着るか、又は衣服を着て食物を食ふて最後に顔を洗ふ可きかといふことを考へなければならぬ様では餘程の時間を費すことになりす。所が習慣として、朝起きれば顔を洗ふて衣服を着て飯を食ふ、又飯は一日に三度食ふ可きか二度食ふ可きか、毎日之れを問題とするのであつたなら大變であります。何時に飯を食ふ可きか、毎日自由に食ひ得るものとしたら、これも大變面倒であります。所が腹の工合如何に拘ら

す、朝起きれば飯を食べ、十二時に食べ、夕暮に食べ、一日三度飯を食へることに極めて差支なく行きま
す。而して我々は此三度の食事といふのを以つて我々の一日の生活を三分して居ります。

食事時間は生活の區劃

我々の爲す一日の行事は食事の時間の前後に依つて巧く鹽梅されて居ります。朝飯と晝飯の間の仕事、晝
飯と晩飯の間の仕事、晩飯と就眠迄の仕事、總て諸々の仕事は、自ら食事の時間が中心となつて區劃を附
けて呉れまして、其間にすることは大抵極つて居ります。毎日それを繰返して何か特別の事が起らない限
りは、之れを破らすやつて居りますから、別に考へる必要はありません。

一定の服装

衣服を着るのでもさうであります。今日は洋服を着やうか、日本服を着やうか、黒い衣服を着やうか、一
赤い衣服を着やうか、一々考へて居つたら面倒であります。昔は極平民の衣服でも色々種類がありました。
十五六世紀に至る西洋の風俗畫を御覽になれば、色々様な衣服を着て居る事が分ります。殊に身分の尊
い人になると色々衣服を着ます。頭の上を長く延ばした冠の様なものを冠つたり、尻尾の垂れた様なも

のをついたり、胸の割れたものを着たり、下の方から割れたものを着たり、誠に千差萬別であります。今
日の西洋の陸軍の衣服にもまだそれが色々あります。ドラゴナー兵の軍服、フザール兵の軍服等といふ
様に色々異つて居ります。此は日本にはありません。此く色々な服装がある時代には一々服装を考へて定
めるだけでも非常な手数を要し時間を要し費用を要します。今日は禮服は大禮服を着るか燕尾服を着る、
通常禮服はフロックコートを着る、平常服は背廣を着る、僅か三種か四種の外に過ぎません。如何なる王
公貴人と雖もそれ以上に出ません、誠に簡單であります。軍服も日本のは極めて簡單で線とか星とかの違
ふだけですが。昔は日本でも軍装には種々違つたものがあつたことは誰も知つて居る所です。

婦人の服装は原始的

今日でも男子に比べれば、女子の服装は變化が多い、色々違つたやり方をして居ります。頭髪でも色々
結び方がある、古い型もあり新しい型もあり、高い髷もあれば低いのもあります。男子に比べれば女子は
人の前に出るには如何なる服装をす可きか、家に居るには如何なる服装をす可きか、赤にす可きか、黒に
す可きか、多少これが爲に苦心を要します。男子と雖も昔に遡る程裝飾の爲に餘計な苦勞を要したもの
であります。

衣服は裝飾より起る

元來人間の衣服は寒暑を防ぐ爲に發明せられたよりも、裝飾の爲に起つたものであります。何物をも身に纏ふことを要しない熱帯地方の野蠻人が色々な物を身に纏ふのを見て知れます。

野蠻人は裝飾家

野蠻人は甚だ裝飾家であり、どんな未開な野蠻な民族でも、裝飾をせないものはありません。身分のある者、例へば酋長は頭に何か飾をするとか顔や身體に黥をするとか、耳に環を嵌めるとか致します。臺灣の生蕃の中には上の齒を二本抜く習俗があります。之が一つの裝飾であります。我々から見ると齒を抜いたり黥を入れたりするのは甚だ醜いのであります。彼等はそれを裝飾にして得意になつて居ります。身には殆んど何も纏はぬでも身體には黥をする、非常な苦しい思ひをして黥をする。其を人に誇るのです。福澤先生は曾て片輪娘と云ふ本を書かれて日本婦人が齒を染める風俗を嘲られました。文明の低下な民族の裝飾は多く片輪になることでもあります。貨幣の起りも多くは裝飾の要具に端を發して居ります。飾といふものは決して文明人の特色ではありません。人間本來固有の必要であります。昔は其爲に非常な手間を要したのです。

手間を要したのです。

文明生活は反つて簡單

今日は飾ることは飾つてもそれが段々簡略になつて、繰返し繰返し自己及他人の模倣することに依つて、一々吟味しなくても流行と云ふものがあつて我々に適従す可き所を教へて呉れます。それに従つてさへ居れば先づ以て間違はないのです。個人々々が一々考へたり工夫をしたりせなくても、大抵自分と相當なる地位身分の人が一般に採用するものに従つて行けば宜しいことになつて居ります。それが一番費用も少くて簡便で済みます。斯の如き種類のものに付ては目的行動であるかないか分らない位で、一々目的を問はない、大抵極つて居ります。

風俗の變化

併し、それは簡略せられたといふだけであつて其根柢に於て目的行動であることは些とも變らないのです。故に何か變遷が起つたり時世が變つたり自然上の狀況が變つたりして、從來の生活方法が維持出來ないとなつると、之を變へなければならぬのです。此く變へる時には非常な努力を要することがあります。

歐洲大戰の經驗

例へば此間の歐羅巴の大戦争に付まして、英吉利へ肉の輸入が非常に困難になつた、今迄の様に贅澤に牛の肉や羊の肉を使ふことが六ヶ敷なつて來ました。ソコデ肉の消費の儉約が非常に肝要になりまして、英吉利の今迄の食事の獻立といふものはスツカリ破壊されて仕舞つて新にやり直さなければならぬ、餘程困難をして之れに適應する様な新獻立法を案出するといふ有様であります。況してや獨逸の如き物質の供給が非常に困難な國に於ては、平常の生活とは丸で違つた食事の獻立をし、違つた生活をしなければならぬのです。一々の事はみんながそれ／＼考へてやらなければならぬのです。それは擧國一致の戦をして居ることを痛切に國民に知らしめるに大いに効能はありますが、他方にはそれが爲に始終心を費さなければならぬといふ大變煩はしいことが伴ひます。平常は少しも氣が附かなかつた、平常は慣れて居つて深く其意味を問はずして習慣的にやつて居つた事を急に變へねばならなくなりました。

獨逸の皮剥訓令

最も面白い例を申しますと、獨逸では政府から命令を下して、芋の皮の剥ぎ方の委しい規則を拵へました。従來は馬鈴薯の皮を生で剥ぎまして、皮を剥いだ芋を煮るといふことが普通のやり方であつて、皮の儘蒸かす仕方日本の蒸かし芋の様なり方もありますが、此れは寧ろ贅澤な食べ方で、新しい柔かい芋を皮の儘茹で、布巾へ包んで上等のバタを付けて出すのです。所が政府は訓令を出して自今戦争中は馬鈴薯は皮の儘煮て、然る後に皮を剥げと命じました。何ぞかといふと、生で皮を剥ぐと皮が厚く剥げるから冗が出ます。食べられる分迄皮となつて捨られて仕舞ふ。然るに煮てから剥ぐと本當の皮だけ取れて食べられる分は皆残ります。これが芋の儉約になる、全國にしては大變なものになる。それで斯ういふ訓令を發したので、此は餘程有名な話であります。所が扱て實際これをやるとなると中々六ヶしい、我々はやつたことがないから、そんなことは先へやるとも後へやるとも如何でも宜い様に考へますが、獨逸の人民に取てはこれは中々大問題であります。そこで煮た芋の皮をどうしたら簡單に剥けるかといふ方法を案出して、馬鈴薯皮剥き講習會を到る處で開催致して、其結果やつと政府の命令が行はれる様になつたといふことあります。

移風易俗の困難

一事は萬事であります。従來やつて居ることを變へて、先へ剥くのを後で剥くことにしても、それが爲

に苦痛を感じます。従来は習慣・模倣でやつて居たから、簡単に済んで居ましたが、同じことでも之れに付て考へ方を變へてやるとなると甚だ煩はしく感ぜられます、勝手が違ひます。此の勝手が違ふといふことの爲めに、保守的な人民は、他郷へ移居することを非常に臆劫がります。

保守的なる英吉利人

英吉利人の如きは英吉利流の調理の仕方、英吉利の生活の仕方でなければ何處へ行てもいかない、彼等は優勢の國民であるから、英吉利の風俗習慣を何處へも持て行きます。寒帯地方でも熱帯地方でも、英吉利人がやつて居る生活習慣を以てやつて行けるからやつて居ります。故に他郷の風俗に従ふとなると、非常に辛く感じます。歐羅巴大陸を旅行して御覽なさい、英吉利人は英吉利人の泊る宿屋があつて、大抵其所へ泊ります。巴里へ行つても白耳義へ行つても羅馬へ行つても何處へ行つても、英吉利人向の宿屋があります。宿賃は高い、高くて我々日本人には馬鹿々々しい位ですが、英吉利人は其れでなくてはならぬのです。一例を申すと、英吉利人は朝飯を澤山食べます。所が大陸人は朝飯は殆ど食べない、珈琲を一二杯飲んでパンを一切食べないです。獨逸でも佛蘭西・奧太利でも伊太利でも、大陸は大抵皆さうであります。英吉利人や英吉利育ちの日本人はどうしてもそれでは堪へられない、朝から晩迄肉類を食べなければ

承知しません。所が、伊太利や獨逸の宿屋には、さういふ設備がありませんから、特別に英吉利流の宿屋があつて、英吉利の習慣通りにやれる様にしてあります。

英吉利相場

殊に伊太利に行くとき A. Linggese (英吉利相場) と申して總て物が高い、馬車に乗ても英吉利流といふと馬車賃が高いのです。馬車が違ひ別當が英語を使ふから高くなるのです。英吉利人は威張つて曰く、英語といふものは、世界中何處へ行つても通用すると、成程それは通用します。併し其の代り高い錢を拂つて、英語の出来る奴が出てくるのです。只働く譯ではない、それだけ頭を刎ねコンミッションを取ります。ホテルの勘定も高いのです。英吉利人はエライから、英語が何處へでも通すると言ふが、それは金を拂へば、英語は何處へ行つても通じます。地獄の沙汰も金次第、況や歐羅巴大陸で、英語が多少通するのは當り前の話です。日本人が英語さへ出来れば、歐羅巴に旅が出来るといふのは飛んでもない考へ違ひです。旅行は出来ませんが真相は些つとも分りません、半響の旅です。伊太利や佛蘭西・獨逸へ行つても英語計りの人間には、上面の人に見せて宜い所を見せてズツと廻つて次の汽車で外へ連れて行つて仕舞つて、少し立入つたことは分りません。それが先年の歐洲大戰に於て大いに困難の原因となりました。

大陸に於ける英人の生活

英吉利人が兵隊になつて大陸へ渡つたことは、百年此方無いことであります。大陸へ渡つて、白耳義流(フリス)なりに行けば、白耳義流・佛蘭西流(フリス)の食物を食ふなければなりませんので、彼等は非常に困難を感じ不平を訴へます。それでは戦ひに勝てる見込は甚だ少い、平常の生活習慣を變へるといふことを苦痛に感ずることは、野蠻人の間にもあることですが、英吉利の如きは文明人中で最も極端な人民であります。

質素に慣れたる者は移り易し

佛蘭西人は英吉利人程でない、獨逸人や露西亞人杯は、生活の方法を容易く變へられます。平素から質素な生活をして居りますから、他の質素な生活に移ることが出来ます。日本の兵士が歐羅巴へ行くとすれば、矢張り極めて質素な生活に甘んずるでせう。尤も歐羅巴の眞中で梅干が欲しい、澤庵が欲しいと言つても却つて困りますが、西洋流の粗衣粗食で十分戦ひをすることゝ存じます。

固定的生活は考物

文明の進歩發達は願はしいけれども、英國人の様な生活の習慣が一定不動になつて仕舞つて、容易に移ることが出来ず、他郷に行つて他郷の生活状態に移ることが出来ない様になるといふことは、餘程考へ物であります。戦時に當つては、甚だ憂ふ可きことであります。即ち我々の經濟生活がちやんと極つた風俗習慣の型に填つて仕舞ふといふことは一得一失であります。平生はそれが爲に冗の勞を省いて宜いが、之を變化しようといふ時に困るから、矢張り必要に應じて變へられる餘裕のある生活の方が宜いと申さねばなりません。

政治家の苦心

一定不易の經濟生活よりも、一々準備をすることを要する部分が矢張り少しはある方が宜いのです。それは昔に於ては随分政治家が心を勞してやつたことで、人民が餘り平生の生活に慣れると困るから、時々臨時に事を造り出して非常の準備をさせました。今日は文明の設備が普く行渡つて居りますから、さういふ必要は感じませぬ。例へば、火事のあつた時の稽古を平素からするといふことは、寄宿舎とか兵營では

やるが、普通の町では火事の稽古といふことは殆んどしませぬ。飢饉のあつた時の用意とか、戦争の時の演習といふものも殆んどして居ませぬ。居ないけれども、これは矢張り銘々の心掛、銘々の工夫で多少はさういふ急變に應じて、之に打勝て行けるだけの用意は必要であります。

特別行事の意義

此意味から言ひますと、或は正月を特別に祝つて、これを平素より幾らか生活の違つた時として平素食べるものと違つたものを喰べる、餅を搗いたり屠蘇を飲んだりする。又盆にも少し違つたことをやる。時々季節を限つて違つたことをする、桃の節句或は五月の節句をやるといふ様なことは、詰り生活の單調を破つて生活の意味を多少其時に考へるといふ效能があります。併しこれも餘り習慣的になつて仕舞へば效能がありません。西洋で言へばクリスマスは今でも多少其意味を持って居るものであります。

目的行爲力説の必要

さて以上御話した如く、經濟行爲は今日は普通の生活の上にては社會に風俗があり、個人に習慣がありまして他人の模倣・自己の模倣が普く行はるゝ爲めに、一定の型に填まつて居る部分が多いのであります。

す。然るに此くの如き状態の中經濟行爲は目的行爲なりと申すことを、特に力説する必要は那邊にあるかと云ふ疑問が起ることゝ存じます。之に答へると經濟行爲の本質と、其の要件とが十分に御分りになります。

收支適合の一點にあり

其必要は畢竟前に説明致した收支の適合と云ふ一點にあるのであります。我々の一生は、非凡特別の人を除く外各々の身分・地位・階級・職業に従つて夫々の習慣風俗がありますが、如何なる身分、如何なる職業の人でも、其一生涯中の苦心工夫の大部分は此の收支適合と云ふ一事に向つて注がれるのです。英國の學者マーシアルと云ふ人は人生を動かす最大の動機は經濟と宗教であつて、宗教上の動機は其發動するときは甚だ熾烈なものであるけれども、絶えず人生を左右して居るものではない。之に反して經濟上の動機は、宗教の信仰の様に人を狂熱せしむることは少いけれども、其の代り二六時中の大々部分を通じて、我々を支配して居るものであると申しました。如何なる地位の人でも、其生活の維持と云ふことが、時間的に申すと、一番長時間其人を動かして居ることであり、社會の下層になればなるほど、生活の維持が人の考へを支配することが多くなり、貧しい人になれば、殆んど其事に計り屈託して居る有様であります。

す。一國民經濟中の人民の大多數は此の如く生活の維持に其心の大部分を占領せられて居る人々であります。此れは決して理想的状态ではありません。我々は社會大多數の人々が生活維持の心配以外に、綽々たる餘裕を有する様になり度いと切望して已まざるものであります。今日の實際は中々左様云ふ結構な状態には達して居りません。従つて單に、生活維持と云ふ點から見ましても、我々は常に其の全からんことに心を用ひて居るものであります。生活の維持を全からしめんとするには、收支の適合に付て絶えず心を用ひなければなりません。唯だ風俗習慣に追従するだけではいけないのであります。此く生活維持を全からしめん爲めに、收支適合を圖りつゝ價値の判斷をなす行爲が經濟行爲であります。故に同じ事でも其經濟上の方面は常に價値判斷を下されつゝあるものであります。此く絶えず價値判斷を爲しつゝ、收支の適合を圖る方面が人間の經濟行爲であります。經濟行爲と申したとて、何も特別に左様云ふ行爲がある譯ではありません。人間の行爲を經濟上の立場から見た方面を名けて經濟行爲と申すものであります。例へば物を買ふと云ふ行爲は人の行爲でありますが、此は法律の眼から見れば、一の法律行爲でありますし、經濟の眼から見れば一の經濟行爲であります。價値の判斷を貨幣に見積つて收支適合を圖ると云ふ點が一の經濟行爲であります。

收支適合には目的の確立が必要

さてかく不絶收支の適合を圖るには、目的を定めることが必要で、定めた目的は、之を明瞭に自覺して居らなくては、收支の適合を正しくやつて行くことが六ヶ敷であります。我々は他の事柄に付ては、單に習慣的にやつて居て済むとしても、收支の適合を圖る上に付ては、其れでは濟まないのです。必ず一々目的を立て、之を自覺することを要するのです。是れ經濟行爲なりと云ふ一事を、特に力説する必要がある所以であります。經濟行爲とても、國の風俗の支配を受け、又た其個々人の習慣によつて束縛せられること甚だ大なるものであります。少くとも收支適合と云ふ一點に就ては、習慣に従ひつゝ猶一々に價値の比較をなすものです。

金錢の事柄は他人

友達同士と雖も金錢問題に付ては他人と申す事があります。獨逸の諺では *In Geldsachen hort die Gemüthlichkeit auf* (金錢の事柄には好意中止す) と申します。此は寧ろ其弊の方を言つたものであります。又た同時に他の事なら、友達の間柄彼我を混同して、一々に打算せずしてやる人でも、金錢の問題

即ち貨幣價值比較の問題となると、彼我の別を立て、チャンと目的と手段とを正しくして行くことをも言表はして居ります。是れが目的行爲たる經濟行爲の特色であります。手近い例を以て申すと書物の借貸と云ふものは、兎角杜漏に流れるもので、他の事には心掛の善い人でも、友達から借りた本を何時迄も戸棚に突込んで置いて仕舞ひ失くすなどと云ふことは往々あります。故に昔から書物を愛蔵する人は、門外不出だの他貸無用だのと云つて、種々苦心したのですが、其れでも、此の書物貸借道德の低い爲めに、古來の貴書珍籍の永久になくなつて仕舞つたことは随分ある様です。然るに、金銭の借貸となると丸で違ひます。借りた本を何時迄も引張つて置いて、別に道德上の悪事とは見做されませんが、借りた金を返へさない人は、法律上は勿論として道德上からも又た甚だ非難せられます。即ち經濟的意義のある貨幣價值に關係ある行爲は、他の行爲よりも遙かに嚴格に取扱はれます。是れ必竟經濟行爲は明確なる目的行爲である理を明示する所以であります。

第十三章 價值・價格及貨幣價值

物の蓄積は價值の蓄積に非ず

我々の經濟行爲の觀念は、昔も今も同じといふ譯には行きません。生計を維持するといふことは、同じで變りはありませんが、此生計維持といふ目的の爲に行はるゝ所の一々の經濟行爲の根本の觀念は、昔と今日とは大變に違つて居ります。既に前に申した通り、昔に於ては經濟生活の根柢は物資の潤澤、即ち物に就ての適合にありまして、總ての事が之に基いて立てられて居ました。今日の經濟生活の根柢は、物資の潤澤でなく、餘剰を成る可く多く造り出すこと、餘剰を累積することは是れであります。餘剰は餘であります。只物を餘したからと言つて、それが經濟上の餘剰になるとは限りません。残した所の物がそれだけの用をなさなければ餘剰になりません。昔の様に、米を貯蓄して置くといふことは、累積ではあります。が、必ずしも餘剰の累積となるとは限りません。米は取つて置けば置く程味が悪くなつて、終には蟲が附て腐ります。

其の一例

我が日本の政府に於きまして、先年米價調節の爲に何十萬石の米を買ひまして、大藏省の保管に屬し之

を蔵に入れて居ります。所が此米は永く積んで置くほど悪くなりまして、誰も望手が無い様になります。一年や二年では左様でもありませんが、三年・四年となると、米の質が悪くなつて、仕様がなない様になるそうです。尤も其は貯藏法にも依るでせうが、イクラ氣を付けて貯藏しても古米は其味新米に及びません。ソコデ差換の必要が起りますが、矢張り大分損になると云ふ話を承はりました。又新聞紙にも出て居りました。此れ即ち物を積んだからとて、必ずしも餘剰となる譯でなく、或は却つて不足を生ずるに至る道理を例證するものであります。

愚なる米穀貯藏

昔ならいざ知らず、今日に於て此多量の米を、而も政府は米價調節の爲と言つて蔵の中に入れて置くといふことは愚な話で、置くならば置く様に倉庫の設備を十分に工夫して、米質を害さぬ様にす可きであります。其には其々入費もかゝり又其道の知識が要ります。人氣取り政略の俄か思付きで以て、相當の準備もせず無暗に米を積込んで餘剰どころか、只腐敗物を累積するのみとなります。餘剰の蓄積といふことは斯の如きことをいふのではありません、必ず價値のあるものを積立、即ち價値を積重ねることを云ふのです。大正九年九月追記。此頃になつて外國米の値段が下つた爲め我政府は其貯藏の外米を如何することも出来ず甚だ困つて居ります。私の豫言は中りました。

物を亡ぼして價値を造ることあり

又場合によつては、物を積重ねて價値を造るのではなく却て物を亡ぼして價値を造ることがあります。其例を申すと、朝鮮には御承知の通り、人蔘といふ物があります。京城から十里許り北西の所に當つて、開城（一名、松都）といふ都會がありまして、それが朝鮮人蔘の本場であります。今日は其處の人蔘が大部分内地へも来る様になりましたが、私の旅行致しました時分は、未だ餘り日本へは來ませんで、重も支那へ輸出して居りました。支那では高價で賣れますから、當時朝鮮の宮内省に蔘政局と云ふものがあつて、官營事業として可成の收入を得て居りました。其一手賣捌を日本の或る會社がやつて居りましたが、或年上海其他の支那市場に於て、人蔘の價が非常に下落しました。是を賣出せば元が切れて損をする程であつたソウです。其で誰への英斷であつたか知りませんが、此人蔘を仁川の埠頭で焼却したソウです。人蔘は高價なもので一斤何圓といふものを徒に燃して仕舞つたのです。これは物と云ふ點から言へば、非常に勿體ない話で、藥にして置けば大變役に立つものを、ムザク燒棄するのは冗なこと不經濟なことをする様ですが、それが却て經濟に合つたのです、と申すのは仁川埠頭で何斤燒棄たといふことを聞いたなら、數日ならずして上海に於ける人蔘の相場が回復して、残つた物が高く賣れまして、安値で皆賣つたよりも

焼いて仕舞つた残りを高い値で賣た方が利益で大いに儲けたとか云ふ事です。それは物を減じて却て價值を増した例であります。事實は焼いたのではないといふ説もあります。焼いたと稱したといふ話もあります。或は少し焼いた丈で澤山焼いた様に見せて、それで相場を上げた杯といふ話もあります。それなら尙以て結構でありませう。欺かしたのは甚だ怪しからぬと言へば言へますが、營利の上から言へばそれは大變巧いことをやつたのであります。これは甚だ不都合なことを意味して居ます。丸で役に立たぬものなら兎に角、多少でも人生に益のあるものを、ムザ／＼商賣の利益の爲に燒棄するのは甚だ怪しからぬといふことも言へますが、兎に角物が減て却て價が高まるといふことの一例であります。

價值餘剰の累積

今日の經濟行爲は、斯くの如く價值の餘剰を累積して、價值に見積つて餘を多くするといふことが事實であります。收支適合といふのも、收支を計算をしまして收より支を引いた値打の餘が多くなる様に之を使用することあります。動機も色々ありますが、これが一番強い動機で、外のもは此動機に支配せられるのであります。

價值と價格

そこで今まで價值といふことを度々申しました。此價值といふことの説明を一寸致します。價值といふ字は、東洋でも古くから使つた字で、支那でも餘程昔から使つて居ります。價值と言たり、價直と言つたり、或は物直と言たり、兎に角價值といふ考へが古くからありました。けれども此考へは今日の様にまだ明確ではありませぬから、價值と價格とは兎角混淆してあります。日本の普通の言葉を以て言ひますと、價值といふのは物の値打といふことで、價格といふ方は物の直といふことであります。直と値打とは違ひます。直と値打は誰も違ふといふとは氣が附きますが、價值・價格といふと混淆します。(此外に直段と云ふ語があります、これは、直でありますが、強て區別すれば、直の平準・直の位付けと云ふことであります。又相場と申すのも、直のことではありますが、これは、市場の通り直段、即ち市價のことで、必ずしも現實に授せられる直のことではありません。現實に授せられるのは單に直と申すのが適切で、其れを位付け、平準として、一列に考へますときには、直段と云ひ、通り直段、即ち市場に於ける一般的直段と云ふ意に用ひる時には相場(市價)と申すのであります。昔の思想に於て混淆したのは無理もありませんが、今日でも價值と價格は随分混同して使つて居ります。此二つのものは大變縁の近いもの

ではありますが、さりとて決して全然同じものではありません。大いに違ふ點があります。それは經濟上の事柄を考へるに付ては、是非知らなければならぬのです。分り易く其區別を説いて見ませう。

價格の說明

普通の經濟書には、價格とは金錢額を以て言ひ現はされた價值であると書いてあります。併し適切に申すと夫では足りません。價格とは或物の處分或は使用に對して現に要求せらるゝ代價たる金錢の一定額であります。即ち物を動かすこと（これを價值の移轉と申します）に關係することでありまして、此關係を離れて價格と云ふことを考へることは出来ません。此茶碗を我物にしようといふには代價を拂はなくてはなりません。其代價を例へば茶碗一個をやる爲に扇子十本持て来いといふことも言へます。それが代價であります。茶碗一つの代價は扇子十本であります。今日は左様云ふ風には申しません。或物を動かすに付て、扇子十本とかコップ十個とか申さないで、貨幣何程を持て来いと申します。即ち茶碗を一つやるから十錢持て来い。即ち茶碗一個此代價金十錢也、十錢持てくればやると申します。大工一日の手間賃金三圓也と申す、即ち大工一人をして一日働かしむる爲には三圓といふ一定の金額を渡せば宜しいのです。一人の大工一日の労働を我が自由に使用する爲には三圓といふ一定の貨幣額を代價として要求せられるので

す。其物でなく、其物に代る物があつて價格となるのです。大阪邊では能く店頭に、代二錢・代五錢等と書いてあります。東京では餘り代とは書きませぬ、金と書きます。梨を積んで置いて一山金五錢とあります。其梨の一山は五錢ではありません、梨の一山でありますが、此梨一山を買ふには金五錢を持て行けば宜い、金五錢を置かずして梨の一山を動かすことは出来ぬ、梨に代るものは五錢であると申す意味であります。

代と云ふ字は甚だ適切

代といふ字は大變適切な字であります。價格は其物でもなく其物の性質でもありません、代りであります。此の時計は十五圓であると申しますが、時計が十五圓ではない、私の此の時計はニツケルの時計・錆れた時計・はげた時計といふことしか言へません。十五圓の時計といふことは決してありません。所が私共がそれは十五圓だ二十圓だ三十圓だといふことを言ひますのは、時計其の物のことでないのです。

人事關係に於て物を動かす爲めの代價

其意味は、人事關係の上に於て此物を經濟的に動かす（即ち賣買する）爲に五圓を要し、十圓を要し、十五圓を要すと申すこととあります。其五圓・十圓・十五圓は其物に代るもので相手方とあります。其物に附着して居るものではありません。此家は三千圓であると申しても、實は三千圓ではありませんが、此家を人事社會の關係上、之れを經濟的に我が所有に歸さうといふ時には、三千圓の代價を要すると云ふ意味であります。其を長たらしく言はないで、此家は三千圓であると申すのが習慣になつて仕舞つて、我々の頭の中で物の代價は、即ち其物に固着して居る所の性質であるかの如く考へる様になつて來たのです。

人をも代價にて言表す

英吉利や亞米利加では人も矢張り代價で言ひ表はすことがあります。ヴァンダービルトは何億弗である、ロツクフェラーは何十億ダラだ等と申します（英語で He is worth ten million dollars 等と申します）。ロツクフェラーが何十億ダラといふのは、ロツクフェラー其人が何十億ダラではない。ロツクフェラーは一個の老爺さんで何十億ダラとは別の物です。只ロツクフェラーの持つて居る物、彼が處分し使用し得る所の價値を、金額で言ひ表はした高は何十億ダラであるといふ意味であります。是は所有財産を以て人の値打とするのですが、又収入を以て其の人の値打とする場合もあります。ウキルソン大統領は何萬弗だと申しま

す。それはウキルソンが一年に何萬弗の俸給を貰ふといふことであります。あすこの手代は三百弗こちらの社長は二千弗等と社會上の位附も、其人の取る貨幣の高を以て言ひ現はします。外の國ならば爵といふものもあり、勳章といふものもあつて其人の等差を言ひ現はします。あの人は伯爵だ、あの人は男爵だ、或はあの人は郡長だ、校長だ、社長だ杯とそれ／＼相當な尊敬を拂ひます。亞米利加へ行くと位や爵はありません、尊敬の目安は錢の高であります。金を多く取る人がより尙く見えます。亞米利加では、概しては利口な人は収入が多い、収入の少ない人は劣る人と看做されて居ります。収入の多い人は人として優れて居るといふことを意味する。然し事實は亞米利加と雖も、必ずしもさうではないのですが、社會上先づさういふ風の見方をするのが通例となつて居ります。人間萬事に付て金の價、金の儲かるといふことが、着眼點になつて居ります。如何に徳の高い、知識の優れた者でも金を持たなければ、劣敗者だと看做す風があります。それは今日の經濟生活の根本事實であります。貨幣の價値で物を見る、即ち價格で物を見ると申すのは、色々弊害もありますが、弊害があるから此の實際上の事實を無視するといふことは出來ないのであります。

經濟上の價値と其以外の價値

扱て價值といふものは、必ずしも貨幣に關したことを計りではありません。貨幣に關しないでも價值といふものは幾らもあります。西洋の學問で價值といふことを言ひ出したのは經濟學でありますけれども、今日では哲學の上でも價值問題といふものがあります。倫理學にも價值問題があります、或學者（塊太利のマイノング氏の如き）は倫理學とは人が人に對する價值を研究する學問であると申して居ります。

價值は自然事實にあらず

然らば此の價值とは、一體どういふことを言ふかと申しますに、先以て自然事實でないといふことを知らなければなりません。價值は價值、自然の事實ではないのです。天然野生の儘ではそこに價值といふものはありません。文明文化といふものがあつて初めて價值があります。

目的と手段との對照比較に基く

文化があつて人が或目的を立てます、左様すると其目的に對して手段といふものが起つて來ます。目的と手段の二つがあれば其手段と目的とを比較するといふことが起ります。前章の例で申して見ると、私が金澤へ來る時に汽車に乗て行かうか馬車で行かうか車で行かうか自動車で行かうか、又は同じ汽車に乗る

にも直江津廻で行かうか、米原廻で行かうか、又同じ乗て行くにも三等に乗らうか、二等に乗らうか、一等に乗らうかといふ取る可き手段が色々あります。何月幾日迄に金澤へ行きさへすれば宜い。其行くといふ目的に對して、色々手段があるので、其幾多の手段を比較して見て、これが 番適當である、これが費す所が一番少くして、得る所が一番多い方法である、これはそれより劣つた所の方法であると云ふやうに、色々程度が違ひます。

主觀的判斷の度盛り

さうすると其程度に對して我々は度盛りをします。此の度盛りが即ち價值であります。言葉をかへて申すと、價值とは或目的に對して或手段が有する意味の度合であります。何れも人間の主觀的判斷でありまして、物自身にある譯でなく、我々の心にあるものです。或人は甲の手段を以て目的を達するには十分なりとしても、他の人は其を以てまだ十分でないとするでせう。或人は乙の手段を以て目的を達するには半に至らないと思ひますが、他の人は十分にはあらずとも半を過ぎて居ると認めるでせう。即ち見る人々に依て見方が異ひます。此く價值判斷とは人に依て違ふものであります、故にこれは自然事實ではありません。自然事實ならば色々違つた判斷がある譯はありません。例へば規那を人間に飲ませれば熱を冷ますと

いふことは、乞食に飲ませても王公貴人に飲ませても同じことであります。乞食には少し効いて、王公貴人には多く効くといふことはありません。其の人の體質に依つては違ひませう。強壯な人と弱い人とは違ひませうが、社會上の身分によつて藥の利目に違ひのある事はないのです。所が價值判斷は違ひます。同じ藥を飲ませるのですが、王公貴人に供給するには値が高いかも知れません。

藥には餘り左様云ふことはありませんが、贅澤品杯にはさういふことは往々あります。値が高ければ美味いと思ふことがあります。美味い不美味いといふことが、さう其物に計りある譯ではなく、飲む人、食べる人によることが多いのです。即ち物其物に付ては別に違はなくとも、これを價值の判斷の上から見ると違ひます。此は美味いと云ふ、其美味さを價值に引直して見ると、色々あることになります。價值判斷は人の心にあつて夫々に違ひます。其違ひが市場で物を賣たり買たりする上に働きを起します。何れ後段、價格論の所に行つて詳しく申上げますが、國民一般誰でも使ふ所の品物が上つたり下つたりするのと、極少數者のみに重んぜられる品物の價が上つたり下つたりするのは大いに違ひます。といふのは畢竟物の價、價格といふものは價值判斷から起るからです。價值判斷といふのは、人間に依て違ふ心の判斷であります。そこで此の判斷を成る丈け誤らぬ様にするといふことは、經濟の道を得る所以であります。

價值判斷の標準

其誤らないといふ標準は何にあるかと言へば、詰り其時其時代に於ける最大多數の人の價值判斷に合することは是であります。價值判斷は何時も相對的のものでありまして、絶對的に誤らないとか、正しいといふことはありません。分り易い例を以て言ひますと、物の當て物の様なものです。多數の者が言ひ當てたものが價となるのです。

實際の一例

例へば此頃能く流行ます新聞社で新聞を賣る商略上、海水浴場だの温泉場だの、投票を募ります。何處の海水浴場が宜か十箇所投票せよと廣告します。然るに副懸賞として當選する海水浴場全部に投票を入れたい人にも賞を呈しますと云ふ、即ち當選の當つてあります。何處々々十箇所が良い海水浴場と多數の人が認むるか、多數の人の判斷が一致する所を豫め當るのであります。之れを當る人は多數の意向が何處にあるかを見破つた人で、これが幸運なる當選者となります。大多數の人の價值判斷の那邊にあるかを當る人は即ち價值判斷を誤らぬ人でありませう。絶對的の善い悪いは別問題です、當選した十ヶ所の海水浴場

が、必ずしも最良で他に勝るものがないと云ふ譯ではありませんが、大抵これが當選するだらうと見越し
たものが副懸賞の當選者です。

價値判斷は常に相對的なり

今日の經濟社會に於て 價値判斷を誤らぬといふこともこれと同じであります。物の絶對的價値を問
題とするものではありません。此品は百圓出しても宜いと思ふ人でも、世上で十圓で賣つて居れば決して
百圓は拂ひません。五十錢か六十錢の値打しかないものだが、世間では大變値打があるとして五圓でも五
圓五十錢でも買ふといふ此多數の意向を指して五十錢で拵へて五圓で賣ります。此の如く其物の絶對的
の價値の如何に非ずして、社會の多數がどう見るかといふことを正しく見るといふのが今日の經濟上に於
ての正しい價値判斷であります、決して自然的現象ではありません。人生の關係に於て、社會の表面に於
て定められる所のものが價値判斷です。此頃當り屋といふ者があります。當り屋といふのは、世間多數の
赴きさうな所、形勢の赴きさうな所を見越して當つた人のことです。其見込が當らなければこれは外れ屋
となります。當り屋にも事實の根據のない當り屋もあり事實の根柢のある當り屋もあります。世間多數の
赴く所は赴く可き道理があります、全然架空の事實に依て動くものではありません。それだけの事實を十

分に心得て置いて、跡は己の判斷でこれに投じて當るのです。

社會的判斷に一致するを要す

これが爲めに今日の經濟生活は、一方に於ては甚だ單純になつて來ましたが、他方には甚だ不安心な且
暮を測られない經濟組織の根本的不安といふことが起つて來ました。人は總て社會多數の意向の赴く所を
考へてやらなければならぬことゝなつて居ます。孤立して只己の意見丈に従つて行くことは出來ません。
己だけの意見に従つて行けば、社會の落伍者となります。己一人置いて行かれて仕舞ひます。自分はこれ
が善いと信じて、社會の輿論が悪いと認めれば損をします。自分は先祖傳來の一口の刀を持って居て、こ
れを何百金に賣れると思つて大事にして居ても、社會では其程に評價しないとなると取つて置いても値が出
ない。それよりも多少の價のある内に早く賣つた方が得であります。殊に不動産土地杯にさう云ふことが
あります。此等の値段は、己の評價に依つて極まるものではない、社會一般の評價に依つて値が極まるの
であります。己が何をしなくとも價が上がることもある他方には、非常に骨を折つて改良に力を盡しても尙
ほ維持することが出來ないことが幾らもあります。今日の我々は自由になつたと共に、此く著しく社會
評價の變動を受けます。社會全體の價値判斷を愈々益々承れることが出來ないやうになつて來ました。今

日の經濟生活の根本的性質は即ち茲にありませぬ。

正確に言表はし得る價值

扱其の價值は、哲學上に於て言ふ價值もあり、審美上に於て言ふ價值もあり、又學問上の價值もあり、教育上の價值もあり、政治上の價值もあり、各種の價值がありますけれども、經濟上以外の價值は、其價值の度合を正確に言ひ現はす方法がありません。獨り經濟上の價值に至つては極微細な所迄も立入つて其度合を言ひ現はすことが出来ます。これが經濟上の價值と他の一切の價值と違ふ所であります。従つて一口に價值と言へば 先づ誰でも經濟上の價值のことゝ解釋します、價值論と言へば、經濟上の價值論の借用物といふ趣があります。

善惡を正確に言表すは困難

例へば倫理上の價值、善惡といふものでも、絶對の善・絶對の惡と言へばそれは分りますが、同じ惡なら惡でも其の度合、善なら善でも其の度合の極く微細な所迄言ひ現はすことは出来ませぬ。只漠然と善行太いに嘉すべし、人の模範になる杯といふことは言へますが、此人の善行は六十點で、他の人の善行は八

十點、又他の人は九十五點杯といふ様には申されませぬ 國家が勳功を極める時は勳何等と言つて、國に盡した者に數字の度盛りをしますが、それは必ずしも功勞の度盛ではありませぬ。身分の賤しい者ならば、どんな功勞を立てても勳八等以上にはなれない人もあります。三年間に五六回議會に出た丈で勳三等になれる人もあります。判任官ならば二十年間も勤めてやつと勳六等になるかならぬです。即ち其の度盛りが大變違つて居ります。それは其人のした善い事の度盛りでなく身分に従つて高下があります。分り易く申せば、均しく善い事をして家僕や下女のしたことであるならば唯だ感心だ位の一言で濟んで仕舞ひます。所が家の坊ちゃんやんが同じ事をする様々な褒美を下さる。事柄が善いのでない。餘り役に立つ様なことはしないといふ前提の下にある坊ちゃんだから、一寸したことをしても大變善い事になるのです。斯の如くに人の度盛りといふことは、餘程不正確であります。

點數は不正確

學校で品行點といふものを附けます。或生徒が百點或生徒が九十點杯と附けますけれども、それは只便宜上附けて居るので 其が必ずしも學生達の道德上の價值の全部を言ひ現はして居るといふのではありません。道德上から申せば點をつける先生の方が附けられる生徒より遙かに下位にある者もないとは限りま

せん。學問上の價值も學校で試験の點數を附けます。それは諸君も御經驗がありませうが、點數といふものは決して學問上の價值を其儘代表して居るものではありません。只或標準に對しての度盛りをして居るに止まるのであります。百點の滿點を五倍しても宜い様なものもあるが、零を五倍しても足りない様な者もありませう。けれども零より百點迄の間よりしか附けられません。必竟只便宜上度盛りをして居るのであつて、正確に價值を言ひ現はすのではありません。審美上の價值もさうであります。現に文部省の展覽會は先年から一等賞・二等賞等と云ふことを廢して仕舞つて、只佳いと認めるといふことだけにして仕舞ひました。一等賞・二等賞・三等賞、跡は痕跡、此の區別さへも六ヶ敷いものと見えます。況んや審美上の價值の微細な點はどうしても言ひ現はすことは出来ないであります。

經濟價值は正確に度盛せらる

他の價值は率ね斯くの如くでありますが、獨り經濟上の價值は微細な點まで正確に度盛りをする事が出来るのであります。何故であるかと云へば、經濟上の價值は貨幣を以て之を言ひ現はし、貨幣を以て見積ります。所謂商人は錙銖の利を争ふ、極細かい所まで割つた小さいものを争ひます。此く綿密な所迄立つて價值の比較が出来るのは金錢に見積るからであります。金錢に見積るのでなければさういふ微細な比

較は立ちません。之に依て均しく價值の學問である多くの學問中、經濟學は一番精密に研究が出来るものであります。化學物理の學問は極精密に研究が出来ます。數學も綿密に研究が出来ます。即ち數を以て計り、分量を以て計ることが出来ます。經濟學は人間に關する學問ですからそれ程にはゆきませんが、同じ人間に關する學問の中では、一番右等の學問に近く、價值を言ひ現すのに數字を以てすることが出来るのであります。

欲望の觀念より出立する通説

普通經濟生活又は經濟といふのを説明するに、欲望といふことを一番先に言ひます。私も嘗ては、其例を襲踏致しましたが、今日では其れを改めまして、以上説明致した様に欲望といふことを先に申さないで一番先へ目的行動といふことを申し、それから價值のことを申し、而して其價值は貨幣で見積る貨幣價值であると斯う三段に説きます。普通はさうでなく欲望といふことから説き始めます。其説明の仕方に依りますと、人間は欲望といふものを以て生活をして居る欲望を満すといふ事が即ち人生で、人生とは各種の欲望充足の合計だと申します。其欲望を満すには色々の方法がありますが、經濟上に於て欲望を満すには、色々の物質が要る、此く物質的欲望を満すことが即ち經濟といふことである。であるから經濟學と

いふのは、詰り物質的欲望の満足といふものを研究するものであると、普通は斯ういふ風に説明します。今日最も多數の學者は其方法を探つて居ります。

通説取るべからず

所が今日の最も新しい立場から言ひますと、斯の如くに欲望といふものを恰も一つの自然事實である様に前提として、それから出發して經濟上の事を論ずるのは學問上當を得て居らないのです。さういふ様にすれば經濟學は詰り一つの心理學・應用心理學になつて仕舞ひます。それで善いといふ人もありますが、私はそれでは悪いと存じます。經濟學を一つの心理學・應用心理學にして仕舞ふのは間違つて居ます。獨立の學問たるからは欲望といふものを凡ての根本事實として置いて、これから出發するといふ説き方はいけません。乃ち從來の説き方を改めなければならぬと存じます。

循環論法に陥る

欲望を第一に置いて、それから論じ出したのでは、甚だ困ることが起ります。即ち循環論法に陥つて仕舞ふのです。人間に欲望のあることは、疑ひはありませんし、又人間は欲望を満す爲めに行動するといふ

ことも疑ひありません、欲望の満足といふことが目的であつて、其れから起る目的行爲が經濟行爲であることも疑ひありません。併し欲望を満すことが總て皆經濟である譯ではありません、欲望を満すには、經濟行爲もあれば、法律行爲もあり、倫理行爲もあり、社會行爲もあり、政治行爲もあり、其他色々の行爲があります。人間萬事一切の行爲は欲望の満足にあります。人が自分以上の力ある者を信じて之に身を委せたいといふのは、一つの宗教的の欲望であります。高尚なる理想を有し、此の理想を充實することをしたい、それに依て多數の人間から尊敬され、多數の人間から愛せられる様になりたいといふ所の倫理的の欲望があります。倫理行爲はその欲望を満す一つの道行であります。人は他人を支配して見たい他人の上立つて見たい、他人をして己の意志に服従せしめたいといふ欲望を持って居ます。此欲望を充たすものは即ち政治行爲であります。政治家は斯の如き政治的欲望を満さんが爲に行動します。本能的行動は別として、人生の行爲は目的行爲である限りは皆何れも欲望といふことが動機となつて居ります。それならば其均しく欲望を目的とする、人間個々の行爲の中で經濟行爲といふものは何を標準として區別しますか、どういふ特色を備へたものが經濟行爲になるかといふ、此が問題になるのです。

經濟行爲の特色は物質に関するにありとの説明

之に對して物質を以て欲望を満すといふことを以て特色とする行爲が經濟・經濟行爲であるといふのが普通の説明でありますけれども、これは甚だ不十分であります。前段にも一寸申上げたことですが、實際の事實として、誰が見ても疑ひもなく經濟上のことであるものでも、物質のみを以て満されて居らぬものが澤山あります。一家の經濟を見ても直ぐ分ります。一家を經濟して行くには食料品・衣料品其他各種の物質が要ります。けれども只物質があつた丈けでは一家の經濟は成立ちません。一家の主婦が之に任じて働き、又下女下男があつて働く無形の働きといふものがなければなりません、物質計りではないのです。又廣く流通經濟の上に付て言ひますと、今日の流通經濟に非常に重要な關係を持つて居る所の金融・信用は物質ではありません、信用といふものは微妙なる心の働きで、信用といふこと金融といふことは、必ずしも金錢の問題ではありません、人事間に於ける運用であります。政府の發行する所の公債が上るとか下るとかいふのは公債其物に變りがあるのではなく、國民の政府に對する信用の如何、其政府の財政的の信用如何が重大なる關係を持つて居ります。財政的信用といふものは物質ではありません。

欲望充足には物質を缺く可からず

反對に物質を以て欲望を満してもそれは必ずしも經濟とは限りません。欲望を満すといふことは全く物質に依らないでは殆んど有り得ません。道徳上・倫理上の欲望を満すといふことでも多少の物質を要します。宗教上に於て神を禮拜する、基督教ならば教會堂を拵へる佛法ならば寺を造る神道ならば神社を造る斯の如く物質が要ります。禮拜にも色々の用具が要ります。學問上の欲望を満すには、書物も要れば試驗室も要る、研究の材料も要る、丸で物質がなくては學問上の眞理の研究は出来ません。物質に關するものが皆經濟だといふことは決して言へないのであります。物質で以て満しても必ずしも經濟とならざることあり、經濟と言へば必ずしも、物質許りに限つたものではありません。否物質よりも遙かに人間の働き、所謂勞働、又人と人との關係、信用といふ様なことが重きを爲して居ります。

經濟行爲の特色は他に在り

斯の如く申せば、何が經濟であるかといふ特徴が分らないことになりす。即ち循環論法に歸着して仕舞ひます。此點から申しましても欲望前提論は不十分であることが、十分判ると存じます。それといふのは、經濟生活は欲望を主として満す色々の方法の中の一たることは無論であります、其が特色ではないからです、特色は外にあります。即ち欲望を尤たし經濟行爲をなすに方つて價值判斷をすること、而して其判斷の價值は凡て貨幣の額に見積られ言現はされると云ふ此一事であります。以下其の意味を説明し

て見ませう。

善と財に共通の點

我々が生活を維持するに付いて價值判斷を爲して行つて、成るだけ生命を進めて行きたい、成るだけ價値のあるものを取て價値の少いものを捨るといふのは、即ち我が生を進める所以であります。倫理に於て云ふ善惡も同じ意味であります。倫理上に於て善とは何である。畢竟するに人生を全體として向上せしめる所のものが善であります。惡とは人生を全體として墮落せしめるもの、謂です。惡を苦痛と感じ善を快樂と感ずる己の生命を進める所のものを愉快と感じ、己の生命を害する所のものを苦痛と感ずる。社會全體一國全體を進めて行くことを喜びとし、社會國家に害あるものを憂とする、是が健全なる社會の狀態であります。但し必ずキツチリ合致するとは限りません、多少の狂ひはありますけれども、大體に於て個人に取つて言へば、己の生命を強壯にする、己の身體を強くする、己の地位を進め、己の理性を磨いて向上することが、國家から言へば國家社會の利になりますから國家社會總ての者が喜ぶ、喜ぶから従つて之を推究するといふことになるのであります。斯の如く推究して行けば、段々社會を進めることになり、反對に社會を害し、國家を害する者は退けられる、國家社會を害する者は己の身體を害し己の生命を墮落する、それが愉快と個人に感ぜられる様になれば、遂に其個體は滅亡し其社會は衰へる外はありません。酒を飲めば段々身體が愉快である、飲めば飲む程益々美味くなつて段々苦痛になることを知らぬ、即ち己を進める所のことでなくして、己を害する所のものを喜ぶ、或程度迄飲むのは身體の健康を進め愉快と感ずるが、其度を過ぐれば害になる、己の身體を進める時は愉快になる、それから先は害になるから、これを捨るといふことが眞に善いことになるのです。

判斷の錯誤からず

斯くは申すものゝ國家社會の上でも個人に付ても、此の判斷は随分誤ることがあります。國家・社會に付て申せば外國との關係に於きまして、政治家が己の野心や己の考へを満す爲に國民を欺くことがあります。見すゝ國の爲に害になることをし乍ら、此は國家の利益になることをした、汝等喜べと言つて國民を欺き、提灯行列をやれ旗を出せ踊りを踊れと言つて國民を欺くこともあります。國民は欺かれて萬歳を唱へます。安くんぞ知らん、萬歳場裡に國には幾らか害が起つて居ることもありませう。これは物の見方の違ひであります。

日露協約の嬉喜

例へば日露協約を發表せられました時、金澤ではまさかさういふ馬鹿なことはなかつたと思ひますが、東京では提灯行列をやりました、私は馬鹿らしく思つて居ります。何も深き意味も考へないで、商人の徒弟を集めて提灯行列をしました。提灯行列もすべき所にすれば宜いが無暗にする時は却つて累となります。日露協約をすべきであつたか無かつたか其は知りませぬが、露西亞では日本であんなに提灯行列をして居るから何か餘程利益をしたのであらう。協約以外に密約をして、露西亞の鐵道を貰ふとか、日本から色々軍需品の供給を受けなければならぬから、其弱味に附込んで不當の利益を受けたのを喜んで日本人は提灯行列をしたのであらうと露西亞人は己の心を以て他人を忖度しまして、日本人は譯も分らず提灯を擔ぎ出すオツチヨコチヨイだとは思ひませんから、何か具體的の利益を得たのを喜ぶのだらうと邪推して、却て悪く誤解して居るといふ或人の話を聞いたことがあります。此が兩方の爲に出來たのならば、露西亞で提灯行列をやり、電車に日本の國旗を翻しさうなものです、日本の國旗を一本も出しません、提灯行列もやりません、否人民の多數は日露協約には全く無頓着でありました。日本の様に日英同盟で英吉利の旗を出し、日露協約で露西亞の旗を出すと言へば、終には世界萬國の旗を皆持て居らなければならぬこ

とになるかも知れません。露西亞と同盟するも宜い、何處の國と協約しても宜いが、併し國全體として喜ぶ可きか否かは、其結果を見なければ分りません。然るを未だ何だか分らぬ内から政治家の御都合、其御都合に迎合する輕薄漢に唆されて、ウラーウラー提灯行列とて大喜びをしましても或は東清鐵道も割讓して呉れず、軍需品の注文も行惱みと云ふ嬉喜びとなるかも知れません。是れ即ち一種の政略の爲めに國を進むることに就て判斷を誤る一例であります。

個人に付ての錯誤

我々個人に付ても随分さういふことがあります。一時咽喉の乾いた時に冷たいものを飲むと愉快だから飲みますが、それは害があつて跡で下痢をする、これは判斷を誤つたものであります。酒を飲む人、利那の享樂に耽溺する人、何れも判斷の錯誤に陥つた人です。阿片を喫する支那人許りを笑ふ譯には参りません。見すく精神を亡ぼし身體を損するものを好み喜ぶ例は世上澤山あります。

富潤屋、徳潤身

倫理上の善・個人的の善・國家の善・社會の善、畢竟同じことで、詰り社會なら社會の生命、個人なら

個人の生命を進め生を充實する、それが善であります。其反對に生を滅却する、生を損耗する、生を輕減する者は即ち惡であります。經濟上の價値はそれと同じであります。ですから既に總論に於て申上げた様に、西洋の言葉では倫理上價値あるもの即ち善と、經濟上價値あるもの即ち財とは同じ字を使ひます。只倫理上で言ふ善は、生命の全體に付て言ひ、經濟上で言ふ時には、貨幣價値で以て計られる限りに付て申します。故に正確であります、其代り範圍は狭いのです。之に反し倫理の善は廣い、正確に度盛は出來ませんが、其範圍は廣いのであります。従つて倫理上の善は高級の善、經濟上の財は低級の善であります。支那の言葉に、富は屋を潤ほし徳は身を潤ほすと申す、其徳とは即ち善であります。徳は身を潤ほしますが、富は必ずしも身を潤ほすとは限りません、即ち倫理上の善であるとは限りませぬ。貨幣を餘計持て居る人必ずしも倫理上善い道德の人とは限りません。金を餘計得る人が倫理上優れた人とは限りませぬ、又反對に金の無い人が倫理上値打の無い人とは限りませぬ。

善と財とは終に一致す

併し乍ら、終局は經濟上に言ふ財、經濟上價値のあるものは、倫理上の善と合致するものです。兩者が合致するにあらざれば其國・其社會・其個人は永久に繁榮しないのです。社會の公なる道德を無視して

百萬の富を重ねるといふことは間々ありますけれども、終局に於てはそれは永續しません。社會に眞に徳あることを爲し、經濟上に於て富を積み、善財合致して始めて眞正永久に人生を進めることが出来るのであります。然らざる者はいつか滅びます。貨幣價値とは貨幣の高を以て言ひ現はす所の價値であります。金何圓何十錢金何弗といふものは價値の中で最も低いものであります。低いものであるが、最も具體的のものであつて最も之を捕捉し易いものであります。經濟の觀念は即ちそれから先づ入込んで行くのです。それが價値の判斷の手段として最も正確であり最も明瞭であります。明瞭であるから動もすると人は是だけでモウ満足するのです。即ち金さへあれば宜いといふ考になります。が其は間違ひで、斯く迄に正確であり、斯く迄に明確でありますがそれは出發點であつて終點ではありません。これから初めて人生の本當の價値、即ち善にも行き徳にも行き、有らゆる價値判斷の全體に這入つて行くので、貨幣價値は其第一着手に過ぎないのです。其事實は西洋の言葉に於て善と財とを同じ言葉で現はすのが最も好い證據であります。日本には善い譯字がないので、善と財とに使ひ分けたのであります。

貨幣價値の眞意義

乃ち今日の經濟生活の根本觀念としては、貨幣といふことを認めなければなりません。是特に今日は貨

幣經濟の時代であると言ふ所以であります。併し貨幣と言へば悉く皆貨幣に代るものではありません。只價値の言ひ現はし方を正確にする爲めに、經濟上では貨幣を借りて居るのであります。貨幣に代ないで済む場合も幾らもありません。又貨幣に代るといふから貨幣が非常に尊い、貨幣が萬事であると考へる、所謂拜金宗になるといふ憂があります、其は考へ違ひであります。

一の方法に過ぎず

今日の經濟行爲の觀念は決して貨幣のみを尊しとするものではありません、貨幣で言ひ現はし貨幣に引直して考へて見ると云ふ一つの方法です。丁度英吉利流の度量衡もあれば日本流の度量衡もある、佛蘭西流の度量衡もある。メートル式で言ひ現はしてメートル式を採用するから、必ずしも佛蘭西に心酔して仕舞つたといふのでないのと同じです。年代を言ひ現はすに、西洋紀元を用いた方が簡便だと言ふので、必ずしも泰西の正朔を奉ずる基督教に心酔するといふのではありません、便利だといふこと丈です。其如く貨幣を以て言ひ現はしますが、貨幣は何よりも尊いと見るものではありません。其より外に正確な言ひ現はし方がないからです、其が實際に於て最も能く我々の用に應ずる言ひ現はし方であるから其を用ゆるに過ぎないので。是で今日の國民經濟組織に於る經濟行爲の觀念が、粗々十分御分りになつたことゝ存じます。

第二卷 生産論

第四編 企業・土地及人口

第十四章 經濟本論の内容

總論と本論

以上第一編から第三編まで段々御話致しました事は總論に方るものでありまして、獨逸の學者は之を基礎論(Grundlagen)とか、汎論(Enleitung)とか名けます。英國では此部分は極めて簡單に Introduction(緒論)として論じ去ります。私は少し詳細に三編に分けて御話いたしました。さて本第四編以下は第二部になります、獨逸では之を色々に名けます。一番多く行はれるのは經濟生活の活動とか行程とか云ふ名稱であります。つまり此部分が經濟學の理論に方ります。故に之を經濟純理と申しても宜しいので

すが、私は汎論に對して之を本論と名けて置きます。汎論と本論其に結論を加へてつまり三と致します。本書は第一部總論を第一卷とし、第二部本論を第二卷生産論、第三卷流通論の二に分ちます。結論は別に卷を分たない所存であります。

従來の分け方

さて經濟本論は従來の慣例によれば之を四つに分けます。即ち生産論・交換論・分配論・消費論と致します。これは今日でも未だ廣く行はれて居ります。私はこれはいけないと信じて、本論は右申す如く之れを二大部に分けて、生産論と流通論とに致したのです。以下に其の理由を申上げませう。

經濟學四分法の起り

經濟學は前編に申した通り、元來英吉利で出來た學問でありまして、徹頭徹尾英吉利的臭味を帯びて居ります。經濟學が英吉利で出來た時は、英吉利が世界第一等の國、第一に富んだ國にならうといふ時でありました。而して其の最も肝要な問題は、如何に英吉利を富ますべきか、國を富ますにはどうしても個人が富まなければならぬから、如何にすれば個人が富む可きかといふこと是れでありました。即ち富といふ



一セ・トスチバ・ンアジ
Jean Baptiste Say
(1767—1832)

ものが經濟の第一の目的物であります。其富に付ての研究は第一に富を拵へることではなければなりません。即ち生産が第一の問題となります。然るに拵へられた所の富は、必ずしも拵へた許りで直に使はれるのでなく、互ひにやり取りせられます、之れが富の交換であります。次に交換せられた富は各數次の交換を重ねた結果、それ／＼歸着する所があります。或富は或所に歸着し、他の富は他の所に歸着し、かくて各々其所を得て鹽梅せられます、此は富の分配であります。扱て斯く分配せられた富を各人が各々己の考へに依て使ふことは消費であります。そこで經濟學の内容は自ら生産論・交換論・分配論・消費論の四つに分れることゝせられて居るのであります。

ジャン・バチスト・セーが唱道者

此く分けることを始めて唱へ出したのは英吉利人ではなく佛蘭西人です。即ち英吉利からアダム・スミスの經濟學が佛蘭西へ輸入せられましたとき、佛蘭西にジャン・バチスト・セーといふ學者がありました。此の人は餘り獨創の力のある人ではありませんが、人の説を取て之れを咀嚼し秩序を立て、祖述することの上手な人でありました。アダム・スミスの書物は餘り系統が立つて居りません。そこでセーはモツト分り易くシステムを立てやうといふので、生産・分配・消費といふ三つに分けました。これが經濟學三

分法の起りであります。其を獨逸の學者のヤコブと云ふ人が祖述したのを、更らに英國のボアローが採つて以來段々普及して來たのであります。キアナン氏の『生産分配學說史』と云ふ本には、セーは其の書の第二版に至つて始めて三分法を取つたとして此點に重きを置いてあります、若し左様とすると、ボアローの方が先きになるわけであります。然しセーは其第一版に於て編こそ分ちませんでした、内容は三分したので、ボアローは其をヤコブから更らに孫引したに過ぎないのであります。此點考證上不證策な事を申す人がありますから、一寸餘計な事ながら御注意までに申上げて置きます。

ジエームス・ミルの追加

然るに英吉利にジエームス・ミルといふ學者がおりまして、更らにモウ一つ交換 (Interchange) と云ふことを加へました。其以來經濟學は、富の生産・交換・分配・消費を研究するものであると、内容を四つに分けることになつたのです。今日に於ても大體に於て此の分け方が行はれて居ります。我邦でも文部省の極めた商業學校の經濟學教授要領でも、中學校法制經濟の教授要領でも大體之に依りまして、少し新しい説を入れて増補してある丈けです。

其長所は簡單明瞭

これは誠に簡單明瞭で覺え宜いので、生産・交換・分配・消費としてそれで經濟學を盡くすことになるのです。即ち全體を取つて之れを横に四つに分けて置いて、今度又之れを更に縦に四つに分けるのです。生産には四つ要素があります。富を造るには第一に土地がなければいかぬ、生産の要素は先づ土地であります、土地があつた丈ではいかぬ資本がなくてはいかぬ、そこで資本が第二の要素です。土地があり資本があつた計りではいかぬ、労働者がなければいかぬ、労働が第三の要素です。土地があり資本があり労働者があつても事業の經營者がなければならぬ、それを企業と申して第四の要素と致します。それだけさへあればどんな事業でも起る。此四要素の提供者が生産關與者の一切であります。そこで交換は此四つの階級の間に行はれ、分配も亦此四つの階級間に歸着すると申します。土地なる生産要素の提供者たる地主に對しては地代、資本なる生産要素の提供者たる資本主に對しては利息、労働なる生産要素の提供者たる労働者に對しては勞銀、而して此等一切を結合して事業を經營した企業者に對しては利潤が夫々所得として歸着するのです。如何なる事業でも此は共通でありまして人々の造る所の富は地代・利子・勞銀・利潤の四つに分れるのです。そこで地主は地代として這入つたものを消費し、資本主は利子として這入つたもの

を消費し、労働者は労働者として這入つたものを消費し、企業者は利潤として這入つたものを消費するので、右を表につけて見ますと縦に四本横に四本の線を引いた様になります。

| | | | |
|--------|--------|--------|--------|
| 消 費 | 交 換 | 分 配 | 生 産 |
| | | 地 主 | 土 地 |
| | | 資 本 | 資 本 |
| | | 主 勞 | 主 勞 |
| | | 働 者 | 働 者 |
| | | 企 業 | 企 業 |
| | | 主 | 主 |

交換と消費は別に細分せず

こんな簡便な學問はありません、四に分けて一つ一つ説明して行けば宜しい、覚え易いこと此上はないのであります。

一種の論理練習法

英吉利に於ては前に申した通り經濟學は一般に行はれる學問でありますから、斯ういふ風に致して誰で



ルミ・スムーエジ
James Mill
(1773—1836)

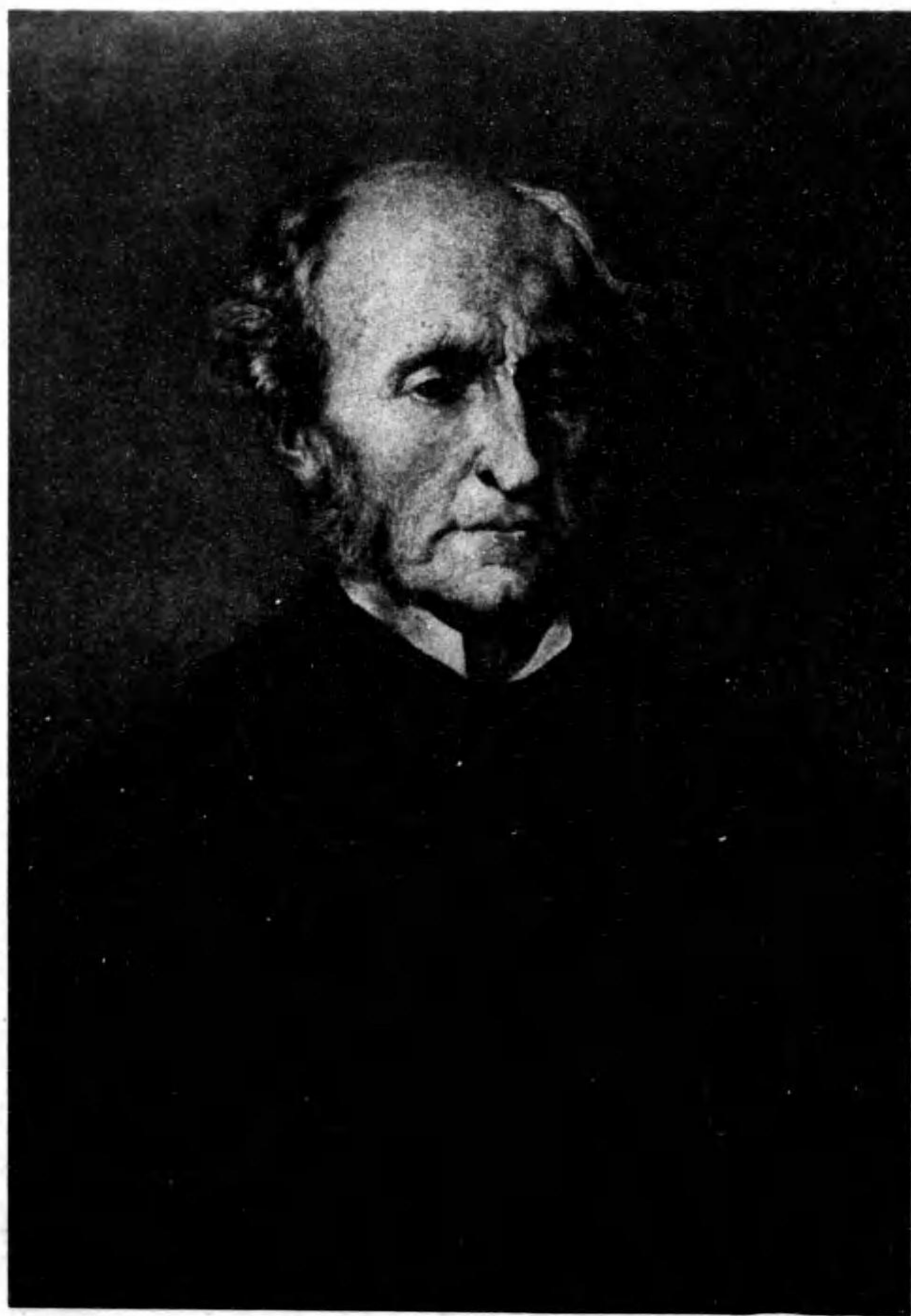
も覺え易いのを喜びました。四項に分け其一々に付いて簡單な原理原則を設けて説きます、それは一度覺えて居れば何にでも當嵌まると申すのです。英吉利では演繹論法が行はれまして一々事實の取調をするまでもなく、原理原則から推論するのですから、誠に簡便で一種の論理學の様に頭の練習として適當の學科でありました。

ジエームス・ミルは有名な心理學者でもあり、論理學者でもあり、經濟學者でもあり、政治學者でもあつた人です。殊に彼れの一大事業は、息子さんの教育を理想的に成就したことであります。息子さんのジョン・スチュアート・ミルといふ人は後に阿父さんに勝る大學者となりまして自叙傳を著し、如何に阿父さんが彼れの教育を掌つたかを書きました。父ジエームスは子のジョンが三つの歳から希臘語を教へ、八つの歳に拉丁語を教へ、同時にユークリッドで幾何學を教へ、一切の教育は家庭に於て阿父さんが擔當致され學校へは通はせなかつたのです。總領なるジョンを此く阿父さんがすつかり教へ込みまして、跡の弟や妹は兄に教育させました。この位親が子を教育するに、苦心した例は他には無いことゝ存じます。故にジエームス・ミルは大學者であつたが、其の後世に遺した最大産物は彼の著述ではなく息子のジョン此であると言はれて居ります、誠に左様でジョンは阿父さんに遙に勝る大學者となり、學問の進歩に忘る可からざる人であります。ルーソーのエミールといふ有名な本があります。此れは子供の教育法を審らかに書

いたものとして誰も知つて居る本ですが、其記す所はルーソー自ら實行した譯ではありません唯一の理想論であります。所がジェームス・ミルに至つては議論を唱へたのでなく自ら實際に模範的の教育を其子に授けたのであります。勿論息子ジョンが非常に偉い子であつたから彼の様に成功したのですが、父なる人の骨折も大變なものであります。息子のジョン・スチュアート・ミルは經濟學中興の祖として英吉利人は勿論今日世界の學者が大に尊重して居ります。我々も今でもミルの説は尊重いたします。さてミル幼時の教育は餘程面白い一種獨得の教育法でありました。今でも英吉利人の教育の理想を支配して居ります。ジョン・スチュアートの教育に於て父が最も重きを置いたものは經濟學でありました。

ミルの經濟原論の成立

ジェームス・ミルは經濟學に於ては左程得意ではなかつたのですが、子供を教育して頭腦を練らせ物の考へ方を正確にする、一點の曖昧を許さぬ切詰めた正確な考へをするには經濟學が一番宜いといふことを信じて居ました。依つて經濟學を一の頭練腦習法として息子に教へたのです。ジェームス・ミルの著したものに經濟要論 (Elements of political economy) と云ふ小さい書物があります。此はジョンを教へる爲に作つたノートを補訂したものだと言ふことであります。此書は極簡明な一々書から成つて居りますが、



ルミ・トーア・ユチス・ンヨジ
John Stuart Mill
(1803—1873)

餘程能く考へて行かぬと分りませぬ位キチンくと論じ詰めてあります。息子ジョンの經濟學原論は今日でも廣く讀まれる本で舊式の經濟學書の典範となつて居りますが、此書を見ますと阿父さんの教へた所が土臺となつてそれが立派な花を咲かして居ることが分ります。其他ジョン・スチュアート・ミルの著したものは論理學・自由論・代議政體論・教育論其他色々ありますが何れも非常に行はれたものでありまして、而して其内容は、論法が一點の隙を入れない様にキチンと出來て居ります。一頁飛ばして讀んだらモウ分らなくなる位です。西洋の書物でも随分二三頁飛ばしても一向差支ない冗なことを繰返して書いてあるものがありますが、ミルのは正反對で一頁ドコロカ一節を抜かしてもいけない位です。彼は一遍言つたらモウ言はない。一つことを二度言はないのです。言ふ可き所にちやんと言つて跡はモウ言はないのです。凡て物を極く正確に考へて言ひます。さういふ風に經濟學をミルが大成した。如何にもキチンとして極演繹的に出來て居ります。此れは甚だ結構でありますけれども實際の事實に當嵌めるとなると、必ずしも當らないことが起るを免れません。

四分法は英國特有の狀態に適す

乃ち經濟學四分法はミルの説いた程完全なものではないのであります。何故とならば此分方は十九世紀

の初め時分の英吉利の有様には大變適して居りました。當時英國に於ては地主といふ者と資本主といふ者とキチンと分け、又労働者と企業主といふ者がキチンと分れて別でありまして、經濟上の階級が各々對立して居ります。さうして富の分配に於て各々鎬を削つて角逐して出来る丈銘々が己の方に奪ひ合つて居つて、其間に少しの斟酌も何も無いといふ有様でありました。其状態を説明するにはキチンと四分に分た此の分け方は適切でありました。けれども今日は英吉利でさへさうでないのです。況や他の國に於ては斯様にハッキリ分れた所はありません。

四分法の缺點

然るを強て四分するのは無理であります。内容の上から言つても生産・交換・分配・消費といふ區別が何處から附くか甚だ疑はしいのであります。分り易い例を以て言へば、生産といふのは何、消費といふのは何かと申すと、富を作り、富を使ふのだと答へます。然らば富といふのは一體何ですか、只物が出来るのは富ではありません。富とは、畢竟價值のあるものといふ意味で、財といふと同じ意味であります。價值のある物が作られる、價值のある物が使はれる、略して言へば、價值の出来るのが生産で、價值の無くなるのが消費であります。價值のやり取りせられることが交換で、價值がそれ々に分たれることが分配

であります。即ち人間に取つての物の重要が始めから終り迄増して行くのです。途中で變更しないで只一本道を行くのであります。經濟行爲は一の直線であります。

例を以て説明す

例を擧げて申せば、米は百姓が先づ種籾を蒔きます、それから肥料をやつたり水をやつたり、勞力をこれに施してこれが段々生長して稲が出来ます、出来た稲はこれを苜取り、苜取つた稲の穂を取り、さうして得た米が玄米で玄米は白米にします、何れも段々價值を増して行くのです。種籾から白米になつたのは價值が大變増した次第です、此の白米を需要のある都會の地に持つて来て問屋に卸します。これも亦價值を増す所以です。田舎にあつて賣れないものが都會に持つて来て賣れるのは、價值が増したのです。其れから又た小賣屋に行きますと亦價值を増します、小賣屋から買つて我々の臺所に擔ぎ込んだ米は米の儘ではまだ我々の用には足りません。米は磨がなければなりません、炊いた米はこれをお鉢の中に入れてお鉢の中に入れては足りません。米は磨がなければなりません、炊いた米はこれをお鉢の中に入れてお鉢の中に入れては足りません、茶碗に盛らなければならぬ、盛つた飯は箸でこれを運ばなければならぬ、運んだものは更に嚙まなければならぬ、嚙んだ物を嚙下して、それで始めて我々の身體を養ふのです。抑も百姓が種籾を蒔いてから我々がそれを嚙む迄、悉く價值を増して行く一本道の